

---

# 宿命に抗いし反逆者

star

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宿命に抗いし反逆者

### 【Nコード】

N7202T

### 【作者名】

star

### 【あらすじ】

力を望んだ少年がいた。彼は世界を変えうる力を手にし、王たる資格を得た。だが彼はその強すぎる力のために全てを失い、自らの記憶を封印し眠りにつく。100年後、長い眠りより目覚めた彼は記憶を取り戻し、過去を清算するために自らが作った帝国と、王の宿命と戦う道を選ぶ 紅蓮の騎士と共に。

## プロローグ（前書き）

starといいます。

コードギアス 反逆のルルーシュ LOST COLORSの二次  
創作です。

処女作品ですが、よろしくお願いします。

## プロローグ

皇暦2010年8月10日。神聖ブリタニア帝国は、日本に宣戦布告した。

ブリタニアの最新兵器『ナイトメアフレーム』の前に、一月と持たずに敗れ去った日本は、植民地エリア11となり、自由と伝統、権利と誇り、そして名前を奪われた。

イレヴン。その数字が、新しい日本人の名前だった。

7年後、日本人が希望を失いかけたある日、一人の反逆者が立ち上がる。

仮面の男、『ゼロ』。

その正体こそ、ブリタニア帝国の捨てられた皇子、ルルーシュ・ランペルージである。

ルルーシュは謎の超美少女C・C.と出会い、いかなる相手にでも命令を下せる絶対遵守の力、『ギアス』を手に入れる。

ギアスと、武装組織黒の騎士団。二つの力を駆使して、帝国への反逆を挑む、天才戦略家ゼロ。

そのような彼に、彼が最も信頼した一人の男がいた。

謎の記憶喪失者、『ライ』。

彼は騎士団入団後、対ブリタニア戦にて数々の活躍を見せ、その道中ついに記憶をとりもどす。

その正体は約100年前、『ギアス』によって全てを失い、眠りについていた、ブリタニアの領主であった。

ライはゼロに自らの過去を打ち明け、ゼロはライに自らの素性を打ち明けた。

これは、そんな彼らの物語。

彼らの行動が、いかなる結果を生んでいくのか、今はまだ、誰も知らない。

## プロローグ（後書き）

作「どうも、作者のstarです。読んでいただいたみなさんありがとうございました。処女作で、わからないこともあるでしょうが宜しくお願いします。」

C「ふ、ついに始まったな。私の活躍劇。」

ル「…おい、C・C」

C「ん？どうしたルルーシュ？私の美声に心を奪われたか？礼ならピザでいいぞ。」

ル「プロローグを読み上げたのは別にお前でもかまわない。アニメでもお前の役目だったからな。だが…誰が超美少女だ、誰が！」

ラ「やっぱり、つつこむところだね、それ」

C「何を言う、私ほどの美貌を持った女がどこにいる？それに、私は作者の原稿を読んだだけだぞ？」

作「…台本ではただの少女だったんですけど」

カ「なんで作者の内容が変えられてるのよ…」

ラ「早くも先行き不安だな…」

ル「安心しろ、俺がいるだろう。何たって俺は奇跡を起こす男だからな！」

作「…こんな所で奇跡を起こさなくていいんだけど…見てくれる人いるかわかんないし…」「…おいつつ…!」「…いや嘘です、きつと心の綺麗な方々が見てくれていると信じています。」

ラ「…やっぱり不安だ」

作「さて、話は変わりますが、今回後書きを書いたのはご挨拶をするためと、今後の進み方を書いておこうと思ったからです。」

ル「ああ、たしかユフィが特区日本を宣言したところ、つまり1期の終わりからはじまるんだったな……ユフィ…」

作「いやルル―シュ、思いにふけているところ悪いけど、まだだから。」

ル「!!?!?なに!?!」

カ「どういう事?短編でもやるの?」

作「いや、簡単なキャラ紹介をしようと思う。すでに死んでいる人あるいは2期での出番の人以外だけだ。」

ラ「本編知らない人に少しでもわかりやすくするためだね。」

C「ふん、最初からWikiで調べればいいものを。」

作「うん、そうだね…でも一応ロスカラの設定も入れたのでどうか読んでみてください。…それでは、」

「「「「「これからよろしくお願いします!?!」「」「」「」



## キャラ設定（前書き）

お久しぶりです。

前回申し上げたとおり、キャラ紹介です。

分かりにくいときは、wikiで検索してください…

なお、データは行政特区の設立が宣伝されたときのデータです。

## キャラ設定

### 「主要人物」

ライ（本名：ライゼル・エス・ブリタニア）

本作の主人公。ルルーシュやカレン達とは同年。

ルルーシュと並ぶ美貌、綺麗な銀髪であり、学園では『幻の美形』と呼ばれているが本人は知らない。瞳の色は青。日本人とブリタニア人のハーフ。母親は皇家の血をひいている。

見た目は顕著だが、身体能力に優れ、スザクやカレンと同等のナイトメア操作技術を持つ。

状況判断能力、指揮能力に優れ、騎士団では戦闘隊長の地位を得る。チェスの腕前も相当なもので、駆けチェスをしているルルーシュと引き分けるほど。

ルルーシュと同じく『絶対順守』のギアスをもつが、ルルーシュと違い聴覚を媒介とする。

本来は100年前のブリタニア辺境の領主。日本人の母親と自分と同じハーフの妹を守るため、ギアスを得る。父親、兄を殺し、領主となるも、暴走したギアスにより、母と妹、国民全員に、「戦え」

と命じ、全てを失った。

この戦いで、敵味方全てを滅ぼした王、「狂王」と語られるようになる。

その後契約者との契約を果たせず、神根島で眠っていたが、バトラーによって発見される。身体能力の強化、現代知識やKMFの知識等を植え付けられるが、脱走。アッシュフォード学園で倒れたところをミレイに保護される。

その後、カレンを通じ、騎士団に入団。カレンと二人で「騎士団の双壁」と呼ばれる。

カレンに実は好意を持っているが、自覚はない。また、カレンからの好意にも気づいていない。

搭乗ナイトメアは月下（青）

紅蓮と同じ輻射波動を左手に持つ。

ゲームのロスカラでいうと、解放戦線でもらえるもの。（試作機ではない）ライ以外にはピーキーすぎて扱えない。近・中距離に強い。

また、強化された身体能力を用いた回避技術はすさまじく、相手はまるで亡霊と戦っているように感じてしまうほど。

ルルーシュ・ランペルージ（本名：ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア）

原作の主人公。

神聖ブリタニア帝国の第11皇子・元第17皇位継承者。

幼いころに母親が暗殺され、父親に人質として日本に送られ、その後身分・名前を捏造。

C・Cから『絶対順守』のギアスを得る。

妹・ナナリーが安心して暮らせる世界を作るため、ゼロを演じ、ブリタニアに反旗を翻す。

ちなみにルルーシュとC・Cのみライの過去を知っている。（ブラックリベリオン前）

搭乗ナイトメアは二人乗りのガウエイン。（C・Cと同じ）

声優：福山潤

紅月カレン（カレン・シュタットフェルト）

本作のヒロイン。また原作同様（？）お色気担当。  
日本人とブリタニア人のハーフ。

レジスタンスだった兄の遺志を継ぎ、日本解放のため戦う。  
騎士団のエースであり、ゼロ直轄である零番隊の体長を勤める。

ミレイにライの「お世話係」を命じられた。当初は嫌がっていたが、彼が自分と同じハーフだと知り、ライの本質に触れ、徐々に好意も持つようになる。

しかし、ライはまったく気づかないため、振り向かせようと努力している

搭乗ナイトメアは紅蓮式。

声優：小清水亜美

C・C・

謎が多い少女。不老不死であり、即死の傷を受けても治る。  
当然ながらC・Cとは偽名であり、本名はルルーシュしか知らない。

ルルーシュにギアスを与えた張本人。ライの存在にも最初から気づいていた。

ピザが好物。

搭乗ナイトメアは二人乗りのガウェイン。（ルルーシュと同じ）

声優：ゆかな

## 枢木スザク

日本最後の首相、枢木玄武の息子。

ルルーシュ、ナナリーとは日本侵攻前に知り合う。7年前、日本をブリタニアの侵攻から守る為、徹底抗戦を唱えていた玄武を殺害したが、敗戦国となった日本の惨状を目の当たりにし、「間違ったやり方で得た結果に意味はない」という考えに至り、結果より過程を重んじるようになる。

その為、目的のためには手段を問わず結果を最重視するルルーシュとは相容れず、対立する運命となる。

ユーフェミアに好意を持っており、彼女の選任騎士に着任する。

……物語とは関係ないが作者の嫌いな人物である。

搭乗ナイトメアはランスロット。

声優： 櫻井孝宏



## キャラ設定（後書き）

ス「ちょっと、どういうこと！？」

作「あ、今回初出場のスザク君じゃないですか。」

カ「そういえば、前回の後書きで唯一いなかったわね…」

ス「そうだよ！そして何で僕のこと嫌いとか書いてるんだよ！」

作「ボク、『ギゼンシャ』ツテキライ。」

ル「なぜカタコトなんだ…」

作「他にも理由あるけど…ライの目の前で言っているの？」

ラ「？なぜ僕？」

作「神根島で裸のカレンを押し倒したり…『がはっ！いやライ、ちがっ、』…捕虜になったカレンをいやらしい目で見たり…『ぐふっ！！だか、ら…』カレンを拘束着にさせて独房に押し込んだり…『つつっ！！…』カレンにリフレインを打ち込んで自分好みにしようとしたり…『あ、れ、は…』カレンを…」

ル「おい、もうそのへんにしとけ。見るに耐えん。」

Ｃ「…もう手遅れだと思うぞ…」

スザクだった物「……………」



ラ「さて、ゴミ掃除も終わったし今回の話をしようか。」

「「「（黒っ！！！！！）」「「「」

作「うん、そうですね。では説明をしたいのはライの機体、『月下』についてです。」

Ｃ「あれはどういうことだ？月下なのに試作機ではないとは」

ラ「本当ならナリタの戦いの後もらったのは試作機のはずだけど…」

作「そのことですが、ライが月下を手にしたのは四聖剣と同じ、つまり藤堂奪還のときで、開発スピードは他の月下と同じだったという事です。ほら、ラクシャーが言ってたでしょ？『本当は月下にも輻射波動をつけるつもりだった』って。」

ラ「確かに言ってたな。四聖剣が取り付けに反対したそうだけど…」

カ「でも、そうするとギルフォードとの対決は？」

作「あの戦いときは、専用機が間に合わないということでライは全体の指揮を執ってました。前線はゼロとカレンに任せて。」

ル「戦闘隊長でありながら補佐の仕事をするとはな…」

作「まあ、そんな感じです。他の設定は原作や他の小説と似た感じですよ。」

ル「しかし、本当にライのスペックは高いな…」

「バランスや総合能力ならおそらく1、2を争そつだらうな。」

作「なお、自己紹介ですが、まだ続きます。騎士団や軍の紹介を終えてから本編に入ろつと思ひますので宜しくお願ひします。」

## キャラ設定2（前書き）

前回の続きです。

## キャラ設定2

### 「学園」

ナナリー・ランペルージ（本名：ナナリー・ヴィ・ブリタニア）

ルルーシュの妹。ルルーシュは重度のシスコンであるが、彼女もブラコンぎみ。

母親が暗殺された際、共に現場にいたナナリーは足を撃たれ歩けなくなり、さらに精神的ショックから失明してしまう。そのため常に車椅子であり、幼少時からルルーシュの世話になっていた。（ルルーシュが家事が得意なのはこのため）

目が不自由だが、その分、触覚が優れており、手をさわることで他人のきもちを感じたりできる。

本人曰く、ルルーシュとライは似ているらしく、学院の人物の中では比較的早くライに心を開いている。

声優：名塚佳織

ミレイ・アッシュフォード

アッシュフォード学園の生徒会会長。ルルーシュも頭が上がりない。大のイベント好き。

ちなみに、ルルーシュは副会長である。

ライを保護し世話をした。

声優：大原さやか

シャーリー・フェネット

水泳部と掛け持ち。ルルーシュを「ルル」呼んで慕っている。

ルルーシュに想いを寄せていたが、「ナリタの戦い」でゼロが起こした土石流により、父親を失う。

その後ゼロ「ルルーシュと知り、父の敵を討とうとも考えるが、ルルーシュへの想いが彼女を思い留まらせた。

その後ルルーシュのギアスによって彼に関する記憶全てを失うが、部屋にあった自分が書いた手紙を見つけゼロ「ルルーシュだと疑っている。

声優：折笠富美子

リヴァル・カルデモンド

ルルーシュの悪友。ライにも仲良く接している。  
ミレイに好意を抱いているが、実る気配なし……

声優： 杉山紀彰

ニーナ・アインシュタイン

ミレイの幼馴染。ユーフェミアに助けられ、それ以来彼女を敬愛している。

化学が得意で、ロイドが興味を持つほどの研究をしている。

声優：千葉紗子

アーサー

スザクが連れてきた猫。

篠崎咲世子

クラブハウスでルルーシュとともにナナリーの世話を担当するメイド。

SPを輩出する流派・篠崎流の37代目であり、超人的なまでの身体能力と変装術を持つ。

スザクのユーフェミアの騎士に就任して以来、日本人がブリタニアに恭順することを憂いて、黒の騎士団に入団。現在はディートハルトに直属の隠密として活動中。

声優：新井里美

「黒の騎士団」

扇要

黒の騎士団の母体となった「扇グループ」のリーダーだった。戦前は教師。

優柔不断な面だが、温厚な性格や人望があることから副指令にく。

ゼロについて口にしたヴィレッタを匿い、以後同居。千草と名づける。

行政特区日本設立の際、騎士団の特区への参加を率先して提案した数少ない幹部。

余談だが、作者が最も嫌いなキャラ。……ロスカラるときはまだよかったんだけどなあ……

声優：真殿光昭

玉城真一郎・南佳高・杉山賢人・井上直美・吉田透

騎士団の創設時からの幹部。

声優：田中一成 / 加瀬康之 / 杉山紀彰 / 井上喜久子・小清水亜美 / 蓮池龍三



藤堂鏡四郎

黒の騎士団の軍事総責任者

7年前、ブリタニアに唯一土をつけたことから「奇跡の藤堂」と呼ばれる。

スザクの武術の師でもある。

搭乗ナイトメアは月下指揮官機（黒）

声優：高田裕司

『四聖剣』

旧日本軍の頃からの藤堂の部下。

ブリタニアに藤堂が捕まった際、黒の騎士団に救出を依頼し共闘。その後は黒の騎士団へ合流。各隊の隊長となる。

搭乗ナイトメアは全員が月下（灰色）

朝比奈省悟

壱番隊隊長。

「藤堂さんのいる場所が俺のいる場所」と豪語するほど藤堂への

忠誠心が深い。

醤油が大好き

声優：私市淳

仙波峻河

貳番隊隊長。

メンバー最年長。四聖剣の中で唯一大尉の位にいた。（他は皆中尉）

個性多き四聖剣のまとめ役。

声優：島香裕

千葉凧沙

四番隊隊長。

四聖剣の紅一点。ひそかに藤堂に恋心を抱いている。料理が上手い。

声優：千葉紗子

ト部巧雪

五番隊隊長。

長身・青髪が特徴。

虫料理を好んだり、目玉焼きにはメープルシロップをかけるなど変わった味覚を持つ。

作者がロスカラや2期で好きになったキャラ。四聖剣の中で1番好き。出番がもっとあってもよかったと思う。

声優： 二又一成

ディートハルト・リート

騎士団の数少ないブリタニア人。

状況判断・推察力に優れ、あのゼロでさえも「卓越している」と評価、重宝している。情報全般・広報・諜報・渉外の総責任者に任命される。

元はブリタニアのプロデューサーだったが、ゼロを「カオスの権化」と賞賛、1番近いところで撮りたいと考え騎士団に入団した。

ライの技量を認めてはいるが、ゼロのカリスマの邪魔になる可能性があると危険視し、一時期はライの排除をゼロに進言した。

声優：中田譲治

ラクシャータ・チャウラー

中華連邦・インド軍区出身の女性技術者。紅蓮式式や月下の開発者。

騎士団の技術開発担当。ゼロを「面白い男」と称している。

ブリタニア本国に留学していた時期があり、ロイドとセシルはその頃のゼミの同輩だが、ロイドを「プリン伯爵」と呼び嫌っている。

声優：倉田雅世

『キョウト六家』

通称キョウト。黒の騎士団など、反帝国活動者を援助する。

皇神楽耶

キョウトの当主で、お飾り的な扱いだが、幼いながら確固たる信念を持つ。

スザクとは従兄妹にあたるが、ブリタニアに服従したスザクをひどく嫌っている。

ゼロへ執心している。

ライの正体が明かされてからは、ライを兄の様に慕っている。

声優：かないみか

桐原泰三

キョウトの一員。サクラダイト採掘業務を一手に担う桐原産業の創設者。敗戦後はブリタニアの植民地支配への積極的協力者となったため、「売国奴の桐原」の異名を持つ。

しかし、その裏でレジスタンスに資金援助などをしていた。幼少期のルルーシュと面識がある。

ゼロの正体を知る数少ない人物。

声優：辻親八

## キャラ設定2（後書き）

ル「…まだ紹介が続くのか。」

作「今回は学園と騎士団の紹介です。次回はブリタニアの紹介を、その後本編に入ろうと思います。」

ラ「皆さん、頑張るので、応援してください。」

## キャラ設定3（前書き）

ブリタニア編

これで最後です。

次回から本編に入ります。

## キャラ設定3

### 「ブリタニア帝国」

#### ブリタニア皇族

#### シャルル・ジ・ブリタニア

神聖ブリタニア帝国第98代皇帝。ルルーシュやナナリーの父親。弱肉強食を唱える実力主義者で、「不平等においてこそ競争と進化が生まれる」という持論を持つ。ロールケーキバツハ。

声優：若本規夫

#### マリアンヌ・ヴィ・ブリタニア

ルルーシュとナナリーの母親。庶民出身だが、騎士候に叙せられた後シャルルに嫁ぐ。

二つ名は「閃光のマリアンヌ」。



アリエス宮にテロリストが侵入し、暗殺されたと言われているが、その死には不可解な点が多く、彼女の死の真実を知ることもしュの目的である。

声優：百々麻子

シュナイゼル・エル・ブリタニア

神聖ブリタニア帝国第2皇子で帝国宰相。ルルーシュをも凌ぐ政治・軍事的策略と決断力を兼ね備える、皇帝に最も近い存在。独自にシャルルの動向を探っている。紳士的な笑みとは裏腹に、他人はおろか自分の命にさえ執着しない冷徹さを併せ持つ。

声優：井上倫宏

コーネリア・リ・ブリタニア

神聖ブリタニア帝国第2皇女で、現エリアー1総督。ユーフェミアを溺愛している。マリアンヌを敬愛しており、暗殺事件に関して独自の調査を進めている。

「ブリタニアの魔女」の異名で、高い指揮能力とKMF操縦技術を併せ持つ。

搭乗機はグロースター（専用機）

声優：皆川純子

ユーフェミア・リ・ブリタニア

神聖ブリタニア帝国第3皇女で、コーネリアの妹。愛称はユフィ。  
現エリア11副総督。

スザクを自分の専任騎士へと任命する。  
「行政特区日本」の設立を宣言した。

声優：南央美

軍人・研究員

ジェレミア・ゴットバルト

ブリタニアの名門であるゴットバルト家出身で、辺境伯の爵位を持つ。

KMF操縦技量は高く、好戦的な性格ゆえ戦闘時には自らKMFで出陣。皇族への高い忠誠心が主であり、マリアンヌのことを敬愛していた。初任務がマリアンヌの住むアリエス宮の護衛であり、彼女を守り切れなかった過去を持つ。その後悔から皇族を守り抜くという決意を固め、ブリタニア人のみで構成した「純血派」を結成しそれを率いている。

「オレンジ」というハツタリにより汚職を示唆された上、ゼロのギアスにかかり、ゼロ達を逃がしてしまう。以後周囲より「オレンジ」と蔑まれ、軍での階級は3階級降格処分となり完全に失脚、さらにナリタ攻防戦で身体に深刻なダメージを受け、MIA（戦闘中行方不明）となる。不幸な人。

しかし、バトラー傘下の研究員達に拾われており、C・C・（CODE-R）の特性を疑似的に再現するための実験適合生体として改造される。このような過去から、ゼロに深い恨みを抱いている。

作者がブリタニア軍の中で最も好きなキャラ。

搭乗機はサザールランド

声優：成田剣

ヴィレッタ・ヌウ

純血派メンバー。生まれの低さから貴族への憧れを持つ。シンジユク事変でサザールランドを奪われた時、ルルーシュにギアスを掛けられている。単独で調査を行い、ゼロの正体を知るも、ルルーシュを想うシャーリーの銃撃で負傷、記憶喪失となる。扇に保護されて以降、繊細・温厚な性格へと変わり、「千草」と呼ばれ互いに惹かれあう。

作者がブリタニア軍の中で最も嫌いなキャラ。

声優：渡辺明乃

アンドレアス・ダールトン

コーネリア率いる軍の将軍。日本占領作戦にも参加していた。スザクの能力も認めている。  
戦災孤児を養子として引き取って育てており、グラストンナイツはその中のエリート騎士である。

搭乗機はグロースター

声優：梁田清之

ギルバート・G・P・ギルフォード

コーネリア親衛隊隊長で彼女の騎士。「帝国の先槍」の異名を持つ。

搭乗機はグロースター

声優：幸野善之

『グラストンナイツ』

アンドレアス・ダールトンの養子達の中で、軍人となった5人で構成されるエリート騎士集団。

メンバー

クラウドディオ・S・ダールトン／エドガー・N・ダールトン／デヴィッド・T・ダールトン　／アルフレッド・G・ダールトン／バート・L・ダールトン

声優：加瀬康之／田中伸幸／私市淳／蓮池龍三／杉山紀彰

バトラー・アスプリウス

シュナイゼルを「我が君」と呼ぶ研究者。現在、ジェレミアを実験体として「CODE-R」の研究を行っている。

ライを発見し、身体能力の強化、現代知識やKMFの知識等を植え付けた。

ロイド・アスプルンド

特別派遣嚮導技術部（特派）の主任であり、ランスロットの開発者伯爵でありながら、上下関係や社会的タブーに無頓着で、彼の意向によって研究施設内では階級・爵位といったものは不問とされている。

非人間的であるような振舞いが目立つが、スザクやセシルを気にかけるような一面も見せており、時折彼らに味わい深い助言や忠告を

送る事もある。

声優：白鳥哲

セシル・クルーミー

特別派遣嚮導技術部（特派）の一員。ロイドの補佐を務めるオペレーター。フロートユニットの考案者。普段は温厚だが怒らせると怖い。時には鉄拳がとんでくることも。

料理が好きだが、味覚音痴であり、奇抜な創作料理をよく作る。  
（悪気が無いため、スザクたちは断れない。）

声優：井上喜久子

### キャラ設定3（後書き）

ジェレミア「…おはようございました」

作「…まだ壊れてる。」

カ「呼ばないほうがよかったんじゃない？」

Ｃ「というより、なぜ呼んだ？」

作「いや、好きなキャラだし…『ああ、理解はシアワセ。私めを貴方様の好きなキャラにいれてくださったのですね？』…面白いし。」

ラ「…読みづらくなればいいんだけど。」

ル「ふん、ライよ、今のオレンジに言っても無駄だ。」

ジェ「オ、オ、オ、オ、オ…お願いです！！読んでいただけないでしょうか？」

作「…ヤバイ、宣伝に使える。」

カ「遊ばないの。次から本編に入るんでしょ。」

作「そうです。皆さん、長らくお待たせしました。次から本編に入ります。どうか応援お願いします。」

ジェ「オール・ハイル・ブリタニア！！！！！！」

作「…うん、もういいから」

ラ「文才に欠ける作者ですが、どうぞ見てください。ではまた次回。」

作「…の前に、今回から次回予告をしたいと思います。見たい人だけ見てください。ナレーターは基本ライです。」



## 次回予告

行政特区日本…

制限があるとは言え、虐げられた日本人にとっては理想的だろう。

だが、結局は夢物語に過ぎない。籠の中の鳥となるだけだ。

参加するか。それとも、参加せずにいるか。

どちらを選んでも黒の騎士団は今の形を失ってしまう。

一体、僕達はどうすればいい？

ゼロ、君はいつたいどの道に行く？

NEXT STAGE 「揺れる騎士団」

## STAGE 1 揺れる騎士団（前書き）

やっと、やっと本編に入ります。

皆さんお待ちせしました。

分かりにくい部分があるでしょうが、ご了承ください…

## STAGE 1 揺れる騎士団

「行政特区日本か…」

黒の騎士団アジトで一人呟くライ。

現在、騎士団内では行政特区日本に参加するか否かで意見がわかれていた。

『行政特区日本』 ブリタニアの統治の中、イレブンではなく、日本人としての権利を取り戻せる政策。

参加すれば武装は解除され、日本独立という騎士団の存在意義が無くなる。

逆に参加しなければ平和の敵とみなされ、騎士団は民衆の反感を買うことになる。

どちらを選んでも騎士団に何かしらの影響を与えることになるため、ライは考えが一向にまとまらなかった。

副指令である扇までが特区への参加を促し、幹部間でも主張が対立し、方針が決まらない。

「大丈夫？ ライ、あなたでもやっぱり決めきれないのかしら？」

「カレン……」

ライは考えることに集中していたせいか、カレンが近づいてきたことに気づかなかった。

「うん、どちらを選んでもデメリットが生じる。ゼロも迷ってるらしいしね」

「そっか……ゼロはどうするつもりなのかしら」

「わからない。でも、どちらを選んどし」「おい、ライ」ても……  
なんだいC・C」

突然C・Cが二人の会話に入り込む。

「そう怒るな。ゼロがお前を呼んでいる。さっさと来いとのことだ」

「……ゼロの考えはまとまったのか？」

「さあな、私は呼んでくるよう言われたただけだ。後は本人に聞いてくれ」

それだけいうとC・Cは戻っていく。

「（……相変わらず神出鬼没だな。）それじゃあ、僕は行くよ、カレン」

「うん、また後でね。」

カレンとわかれたライはゼロの部屋へと向かう。

「ゼロ、僕だ入るぞ」

「ああ、ライか」

鍵がかかったのを確認するとゼロは仮面をはずす。

「それで、どうするつもりだルーシュ？」

「正確にはまだ決まっていない。当日、ユーフェミアと会談し、その本心によって決めようと思う。」

「……そうか」

妥当と言える判断だろう。今ここで参加か否かを決めるのは早計だ。

ユーフェミアが騙すとは思えないが、ブリタニアという国は信用

できない。彼女の主張が本当に信頼できるというのならば参加すれば良い。

「そこで、ライ。お前はガウェインにC・Cと乗り、俺と一緒に来てほしい」

「ああ、いざというときは駆けつける」

「ふっ……頼りにしているぞ。戦闘隊長殿」

「了解」

そうして、彼らは式典当日を迎える。

どのような結果になると、現状が変わりゆく日を。



## STAGE 1 揺れる騎士団（後書き）

作「やった――――！！！」

ル「うるさい！！」

作「だって、やっと本編に入れたんだよ！？感動ものだよ！？」

ラ「…なにしろキャラ紹介で随分かったからね…正直この先も不安だよ。」

カ「キャラ紹介の方が時間がかかりすぎ、だけどやめられないと言ってたわね。」

作「だけでもう大丈夫です！次回も少しはできてます！」

Ｃ「少しなのか…それでいいのか作者。」

ラ「普通なら大丈夫じゃないよね。」

カ「というかダメでしょ。」

作「そこ、うるさい！とにかくがんばるので見てください！それじゃあライ君、次回予告をどうぞ。」



## 次回予告

式典会場に降り立つ僕達。

そこで待っていたのはユーフェミアとスザク。

ゼロはユーフェミアと、僕はスザクと話し、相手の本意を探り出す。

だけど…やはり変わらない。僕が知っているスザクだ。

ひょっとしたら、本当に僕達は……

NEXT STAGE 「招かれざる悲劇」

## STAGE 2 招かれざる悲劇（前書き）

家にかえってみたら、お気に入り登録者が増えていた！！

感動し、気がついたらできていたので、昨日3回投稿しましたが今日も投稿させていただきます！！

皆さんの応援や登録が元気の源です！！どうかこれからもお願いします！！

## STAGE 2 招かれざる悲劇

式典当日

「それじゃあカレン、行つて来るよ」

「万が一のときは私達も駆けつけるけど……」

カレンがライの手を握る。

「気をつけてね」

カレンに返事を返しライはC・Cとガウエインに乗る。

「随分と仲の良いことだな」

「……何が言いたんだ、C・C」

「別に。騎士団の双壁の關係が良好なようでありだ」

「……（本当に彼女の言うことがたまにわからない。何か変なこと言っただろうか？）」

女心にとことん疎い戦闘隊長であつた。

1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9
10	10	10	10
11	11	11	11
12	12	12	12
13	13	13	13
14	14	14	14
15	15	15	15
16	16	16	16
17	17	17	17
18	18	18	18
19	19	19	19
20	20	20	20
21	21	21	21
22	22	22	22
23	23	23	23
24	24	24	24
25	25	25	25
26	26	26	26
27	27	27	27
28	28	28	28
29	29	29	29
30	30	30	30
31	31	31	31
32	32	32	32
33	33	33	33
34	34	34	34
35	35	35	35
36	36	36	36
37	37	37	37
38	38	38	38
39	39	39	39
40	40	40	40
41	41	41	41
42	42	42	42
43	43	43	43
44	44	44	44
45	45	45	45
46	46	46	46
47	47	47	47
48	48	48	48
49	49	49	49
50	50	50	50
51	51	51	51
52	52	52	52
53	53	53	53
54	54	54	54
55	55	55	55
56	56	56	56
57	57	57	57
58	58	58	58
59	59	59	59
60	60	60	60
61	61	61	61
62	62	62	62
63	63	63	63
64	64	64	64
65	65	65	65
66	66	66	66
67	67	67	67
68	68	68	68
69	69	69	69
70	70	70	70
71	71	71	71
72	72	72	72
73	73	73	73
74	74	74	74
75	75	75	75
76	76	76	76
77	77	77	77
78	78	78	78
79	79	79	79
80	80	80	80
81	81	81	81
82	82	82	82
83	83	83	83
84	84	84	84
85	85	85	85
86	86	86	86
87	87	87	87
88	88	88	88
89	89	89	89
90	90	90	90
91	91	91	91
92	92	92	92
93	93	93	93
94	94	94	94
95	95	95	95
96	96	96	96
97	97	97	97
98	98	98	98
99	99	99	99
100	100	100	100

会場に着くとゼロはユーフェミアと会談をするためG1ベースへ。  
ライはスザクと話をするためガウエインから降りる。

「君も来ていたのか」

「ああ、ゼロの護衛としてね」

「……ゼロとユーフェミア様。もしものことがあったら……」

スザクが鋭い視線をライにぶつける。やはり、スザクはゼロを信じていないようだ。

「そのときは全力でかかって来い僕も手加減はしない（そうだ、たとえ君を討つことになるうと……）」

「うん、でも僕はひよっと思ってる」

「……？」

突然スザクが笑みを浮かべる

「僕達は今、同じ道を歩いているんじゃないかと思うんだ」

「互いの道が交わる、それが今だと？」

「そう、そうすれば僕達はすぐに握手をすることになるね」

「……スザク。（スザクとの和解。僕だつてできればそうしたい。ルルーシュだつて……やはりスザク、君は軍人に向いていない。君は優しすぎる。）」

とても軍人とは思えない甘い考え。それでもそれが彼の知る枢木スザクである。

「!？ 君は？」

「？」

突然スザクが何かを感じたように振り向く。  
そこでは、C・Cが額を押さえ苦しんでいた。

「!？ まさか……こんなにも早く？」

「どうした？」

「C・C・!？」

C・Cに駆け寄るライとスザク。だが、二人がC・Cに触れた瞬間、異変が起こる。

「!？ う、ああ……」

「!？」

スザクは倒れ、ライの頭の中にもあるイメージが。

（これは……！？ ルルーシュ？ ……！ この感覚、まさかギアスの暴走か！？

まずい！ 早くルルーシュをとめないと！！）

ライはすぐさまゼロの元へと向かう。するとそこにユーフェミアが走ってきた。

「ユーフェミア様？」

スザクの主であり、ルルーシュの義妹。その女性は微笑を絶やさないまま、ライの前まで駆けてきた。

「ユーフェミア様。ゼロは？（なぜ、ユーフェミアが一人でG1ベースから出てくる！？ ルルーシュはどこに？）」

「あら？ あなた、日本人の方ですね？」

「？ それが何か……「パン！」！？ がっ！」

だがライが答えきる前に、ユーフェミアが放った銃弾がライを襲った。

「ユ、ユーフェミア……様？」

膝から下の力が抜ける。そのままライは天を見上げるように地面にドサリと倒れた。

「な……ぜ？」

ライは弱々しく問う。しかしユーフェミアの答えは……

「ごめんなさい、でも日本人は皆殺しにしなければいけないの」

「！(……遅かった、のか)」

ユーフェミアはそのまま会場へと走り去っていく。

「ごめん、ルルーシュ。僕は……とめられ……な……かった」

そうしてライはそのまま意識を手放した。



## STAGE 2 招かれざる悲劇（後書き）

作「ユーフェミアを……止められませんでした…」

ル「ユファイ…」

作「こうしなければ、正直ネタが思いつきませんでした。期待していた人申し訳ありません。私にご都合主義とか無理です。」

カ「そして、次回に続くと…」

作「はい、ライ君が負傷し、物語はどうなるか。次回予告は負傷したライ君に代わり、ルルーシュに任せます。」

ル「…いいだろう、引き受けた。」

## 次回予告

これが……ギアスの力か!?

ライはこれと同じ……いや、それ以上の苦しみを味わったというのか……

俺はライの過去を知りながら、悲劇を繰り返してしまったのか!?

……もう、俺には進むしかない。ライのためにも……

退く事はできない……いや、許されない!!

NEXT STAGE 「閉ざされた道」

### STAGE 3 閉ざされた道（前書き）

sideで書いてみました。

自分では頑張ったと思うんですが、不自然ならば言ってください。

### STAGE 3 閉ざされた道

- - ルーシユ side - -

「くそっ！！早くとめなければっ！！」

俺のせいだ、俺がギアスのことをもつと理解していれば……！！？  
俺は床に倒れている人影を見つけ立ち止まる。あれは……ライ！  
？ まずい、血が止まっていない！

「ライ！ おいつ、ライ！！ しっかりしろ！」

「……ル、ルーシユ、ユー、フェミアは……」

「……ああ、俺のギアスが暴走した……俺のせいだっ！」

「急げ、早くし……ないと、日本人が」

「だがお前とてその傷が……わかったライ、少し待っててくれ。すぐに戻る」

「あ……あ、早く、行け。」

自分よりも皆を優先してくれたライのためにも、今はユフィをとめなければならぬ。俺は再び走り出した。

- - ルルー シュ side end - -

- - カレン side - -

私は紅蓮式式の中で、式典会場での異常に気が付いた。

「何！？ 会場で何が起こってるの？ ゼロは？ ライは？」

『今、確かめてるよ！』

玉城が声を荒げる。

すると程なく、私のモニターに会場の映像が映し出された。

……そこには会場内の、日本人の血が映っていた。

「な、何っ？ 何よっ、これ！ ……どうなってるの！？ ゼロは！？ ライは！？ ライ！」

ライの通信機に何度も呼びかけているのに、返事は無い。すると

そこに、ゼロから団員全員へ、強制通信がかかってきた。

- - カレン side end - -

- - ルルー side - -

「くっ!!」

なんとかC・Cと合流し、ガヴェインに乗り込んだ。

……だが、俺はあまりの事態に声を荒げずにはいられない。

「驚いたぞ。まさかここまでするとは……」「俺じゃない!!」  
「なにつ!!? つつ!!?」

C・Cが俺のほうを向き驚愕する……C・Cも気がついたの  
だろう。

俺の目が、ギアスを発動していないのにも関わらず赤みがかった  
いることに。

「俺はギアスをかけていない……いや、かけたつもりは無かった」

「……（そうか、やはりさっきのは）」

「分かっていて俺は契約した！ この力がヤバイということくらい！  
ライの過去の話とて、決して嘘でないということくらい！！  
……なのに！！！」

俺はライの忠告を聞きながら……同じ過ちを繰り返してしまった  
！

再び多くの血を流してしまった……惨劇を生み出してしまった！！

しかし時は止まることを知らず、そんな間にも事態は進んでいく。  
ついに、ブリタニア軍が進撃を開始した。

「おい、会場の外にもブリタニア軍が出てきたぞ！」

「……ああ、こうなったらユーフェミアを最大限利用するしかない。  
それが……せめてものっっ！！」

近づいてきたブリタニアの航空機をハドロン砲で破壊し、俺は騎士団全軍に命じた。

『黒の騎士団総員に告げる！』

……そう、もうこうするしかない。  
そうでなければ、ユーフェミアの犠牲も、ライの覚悟さえも、全てが完全に無駄になってしまう。

だから……！！

- - ルルーシユ side end - -

- - カレン side - -

『黒の騎士団総員に告げる！』

「ゼロ！」



私はゼロの無事を喜んだ。

良かった。ライはゼロと一緒にいた。ゼロが無事ならきっとライも無事なはず。

そう思っていた。

『ユーフェミアは敵となった！ 行政特区日本は我々をおびき出すための卑劣な罠だったのだ！』

「！？ ……ゼロッ！ ライは……ライは無事なんですか？」

私は思わず聞き返してしまう。しかし……

『ライは、戦闘隊長は……ブリタニアの虐殺をとめようとし、ユーフェミアの凶弾に倒れた！！ 今も尚、会場内にいる！！』

「！？」

……ライが？ 撃たれた！？ なんで、なんでライを！？

『自在人型走行機部隊は至急会場内に突入、ブリタニア軍を壊滅し、日本人を……戦闘隊長を救い出すのだ！ 急げ！！』

「うわああああああ！！！」

許さない！ 許せない！！  
私は部下に命令を下すのも忘れ、紅蓮式を動かした。

「許さない……よくも、よくもライをつ……！ ユーフェミアアアアアッ！！」

「ユーフェミア・リ・ブリタニアを……見つけ出して殺せっ！！！」

ゼロに言われなくてもわかっている！！  
ユーフェミアは……必ず！

- - カレン side end - -

こうして交わるはずだった

道は再び閉ざされた

### STAGE 3 閉ざされた道（後書き）

作「ついに戦いに…」

ル「やはり、戦いは避けられないか…」

カ「…あれ、ひょっとして次がはじめての戦闘シーン？」

作「そうなんですよねえー。でも正直戦闘シーンはほとんどないと思います。原作でもあそこの戦闘シーンそれほどでは無かったし…まず私書けないし…」

C「出たな、本音。」

作「はい、すみません。みなさん許してください。  
最後に次回予告、ルルーシュまた頼むね。」

ル「別に構わんが…いつになったらライは出てくるんだ？」

## 次回予告

日本人が、ライが撃たれたことで騎士団は激昂、ブリタニア軍に総攻撃をかける。

平和な会談となる場所はたちまち戦場へと変貌した。

ギアスは力。そして強すぎる力は時に破滅をもたらす。

俺の力がこの惨劇を生んだというのなら…

せめて俺が…終わらせよう。

それが…俺の贖罪だ。

NEXT STAGE 「せめて哀しみとともに」

## STAGE 4    せめて哀しみとともに（前書き）

戦闘パートがうまく書けない……

誰かコツみたいのを知っている人いれば教えてください……

## STAGE 4　せめて哀しみとともに

- - 藤堂 side - -

『ユーフェミアは我々を裏切った！全軍、突撃せよ！』

通信機からはゼロの命令が響く。部隊に命令を下し、私も月下で出撃する。

……結局、ブリタニアは何も変わっていないのか……

「このっ！イレブンが！！」

我々の接近に気がついたのか、グロースターがこちらに銃撃をしかける。

……やはり、その名で呼ぶのかっ！

「そうか、やはり……それが狙いか！！」

私はすれ違いざまにグロースターに回転斬りをしかける。制動刀の威力に負け、グロースターの頭が吹き飛び、相手のナイトメアはそのまま戦闘不能に陥る。

……このままなら負けはないだろう。相手は我々より戦力に乏しく、またコーネリアやギルフォードといった主戦力もない。

だが、気がかりなことが一つだけある……ライ君だ。

ゼロは彼がまだ会場内にいると言っていた。虐殺が行われている中、彼の安全は保障できない。ならばここは……

「紅月君！ 君はゼロ番隊を率い、先に会場内に行ってくれ！ 外の敵は我々が引き受ける！ ……仙波、卜部、お前達も続け！」

「！ 私がですか！？」

「ライ君はまだ会場内にいる！ 彼をここで失うわけにはいかない！ 行ってくれ！！」

「！！ はい！！ 必ず助けます！」

「仙波、卜部。お前達もしっかり援護してやれ！」

「『承知！』」



ライ君のことは彼らに任せればひとまず大丈夫だろう。  
ゼロのガウエインも今、空から式典内部に入り込んだ。ならば……

「残ったものたちは敵を殲滅しつつ、日本人を避難させる！日本人は我々の手で守るんだ！！」  
『了解です！』

私は再び月下を、せまるグロースターとサザーランドの小隊へと向けた。

- - 藤堂 side end - -

- - カレン side - -

ライ！ ライ！！ ……どこにいるの！？

先ほどから生命反応を探してはいるものの、グロースターやサザ

ーランドに遭遇するばかりでなかなか先へと進めない。仙波さんやト部さんもいるから敵の心配はしていない。

だけど……！？ 生命反応が！？ まさか……

「！ ライ……！」

いた！ 会場の奥に！！ 私はナイトメアから降り、すぐに彼に駆け寄った。

「ライ！ 大丈夫！？」

「……………」

！ 意識がない！ 脈はあるけど、早くしないとこのままじゃあ……！！

「仙波さん！！ ト部さん！！」

「分かっておる、すでにラクシャータと連絡を取った。治療の準備はできておるそうだ」

「俺と仙波大尉の隊でお前達を囲む盾となる。急げ、紅月……！」

2人は私よりも落ちついていて、すでに対応をしてくれていた。  
本当に頼もしい。

「はい！一刻も早くライをラクシャータさんのところに！」

私はライと一緒に紅蓮に乗り込み、ラクシャータさんの下へと向かった。

だから……それまで無事でいて、ライ……

- - カレン side end - -

- - ルルー シュ side - -

ラクシャータから、ライはなんとか戦線離脱できたという報告を受けた。これでライのことはひとまずは大丈夫だろう。

あとは……ユフィだけ……

「無礼でしょう！ 私はブリタニア帝国第3皇女、ユーフェミア・リ・ブリタニアですよ！！」

「！！……そうか、君がああ皇女さんかい？」 「日本人の仇、今ここで！」

朝比奈と千葉がついにユフィを見つけたか……  
まさか、あのユフィがグロースターに乗って人を殺しているなんてな。一体誰が想像できたことだろう？

「待て！ 彼女は私が討つ。」

俺はガウエインのスラッシュハーケンでユフィの乗るグロースターの接合部を切断、グロースターは崩れ落ちる。  
ユフィがナイトメアから降りるのをみて、俺もガウエインから出る。

「あら？ ゼロ！？ なんだ、日本人の方かと思っちゃった」

「……………」

「あの、良かったら私と行政特区日本を……あら？　日本？　えっ  
と……」

「ああ、できればそうしたかったよ。君と、共に……」

俺はユフィに……銃口を向けた。

そして……

“パァン！”

「！（……え？　どうして？　……ルルーシュ）」

……さようならユフィ、多分初恋だった……

「うわあああああああ……！！！！！！」  
「……！　スザク！？」

突然、朝比奈や千葉の迎撃を無視し、ランスロットが急降下。ユ  
ーフェミアを抱えあげとんでいった。

だが、無駄だスザク。。ユフィは、もう…

- - ルーシユ side end - -

## STAGE 4    せめて哀しみとともに（後書き）

作「アニメどおりの展開に…ライは未だ目覚めず…」

ル「初めての戦闘シーンの回であつたが、5行にも満たない…」

カ「…あらかじめ言つてたけど…」

作「でも、大丈夫！2話後くらいには本格的に戦闘シーンを書いていこうと思うので！」

Ｃ「何が大丈夫なんだ？」

作「そこは気にしないで！それより、物語は本格的にブラックリベリオン編に突入！できるだけすぐに投稿できるようにするので応援宜しくお願いします。それでは今回はＣ・Ｃ、次回予告どうぞ！」

Ｃ「ん？今回は私か？まあいい、ピザ3日分で受け持ってやろう。」

## 次回予告

騎士団はライという最大戦力を欠いたままついに決戦の地へ…

だが、最高の理解者を、最高のパートナーを失った者達は彼の存在の大きさに気付き、一人震える。

止まらぬ時間の中、彼らは再び立ち上がれるのか？

NEXT STAGE 「決意」



## **STAGE 5 決意（前書き）**

すみませんがしばらくの間テスト勉強のため、更新不定期になります。

ご了承ください。

## STAGE 5 決意

ブリタニアの虐殺に怒りを覚えた日本人は一斉蜂起。各地の名誉ブリタニア人も騎士団に加勢した。

ゼロはこれを機に合衆国日本設立を宣言。キョウトをも騎士団に取り込み、大勢力となった黒の騎士団はエリア11総督・コーネリアが待つ東京租界へと進軍した。

……しかし、先の戦いで負傷した戦闘隊長ライは、未だに目を覚まさなかった。

- - ルルーシユ side - -

「どうだ、ラクシャータ。ライの容態は」

「あらあ、ゼロ。わざわざお見舞いかしら?」

俺は負傷したライの様子を見るため、ラクシャータの元を訪れていた。

いまだにライは目覚めることなく、ベッドで静かに寝ていた。

「弾は貫通していて命に別状はないけど……血を流してしばらくたってたから、まだ意識が戻ってなくて。」

「……多分次の作戦に間に合わないと思うわよ」

「……なら、次の作戦はライ抜きか」

正直厳しい。ライはナイトメア操縦だけでなく、指揮能力にも優れている。

皇の血を継ぐあいつの不在は、隊員の士気にも影響が及ぶだろう。

「分かった。もしライが目覚めたら連絡してくれ」

「了解」

だがそれでもやるしかない。ライが無事なだけでも喜ぶしかないだろう。

こんな状況にしたのは……他の誰でもない、俺なのだから。

「どうだった、ライの様子は」

俺の自室にはすでにC・Cが待っていた。  
さすがに今回ばかりはそんな暇もないのだろうか、ピザは食べていない。

「命に別状はないが、戦闘には参加できないそうだ」

「大きな戦力低下だな」

「だが、今しかチャンスは無い！」

「……東京租界に攻め込むのか？」

「ああ、今が絶好のチャンス……！」

しまった！ 俺のギアスは制御できていない！！ 仮面もつけずにうかつにしゃべっては……

「……安心しろ。私にギアスはきかない」

「そうだったな……だがギアスの制御がきかなくなった以上、学園の皆とはお別れだな……」

ギアスが暴走している今、もう俺に表の生活はできない。

もう誰とも顔を合わすことができない。そんな資格なんてもう存在しない。

俺の手は、とつくに汚れているのだから……

「ギアスの切り替えができなくなった他に、変化は？」

「別に……ただ、ユフィは俺のギアスに逆らおうとした。最初は能力が落ちたのかと思ったが……それは多分、彼女にとつてとても許せないことで……とても当たり前のことで……」

「……それで？」

「……それだけだ……ちょっとした……っ」

うつむいていた俺の頭をC・Cが包み込む。

「契約したろう？ お前のそばにいと。私だけは……」

……いや、違ったか。俺にはまだ共犯者が残っていたか……

- ルルーシユ side end -

- カレン side -

「ライ……」

私は今決戦に向け、機体の最終調整をしていた。隣には、主の復活を待ち続けるライの月下がある。

作戦開始まであと1時間と少し。だけど、今回の戦いにライが居ないということで私は今までにない不安を感じていた。

いつもなら後ろはライが守ってくれた。だけど、今回は違う。

今なら、そのありがたみが痛いほどわかる。いなくなって、始めてわかった。

「どうしたカレン。大切なパートナーがいなくなって寂しいか？」

「！C・C、あんたいつから……」

背後から突然Ｃ・Ｃが声をかけてきた。

……本当にいつからだろう。気がつくといつも後ろに立ってる気がする。

「そんなことはどうでもいい。騎士団のエースの調子を見に来ただけだ。

……いつも守ってくれる騎士がいない姫君はどうしているのか、とな」

「……怒るわよ、Ｃ・Ｃ」

励ましに来たのか、それとも馬鹿にしに来たのか……多分どっちもなのだろう。

本当にこの人のことはよくわからない。ゼロが連れてきたというだけでも不思議なのだが。見た目は私と同じ、むしろ年下にも見えるのに、なんだか自分より長く生きている人にもてあそばれる感覚がする。

「迷うなよ。」

「……え？」

「もはやこれはいままでの戦いとは違う。これに勝てば日本を取り

戻し、負ければ全てを失う。

……へたすれば、今度こそライを失うことになるぞ」

「……！」

「もしライのことが心配なら、日本をとりもどすことだけ考えろ。  
今度はお前がライの分まで仲間を守ってやれ……私が言うことは  
それだけだ、頼むぞ。」

C・C……そうだね。ライがいないのならなおさらだね。  
ありがとう、C・C。今度私が、ライの分まで皆を守ってみ  
せる！

私は、騎士団のエースなんだから……！

- - カレン s i e d e n d - -

各々が戦いに向け決意を固める中、ついに開戦の時が近づく。

- - ルルー シュ s i d e - -



「聞くがよい。ブリタニアよ。我が名はゼロ。力あるものに対する  
反逆者である！」

0時まで待とう。降伏し我が軍門に下れ！ これは最終通告だ！」

俺はガウエインから、ブリタニア軍に降伏勧告をおこなう。もつ  
とも、最初から降伏など、期待していないがな。目的はもっと別に  
ある……

「今ならまだ戻れるぞ。このままではエリア11だけでは済まない。  
世界全体がお前の命が戦いに染まる。」

「わかっている。だが俺は……」

俺はもうこうするしか……？ 着信？ 一体誰から……！！ ユフ  
イ！？

……いや、違う。騙っているやつが居る。

「ルルーシュ？ 僕だよ。」

スザク！？ なぜあいつがユフィの電話から……

「どうした？スザク。こんな時に」

「電話をしたのはみんなに伝えて欲しい事があって」

「なんだ？　こんな時に」

「空を……空を見ないで欲しい」

「……え？」

空を？　これから戦場となるからか？

いや、ちがうか……あいつが、復讐のためだけに戦うからか。その姿を見られたくないからか。

「ルルーシュ。君は……殺したいと思うほど憎い人が居るかい？」

「……ああ。居る」

「僕はそんなふうには考えてはいけなはずだった。」

……けど今、僕は憎しみに支配されている。人を殺すためだけに戦おうとしている。みんなが居る、このトウキョウの空の上で……」

「……憎めばいい」

俺がそうであるように、お前もゼロが憎いと思っているのなら……  
ユフィのことを本当に想っているのなら……

「ユフィのためだろ？ それに……俺はもうとっくに決めたよ。引き返すつもりは……無い」

「ナナリーのため？」

「ああ……切るぞ。そろそろ」

「ありがとう。ルルーシュ。」

「気にするな。俺たち友達だろ？」

「7年前からずっと」

「ああ。じゃあな」

さあ、時間だ……今こそ崩れ去れ！！ 東京租界！！

0時ジャストと同時に租界外縁部が崩れ落ちる。この時のため、

租界の階層構造管理者にギアスをかけておいた。騎士団を迎え討つため、外縁に布陣していたコーネリア軍は突然足場を失い、大打撃をくらう。

おそらく親衛隊も半数は使い物にならないだろう。

「ふははははははははははは！」

ライと違い、あの日から俺はずっと望んでいたのかもしれない。あらゆる破壊と喪失を。そう、創造の前には破壊が必要だ。そのために心が邪魔になるのなら……消し去ってしまえばいい。

あいつならとめただろうが……俺にはもう進むしかない。だから

- 
- 
- 
- 
- 
- 

-  
-  
ル  
ル  
ー  
シュ  
side  
end  
-  
-



## STAGE 5 決意（後書き）

作「次回、遂に作者の本格的な戦闘シーンが……でも、いつ投稿できるか分からない……」

ル「今回も結局戦闘は無かったからな……」

Ｃ「というか、テストは大丈夫なのか、お前？」

作「……できれば無かったことにしたい……」

カ「なんでやる前からもう諦めてるのよ……」

作「だって、やる気でないし、……気がついたらパソコンいじってるし。」

Ｃ「だめだなこの作者。」

作「なので次いつ投稿できるか分かりません。ひょっとしたら勉強中に思いついたら書くかもしれません。次回予告は一応しておきます。カレンさんどうぞ。」

## 次回予告

ついに、決戦の時がきた。

思えばいつもあんたは私やライ、ゼロの前に立ちはだかつて…!!

だけど、今回は何が何でも負けられないのよ!

ライが居ない今、私がゼロを、皆を守る!!

だから…スザク!!戦場で会ったならあんたでも…私は!!

NEXT TURN 「想う者、憎む者」

**S T A G E 6    想う者、憎む者（前書き）**

テストが一段落つきました。……だけど……

勉強する気が失せました。……あの徹夜の日々は一体……



## STAGE 6 想う者、憎む者

- カレン side -

いける！このままいけば……日本を取り戻せる！！

ゼロの策により、主戦力の大半を失ったコーネリアは政庁に籠城。その間に騎士団は各拠点を制圧。政庁以外はもはや陥落したといってもいい。

残った主戦力、ギルフォードも今藤堂さんと交戦状態。騎士団とブリタニアの戦いは今のところ私達が優位に立っている。

96

ただ……気がかりなのは学園の皆。司令部をアッシュフォード学園に置くというゼロの計画のため、私達は武装したまま入り込み、そしてブリタニア人である皆を信用させるため……私は顔を見せてしまった。

おまけにライが復活したとき、すぐに動けるようにするため、彼を学園へと運び込んだ。おそらくミレイさんたちは気づいているだろう。ブリタニア人でも珍しい銀髪だし……

もう私やライは学園には戻れない……でも今は！！

私はこちらに迫るランスロットに向け、呂号乙型特斬刀を投げつける。しかしスザクはものともせずはじき返した。

本当に、いつもアンタは私やライの最大の敵となつて……！！

「スザク！」

「カレンか！」

「戦場で会つた以上、悪いけどここで死んでもらう！　ライのぶんも私があんたを倒して、皆を守る！」

「みんな馬鹿だ！　君もライも日本人も、あんな男に騙されて！」

！！……こいつ、何も知らないくせに！！

「その良い方ムカツクね！　アンタにゼロの何が判るって言つもの？」

「じゃあ教えてくれ、ゼロを！」

そう言うや否や、スザクは動き出した。スラッシュハーケンをビルに打ち込み、一気に迫る。

MVSを輻射波動で受け止め、空へ上昇したランスロットを追うため、近くのビルにスラッシュハーケンを射出し、ワイヤーの牽引力で今度は私から輻射波動を打ち込む。しかし、それもMVSで防がれる。

その後飛び移った先のビルを蹴り、呂号乙型特斬刀で斬りかかるも上手く流され、紅蓮は地に落ちていく。

「くっ！（まずい！ フロートシステムを持つランスロットと紅蓮じゃあ、機動力が違いすぎる！）」

「さあ答える！ ゼロはどこだ！？」

「言うはずないだろ、裏切り者がっ！」

「じゃあここで終わりにするっ！」

「飛べるからって調子に乗るな！」

私は紅蓮の右手をビルに突き立て、輻射波動を打つ。その衝撃で紅蓮はビルから離れる。

突然の回避にスザクでも反応できなかったのか、そのままランスロットは着地する。

……今なら！

私はすぐさまランスロットの懷に突っ込む。MVSを振ってくるがこんな単調な動きならかわせる！ 姿勢を屈めてかわして、そしてやっと輻射波動がランスロットの左手をつかんだ。

「くっ！！」

「捕まえた！ 食らいなっ！！」

やった！ 勝った！！ 輻射波動がどんどんランスロットを侵食して……！？

「うあああっ！」

……油断した！ スザクは一瞬で左腕をパージしたんだ！  
そしてヴァリスを至近距離で右腕に打ち込んできた…… 右腕がもう……！！

「さあ言え！ ゼロはどこだ！」

紅蓮の輻射波動を破壊し、勝利を確信したかのように、私に問い詰めてきた。だけど……

「……しつこい男は嫌いなんだけど……！」

「そうか。ならここで……」

スザクはランスロットのヴァリスを構え直す。  
一撃必殺の銃口を紅蓮に向けて……

「何か言い残すことはないかい？」

っ……！ ごめん、ライ。私は何も守れなかった……！

『待て……！』

「……！」

この声……ゼロ！？ どうしてここに！？  
いくらガヴェインでも、今のスザクを相手では……

『枢木スザク。君に対する執着が私の甘さだったようだ。断ち切るためにも、一騎討ちによって決着をつけたいのだから？』

「望むところだっ！」

ゼロとスザクの決闘？ でも……

「待ってください、ゼロ！ 私はまだ戦えます！」

『カレン、君はすでに輻射波動を失い万全の状態ではない……良く戦い抜いてくれた。我々を守ってくれてありがとう』

『！ ゼロ……』

私は2人を追いかけることができなかった。

- - カレン side end - -

- - スザク side - -

「卑怯者!!!」

何が一騎打ちだ!! ゼロが場所を変えって言って選んだ場所は……みんながいるアツシユフォード学園!

しかも、ガヴェインのスラッシュハーケンを学園へとむけている。あのスラッシュハーケンは切断能力がある。あれを打たれたら、皆は!!

「卑怯者! 人質のつもりか……何が一騎打ちだ!」

「仲間になる機会をことごとく裏切ったのはお前だ。下らん美学にこだわったことを悔いるがいい!」

くっ! こうなったら懷に入ってハーケンを……

俺は一気にランスロットを加速させ、ガヴェインへと突っ込む。

「ゼロオオオオオオーッ!!!」

ゼロがハドロン砲を発射するが身を擦じらせてかわす。着地し一  
 気にガウエインに……！？

「これは……!？」

ランスロットが動かない……これはサクラダイト干渉装置、ゲフイオンディスターバーか……！

最初から、俺をここにおびき寄せるために挑発していたのか……！

「ゼロッ！！ お前は、最後まで人を騙して！！裏切って！！！」

「偽善なる遊びに付き合う暇はない。さらばだ、枢木スザク」

そういうとゼ口は政庁へと飛び去っていく。俺は………なんで！！

「くっそ——！！！」

なんで何もできないんだ！　俺は！！

ゼロが……ユフィの敵が目の前にいるというのに！！



- - スザク side end - -

- - ルルー シュ side - -

スザクをかわした俺は政庁上空に来ていた。  
だが、コーネリアの精鋭が守っているだけあり未だに墮ちる様子はない。

「さすがに、守りは堅いな……」

「のんきに構えている場合か？ 敵の援軍がご到着だ。爆撃されたらおしまいだな」

「フン。エナジーファイラーは交換済みだろ？」

どれだけ来ても無駄だ。俺はガヴェインのハドロン砲で四方の航空部隊を一掃する。これでしばらくは向こうも航空戦力は使ってこまい。

ならば、俺が一気に乗り込むまでだ。

「藤堂、私は政庁の上から攻め込む。」

「ん？ 機体能力に頼るのは危険だと考えるが……」

「分かっている。混乱を作るだけだ」

そう、別に1機で攻め落とそうとするわけではない。敵の隙を作ることが目的だ。

俺は政庁の屋上へと降り立つ。しかし、ここは……

「似ているな……」

「ああ、アリエスの離宮に……」

「！ なぜ知っている！？」

アリエスの離宮はブリタニア本国にある俺とナナリーが幼き日々を過ごした場所。

なのに、なぜC・Cがその場所を知っている！？

「話してやるよ、その時がきたらな。」

……今聞くだけ無駄か。こいつは話すときは話すが、話さないと

きはどうやっても話そうとはしない。

まあいい。今はそれほど大切なことではない。それよりも、「ようこそ、ゼロ！」　！！　コーネリアか！！

「さあ、歓迎の宴の始まりだ！　　舞踏会はお好きかな？」

コーネリア……まさか、王<sup>キング</sup>が1人で出てくるとはな……だが、目標が直接出てきたと言うことは好都合だ。コイツには聞かなければならないことがある。

「ゼロよ、ユフィの仇……！！」

グロースターがランスを構え、突進してくる……早い！

「スペックでは圧倒しているのに……！！」

大型のガウエインの動きでは、小回りも利くグロースターを追いきれない！

上空へ退避しようとするが、スラッシュハーケンで飛びついてくる！

「捕まえた！ お前の命は今、まさに私の手の中に！！」

「コーネリアッ！」

「これが裁きだ！！ ……っ！？ ウア……！！？」

突如、コーネリアのグロースターがバランスを失い崩れ落ちた。

見るとダールトンのグロースターがコーネリアに対しランスを投げつけていた。行政特区の会場でギアスをかけておいたが……間に合ったか。

『姫様！？ なぜ……！？』

「ありがとう、ダールトン」

『姫さまああああ！』

ギアスが解けたようだが、貴様はもう用済みだ。俺はハドロン砲を打ち込み、グロースターは一瞬で爆発した。

あとはコーネリアを……

-  
-  
ル  
ル  
-  
シ  
ユ  
s  
i  
d  
e  
  
e  
n  
d  
-  
-

## STAGE 6 想う者、憎む者（後書き）

作「久しぶりの投稿！…なのに今までで一番戦闘シーンの多い回でした。」

C「無理やり詰め込んだ感があるが…」

ル「テストはどうした？」

作「…察してください。なんだかもう疲れました。週明けにまたテストがあるのに…もう嫌だ。」

カ「すでに諦めモードに…」

作「勉強したくないので、今日か明日にまた投稿するかもしれません。次回予告はルルーシュ君です。」

## 次回予告

第二皇女コーネリアは我が手に落ちた。後は母さんを殺した犯人を  
暴き、人質にすれば俺の勝ちだ！

そしてナナリーの、ライのためにもブリタニアを完膚なきまでに叩  
き潰す！

そうだ、俺は今までこのときの為に戦ってきたのだから……邪魔を  
するものは全て……！！

NEXT TURN 「急変」

**S T A G E 7    急変（前書き）**

ブラックリベリオン編長い………内容が濃い………

早くライ君出したい………



## STAGE 7 急変

- - ルルー シュ side - -

…… ということだ！？ 俺は母さんの死について知るためにコーネリアにギアスをかけ、母さんの事件のことを聞き出した。  
だが…… 答えは……

事件当日の警護担当であったコーネリアは母さんに頼まれて警護隊も引き上げた。

コーネリアでさえ犯人を知らない。また、皇帝の命でシュナイゼルが母さんの遺体を運び出したという。

それでは…… 母さんの、あの柩の中は……

「おい、戻って来い！」

「わかっている。そろそろ政庁の守備隊が……」

「違う！ お前の妹がさらわれた！」

「？ 冗談を聞いている暇はない。今はコーネリアを人質とし、本陣を……」

「私には分かる！！ お前の生きる目的なのだろう！？ 神根島に向かっている！」

「！ 神根島！？」

確か……以前俺やスザクが偶然行き着いた島。なぜそんなところに……！？

なんだ！？ 地面が揺れ動いている！？ ……いや、何かが地下から出てきている！！

『オールハール、ブリターニアッ！！』

巨大なナイトメア！？ しかし、この声は……

「おや、貴方様はゼロ！ なんとる僥倖！ 宿命！ 数奇！」

「まさか、オレンジか！？」

「オ、オオオオオオオオ、お願いです！ 死んでいただけますか？」

とにかく俺はガヴェインへと乗り込んだ。  
クソッ！ とにかくコーネリアを……！！？

「C・C！！」

「分かっている！！」

コーネリアを確保しようと腕を伸ばすが、ジェレミアの機体が突進し、俺たちは政庁から追い出されてしまう。

「ゼロ！ 私は、帝国臣民の敵を排除せよっ！      そう、ならばこそ！ オールハイル、ブリタニアッ！！」

「ええい！ 邪魔をするな！！」

まともに会話もできないこいつにやられるなど……ハドロン砲を撃つが、あっさりかわされてしまう。

いや、今はこいつより司令部の扇と連絡を取り、ナナリーの安全を確認することが最優先！！

「扇か？ 私だ」

『ゼロ！ 良かった』

「？ 南？ 扇はどうした？」

『撃たれたんだ！まだ意識がない。犯人もまだ……』

扇が！？ 司令部に敵がそう簡単に敵が入ってくるとは思えない。  
一体誰が？

……いや、今はそんなこと関係ない。

「分かった。ならばお前でいい。車椅子の少女はどうした？」

『え？いやそれより扇が……』

「代わりなら後で手配する！ 今は車椅子の少女が先だ！」

『代わりって……「確認しろ！ 早く！」……拘束していた学生はきえたよ。扇が撃たれたどさくさに……』

くそっ！！ まさか本当にナナリーがさらわれたのか！？  
……いや、まだリヴァル達といえるかもしれない。早く確認しないと……

『ルルーシュか！？ 悪いけど今は……「ナナリーはそこにいるか？」 え、クラブハウスにいるよ。』

俺達はちよつと離れてるけど……「分かった」え！？ おい………』

くそ！ ナナリーにはつながらないし、咲世子も共にはいない。  
……今は、C・Cを信じるしかないのか……

『ゼロ！ ゼロよ！！』

「雑魚が！ お前の相手をしている暇はない！！ C・C、トウウエルブストリートに出ろ！」

「一方的な都合ばかり！！」

あのポイントからなら……場所を移した俺たちはやつに向けハドルン砲を発射するが、オレンジは難なく回避する。

「当たらず！ この、ジェレミア・ゴットバルドにはあつ！」

「……違うな、オレンジ君。もう当たっている。」

残念ながらそれは罠だ。俺は狙ったのはお前ではなく、後ろのビル。  
バランスを失ったビルは崩壊し、オレンジへと向かって倒れていく。

「卑怯、後ろをバックに！」

「潰れる、古き者よ」

ビルの倒壊に巻き込まれる形で、オレンジは生き埋め状態となる。  
……これで今度こそ、ナナリーの元に……！

「藤堂！以降の作戦はお前に任せる、ライが目覚めたなら、すぐに戦闘にむかわせる！」

負傷した扇の仕事はディートハルトに指揮させる！」

『任せる！？ 任せるとは一体？』

「私は他にやらなければならないことがある。以降、そちらからの作戦はすべてきる」

『！ 待て……！』

俺は藤堂の制止を無視し、神根島に向かった。

- ルルーシユ side end -

- カレン side -

「ゼロ、私はどうすれば…?」

ゼロの不在。ただでさえブリタニア軍が勢いを増し、政庁を制圧できず、すでに3、7番隊は全滅したと聞いている。

今、ランスロットも再起動した。形成逆転され、指揮系統も乱れている中、私はどうすれば……

『カ、カレン……』

「! 扇さん!? 大丈夫なんですか!?!」

突然負傷したはずの扇さんから通信がかかってきた。

だけど、その声いつもの力はなく、今にも消えてしまいそうな

弱々しい声だった。

『ああ、それより、カレン……ゼロを追え。彼の、行動には……なにか、理由があるはずだ。助けるんだ』

「でもどうやって探せば!？」

私だってゼロの親衛隊長。できることなら追いかけたい。でもどこに向かったかさえわからないのにどうやって……

『そろそろ、見える、だろ?』

「え? ……ランスロット!? あいつがここを離れる理由なんて……」

上空をランスロットが横切る。戦場から離れようとしているのは私にも分かる。

『ラク、シャータの、発信機を、な……頼む、ライの分も、守って



やれ』

「……分かりました。ライのこと、たのみます……補給部隊！  
接取した空輸機を私にまわせ！ 最優先だ！」

ライ、少しの間まって。私がゼロを守るから。

- - カレン s i d e e n d - -

## STAGE 7 急変（後書き）

作「次回、遂に我らが主人公ライ君が復活！！」

ル「やけに長かったな…主人公がこんなに本編に参加しなかったのこの話ぐらいじゃないか？」

作「すいません、ブラックリベリオンの内容が濃くて、話が進みませんでした。ですが多分あと2話くらいで終わります。」

カ「やつと2期に…」

作「無駄にブラックリベリオン編が長いですが、皆さん暖かく見守ってください。久しぶりにライ君、次回予告お願いします。」

## 次回予告

ゼロが消え、カレンもその後を追った。

二人の主力が戦線離脱し、戦況は悪化するばかり。

次々と届く仲間の訃報。ブリタリア軍の反撃は勢いを増すばかり。

また僕は失うのか？……嫌だ！！これ以上失うわけにはいかない！！

同じ過ちを繰り返してはしない！！！！

NEXT STAGE「撤退」

## STAGE 8 撤退（前書き）

ライ、復活！！

だけでもっと活躍させたかったと反省中です。

## STAGE 8 撤退

「うつ、ここは……？」

僕が目を覚ますと、そこには見慣れた天井があつた。壁の色彩や机等の調度品を見て、そこが僕の通っている学園　アッシュフォード学園だと分かる。

(……夢、だったのか？)

一瞬、あの惨劇が夢だったのかと自分を疑う。  
しかし、外から低く鈍い音　銃声が聞こえてきた。

(！　ちがう、夢じゃない！)

僕は慌ててベッドから飛び起きて部屋を出て、近くにいた隊員に状況を聞く。

「一体何があつたんです！？ 状況は！？」  
「戦闘隊長！！ 起きて大丈夫なんですか！？ …… 実は……」

……僕が聞いた状況は予想以上にひどかった。僕が眠っている間に、戦局は大きく変わってしてしまった。

ユーフェミアによる日本人の虐殺。ゼロがユーフェミアを殺害し、ブリタニア軍との戦闘に入るも騎士団の被害が増していく。

副指令、扇さんが撃たれた事。ゼロの突然の戦線離脱。カレンもゼロを追って戦場にいない。

仲間の相次ぐ戦死、最古参幹部の吉田さん、井上さんまで……

僕はそれを聞くとすぐに、愛器 月下の元へと駆けていった。

（長期戦になった以上、もう僕達騎士団に勝ち目はない。無頼とサザランドやグロースターでは着たい性能の差がありすぎる。こうなったら……）

僕は通信機を手に取り、全軍へと通信を送った。

- - 藤堂 side - -

「くつつ!!」

迫る4機のグロースター。ハンドガンで牽制し、最初の1機をすれ違いざまに廻転刃刀で斬り、2機目のランスを受け、なぎ払う。残りの2機は朝比奈と千葉、仙波が撃破していた。

「死守しろ!! なんとしても守り抜け! ここを破られれば……完全に我が軍は崩壊する!!」

今、私の元には騎士団の戦力の大半が集まっている。他の部隊はほとんど全滅し、残るはこの戦いから加わったばかりの民間人だ。ここを突破されれば……

『黒の騎士団総員に告げる』

!! ゼロ!? ……いや、違う。この声は、まさか……

「ライ君か！？ 目覚めたんだな！」

その声は、あたし達が今までずっと待ちわびていた若者の声だった。

彼の無事を確認し、ひとまず安堵する。

『これより撤退戦に入ります！』

！？ なにをつ……いや、違う。彼も勝てないと判断したか。政庁の防衛力、戦力の差に押され、私も前線を死守する事のみに関心を取られていた。

このままでは戦線を破られ、全滅するのも時間の問題。彼はそれを私よりもいち早く判断したのだ。

『ト部さん、今から指定するポイントに向かってください。僕も部隊をまとめ次第、すぐに向かいます』

『承知！！』



ト部は今、唯一激戦区から離れている。あいつなら何とか撤退できるだろう。

ならば、私の役目は……

「ライ君、ならば私が殿を勤める。撤退の指揮を頼む」

『！？ 何を言っているんですか、藤堂さん！ 貴方も……』

「今私の目の前にはギルフォードとグラストンナイツがいる。ここで退けば敵の主力部隊の追い討ちをくらう。

そしてそんな状況で逃げ続けるほどのエネルギーも残っていない。ならば、君達に後を頼みたい」

『藤堂さん、ですが……… 分かりました。撤退の指揮は僕が引き受けます……ご武運を』

「ああ。日本を、頼んだぞ」

私はここで通信を切る……これでいい。

彼には実力も、素質も十分あり未来あふれる若者だ。そんな者にこのような役を任せるわけにはいかない。

『お供しますよ、藤堂さんが居る所が俺の居場所ですから』

『私もです、中佐。』

『同じく』

「……ふっ、お前達に撤退を命じるのも無粋だな」

今まで共に戦ってきた身だ。ここで余計なことを言うのは、こいつらを否定することになる。

ならば……共に戦い抜くのみ……！

「済まない……では、行くぞ……！」

『『承知……！』』

「藤堂鏡四郎、罷り通る……！」

ブリタニアの騎士達よ、よく見ておけ。

貴様達がイレヴンなどと呼び、陥れた武士の戦いぶりを……！

- - 藤堂 side end - -

「ト部さん!!」

無事であり、すぐに動かせる部隊を引きつれ合流ポイントに向かうと、先行していたト部さんの部隊がいた。

だが、ト部さんの部隊も大半が負傷しており、傷を負っていないものはいなかった。

「ライ！ お前も無事だったか！ ……部隊のほうはそれだけか…」

「……はい、司令部にも敵軍が集まってきました。脱出し、ここまですれたのはこれだけで……」

途中、ブリタニア軍の追撃にも会い、僕が連れてこれたのはわずか無頼3機。とても部隊とよべるものでは無かった。

「ひとまず、できるだけ東京から離れましょう。いまのうちに少しでも逃げておかないと……」

「だな、紅月やC・Cも、もう少しで合流できると連絡が入った。ひとまずはあいつらと落ち合つぞ」

「！ カレンとC・Cが！？ 無事だったんですか！ 良かった……」

良かった……彼女達が無事ならまだ騎士団は立て直せる。  
ゼロもいればまだ騎士団は……あれ？

「ト部さん、ゼロは？ ゼロからは何て？」

「いや、ゼロからはまったく連絡がない。あいつらにも聞いたんだが、はぐらかされてな。」

「……おそらく、ゼロは……」

「……！ そんな……とにかくすぐに彼女達と合流しましょう！」

僕は残存部隊を率い、すぐさまカレン達との合流地点へと向かった。

……ルルーシュ、君の身に何があったんだ！？



STAGE 8 撤退（後書き）

作「ライ復活キタ（。。。）！！！！！！」

ル「なにおかしくなっているんだ。」

作「毎回出てるきみにはわからないだろうね。だって4話くらい出てなかったんだよ！？」

カ「もつと話を早く進めればよかったのに……」

作「そこらへんはすみません。僕のせいです。」

ラ「まあこれからは大丈夫なんですよ？」

作「はい、と言うかライメインの回が次の次の回くらいから多くなると思います。ライ君視点だけで終わるかもしれません。」

Ｃ「一気に出番が増えるな……」

作「まあ主人公ですし？大丈夫でしょ？」

## 次回予告

舞台は神根島へと場所を移す。

ルルーシュ、スザク、カレン。

役者が揃う中、遂に『ゼロ』の仮面が剥がれ落ちる。

ここでも一つの戦いに終止符が打たれようとしていた。

はたして彼らの運命は…？

NEXT STAGE 「仮面、砕ける時」

## STAGE 9

### 仮面、砕ける時（前書き）

テストと言つ生き地獄からやつと解放されました。

今日からまた少しずつ投稿しようと思います。



## STAGE 9

### 仮面、碎ける時

- - ルルー シュ side - -

神根島についた俺はしつこく追ってきたジェレミアをC・C・に任せ、神根島の遺跡に乗り込んでいた。C・C・も心配だが、今はナナリーの安全が優先だ。

狙いは俺か？ C・C・という線もあるが……いずれにせよ、ナナリーの無事を確かてからだな。

そして俺が遺跡に触れたその瞬間……1発の銃弾が石碑を削った。

「こちらを向け、ゆつくりと」

スザク！？ ええい、こんな時に！！

「聞こえなかったのか、ゼロ。こちらを向くんだ、ゆつくりと」

「ユーフェミアは罪無き日本人を虐殺した。君はそんな女を……」  
「便利な力だな、ギアスとは」っ！？

バカな……なぜ、スザクがギアスのことを知っている！？  
それでは、まさかユフィのことも……！！

「自らは影に隠れ、責任は全て他者に擦り付ける。傲慢にして卑劣。それがお前の本質だ……カレン！！」

「ッ！？」

「君も知りたくはないか？ ゼロの正体を」

「何を今更っ……！！」

カレンも来ていたのか……君にはライの側に居てほしかったが。  
俺を守るためについてきてくれたのか。

「君には立ち会う権利がある」

「ッ！？ 待てっ！！」

スザクはカレンを無視し、俺に向け銃を撃つと、弾は仮面に当たり仮面は二つに砕けた……そして、俺の素顔がさらけ出された。

- ルルーシュ side end -

- カレン side -

「……信じたくは……なかったよ……ルルーシュ……！」  
「嘘……なんで……？ どうして？ ル、ルーシュが……」

なんで……なんで貴方が！？  
ゼロの正体が、あのルルーシュ！？

「そうだ、俺がゼロだ。黒の騎士団を率い、神聖ブリタニア帝国に  
挑み……そして、世界を手に入れる男だ」

「……あなたは私たち日本人を利用していたの……？ 私のことも  
……！」

「結果的に、日本は開放される。文句はないだろう？」

結果！？ 貴方にとって日本はその程度のものだったの！？ 私達はただ日本を取り戻そうと……！！  
なのに、あなたはそんな私達を利用して……！！

「スザク！ 一時休戦といかないか！？ ナナリーを救うために力を貸してほしい！ 俺とお前二人いれば出来ないことなんて！」

「ふざけるな！！ 君は最後の最後に世界を裏切り、世界に裏切られた！ 君の願いは叶えてはいけないっ……！」

「馬鹿め！ 理想だけで世界が動くものか！ さあ、撃てるものなら撃ってみろ！！ 流体サクラダイトをな……！」

……え！？ そんな。あれって、まさか……

「俺の心臓が止まったら爆発する！ お前達もおしまいだ！」

「貴様ツ……！」

「それより取り引きだ。お前にギアスを教えたのは誰だ！？ そいつとナナリーは……！！」

「ここから先のことはお前には関係ない！ お前の存在が間違っ

いたんだ！ お前は世界から弾きだされたんだ！！ ナナリーは俺が……！！」

「スザクツッ！！！！」

「ルルーシュ！！！！」

結局、二人は相容れずお互いに撃ち合った。ルルーシュの銃弾はスザクのインカムを砕き、スザクの銃弾はルルーシュの銃を弾き飛ばした。

銃が無ければ、身体能力で劣るルルーシュは……！！

「ゼロ！！」

「こいつはルルーシュだ！ 日本人を、君を……ライを騙していた奴だ！！ 君はそんな男を守りたいのか！！？」

「騙す？ ライを？ ……フハハハハ！！ ちがうな、間違っているぞスザク！

ライは唯一俺を理解し、真実を知りながらも俺についてきてくれた男だ！！」

……え？ ライは全てを知っていた？ 知っていて私には何も言ってくれなかった……？ なんで？ ライは私を信じてはくれなか

ったの？

何！？ 私は何を信じればいいの！？

私はもうわけが分からなくなり、そのまま遺跡から飛び出した。

「……どうすればいいの？ 私は……」「……カレンか？」　！？　C・……？　あんなんで海から！？」

「ガウエインが使い物にならなくなってな……なんとかコクピットから脱出してきた」

「……C・C、あんたもルルーシュのことを知っているわよね？」

「！？　お前、なぜ……ゼロはどうした！？」

この様子、やっぱり間違いない。

この人はゼロのことを……ルルーシュのことを知っている！！

「スザクに捕まったわ……このまま戦闘になったら私たちまで捕まっちゃう。みんなと合流するわよ」

「お、おい！」

紅蓮は輻射波動が無いし、航空機が破壊されたらここから脱出することさえ出来なくなってしまう。

私はC・C・を連れ、連絡の取れたト部さんと合流すべく、紅蓮を操縦した。

……ライ、貴方にも聞きたいことがあるんだから……！！

- - カレン side      e n d - -

「カレン……！」

良かった……！合流地点にはすでにカレンとC・C・がいた。  
だけど、ゼロの姿は見えない……ルルーシュ、まさか本当に……

「カレン、ゼロはどうした？」

「……スザクにつれてかれたわ……」

「！？ ゼロが！？」

ゼロがスザクに！？ まさか正体までばれてしまったのか？  
だとするとまずいな。ただでさえ、これだけの罪を犯したんだ。  
彼の命は保障できない。かといって今から救出に向かうだけの戦力  
はないし………ん？

「カレン、どうかした！？」

「ライ……聞きたいことがあるんだけど……貴方、ルルーシュのこ  
とを知っていたの？」

「！！？」

なんでカレンが……！？ まさかカレンまで見てしまったのか！  
？ ゼロの正体を！





## STAGE 9

### 仮面、砕ける時（後書き）

作「ついに戦い終了。私の戦い（テスト）も終了。」

ラ「今回は遂にカレンが過去を知ることになる。」

作「予定では、ライはカレンに自分のこととルルーシュのこと、全て話すつもりです。はたしてカレンはどうなるのか！？次回に続く  
！！！」

## 次回予告

遂に、打ち明ける時が来てしまった……

カレン、できれば君には知ってほしくなかった。

僕のこと、ルルーシュのこと、そして『ギアス』のことを……！！

君に知られるのがずっと怖かった。

君に拒絶されるのが怖かったから……！！

NEXT TURN 「真実と過去」

## STAGE 9・5

### 「狂王」の名 信頼ゆえの恐怖

\*\*\*注意\*\*\* (前

STAGE 10の次回予告もしたんですが、その前に一話はさみま  
す。時間軸は行政特区前、ライとルルーシュが秘密を打ち明けあっ  
たときです。

この話では独自設定、解釈が入ります。また、ライの「狂王」につ  
いての補足が入ります。

その点に注意してお読みください。

- - -時は行政特区が宣言される前まで遡る - - -

一通り全てを話し、そろそろ僕が退出しようと思ったときゼロが呼び止めた。

「ところで、ライ。お前はカレンにこのことを……過去のこと、そしてギアスのことを話したのか？」

「……え？」

カレンに？ 僕のことを……？

「いや、話していないよ。記憶が戻ってすぐに君に話したからね。……だけど多分、彼女には今後このことは話さないと思う」

「ほう、いくらパートナーといえど、信じられないか？」

まあ、今回に限れば、お前の話を受け入れるほうが異常だろうがな。この内容は」

「……そうじゃないよ、C・C。」

たしかに100年前の人間だということ、そしてギアスの存在。まず常人なら理解しようとさえしない話だろう。僕だってギアス能力者でなければ受け入れられないかもしれない。……

……ただ違う。そうじゃないんだ……

「カレンなら……彼女なら僕の話の聞いても十中八九受け入れて、そして変わらずにいてくれると思う。そう信じている」

「……なら、なぜだ？」

「絶対ではないから、100%ではないからだ……例えば、99.9%受け入れてもらえるとしても……僕は残りの0.1%が怖い……！僕が君に話したのは、ゼロに拒絶されたとしてもそれを一つの結果として受け入れられたからなんだ。だけどカレンにだけは……嫌なんだ……！」

もしもカレンに拒絶されたら、大切なものを失ったら……僕はもう何を信じればいいんだ！？

もしもカレンに狂王と呼ばれたなら、僕は……

### 『狂王』

100年前のライに対する評価である。

これはよく、殺戮者としての意味で捉える者が多いが、実は違う。そもそもなぜライが『狂王』と呼ばれるようになったのか。それは、ブリタニアのある1人の歴史学者の言葉が元となった。

「彼の王は当時、ブリタニアと勢力を争った蛮族をわずか1度の戦いでその勢力を半減させた。ブリタニア帝国の元を作った殉職者である。」

しかし、そのためにとった彼の行動は人が思いつくことでなければ、人がなすことではない。ゆえに私は彼を粹から外れた王、『狂王』と呼ぼう。」

当時、北の蛮族とブリタニアは均衡状態にあった。

しかしライの戦いの後、蛮族は一気に衰退。内部分裂が起こり、この隙を突いたブリタニアに滅ぼされた。ブリタニアは辺境の小国1つを失った代わりに、倍の領土を手にした。

現代では、ライゼルのことを敵国では「帝国を作りし元凶」と卑下し、ブリタニアでは「自らを犠牲に、祖国を作った英雄」と敬意

を示す者さえも居る。

1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9
10	10	10	10
11	11	11	11
12	12	12	12
13	13	13	13
14	14	14	14
15	15	15	15
16	16	16	16
17	17	17	17
18	18	18	18
19	19	19	19
20	20	20	20
21	21	21	21
22	22	22	22
23	23	23	23
24	24	24	24
25	25	25	25
26	26	26	26
27	27	27	27
28	28	28	28
29	29	29	29
30	30	30	30
31	31	31	31
32	32	32	32
33	33	33	33
34	34	34	34
35	35	35	35
36	36	36	36
37	37	37	37
38	38	38	38
39	39	39	39
40	40	40	40
41	41	41	41
42	42	42	42
43	43	43	43
44	44	44	44
45	45	45	45
46	46	46	46
47	47	47	47
48	48	48	48
49	49	49	49
50	50	50	50
51	51	51	51
52	52	52	52
53	53	53	53
54	54	54	54
55	55	55	55
56	56	56	56
57	57	57	57
58	58	58	58
59	59	59	59
60	60	60	60
61	61	61	61
62	62	62	62
63	63	63	63
64	64	64	64
65	65	65	65
66	66	66	66
67	67	67	67
68	68	68	68
69	69	69	69
70	70	70	70
71	71	71	71
72	72	72	72
73	73	73	73
74	74	74	74
75	75	75	75
76	76	76	76
77	77	77	77
78	78	78	78
79	79	79	79
80	80	80	80
81	81	81	81
82	82	82	82
83	83	83	83
84	84	84	84
85	85	85	85
86	86	86	86
87	87	87	87
88	88	88	88
89	89	89	89
90	90	90	90
91	91	91	91
92	92	92	92
93	93	93	93
94	94	94	94
95	95	95	95
96	96	96	96
97	97	97	97
98	98	98	98
99	99	99	99
100	100	100	100

……分かつている。僕は今の日本をこんな状況にした元凶だ。だ  
けど……

「……お前はそれでいいのか？」

「うん、いいんだよ」

「……カレンはお前が思っているほど、弱くはないぞ」

「え？」

C  
C  
?  
なにを言っ  
て……

「あいつは1度信じたものはとことん信じるぞ。それこそ、信じて



いたものに徹底的に突き放されたりしない限りはな。

……だから、お前が周囲の批評を気にしているのなら、それは間違いだ」

「……C・C。」

「私が言えるのはここまでだ。だが、もし話すのなら真実全てを包み隠さずに話すんだな」

「……………」

「ライ、ゆっくり考えればいい。おまえにとってカレンはどういう存在なのかを」

「そうだね、ルルーシュ」

カレン……僕は君を信じられるのかな？　僕にとっての君は、一体どんな存在なのか？

「ライ、もしお前がカレンに真実を話すと言うのなら……俺のことも全て打ち明けてくれて構わない」

「！？　ルルーシュ！？」

「お前が大丈夫と判断したらだ。お前の信頼を俺は信じる」

「ルルーシュ……」

……なんだ。

この罪深き僕をまだ信じてくれる人が残っていたのか……

## STAGE 9・5

### 「狂王」の名 信頼ゆえの恐怖

\*\*\*注意\*\*\* (後

作「狂王の『狂』という字には『くるう』とか『こっけいな』などの意味だけでなく、『正常の域を外れる』『枠から外れて広がる』といった意味もあるそうです」(参照：goo辞書、語源由来辞典など)

ル「…信じているからこそ、拒まれることを激しく嫌うか…」

作「そうなんです。果たしてライはカレンを信じ切れるのか？次回で明らかに…!!」

## STAGE 10 真実と過去（前書き）

これで第一章、B・R編は終了です。

次回からはR2に入ろうと思います！…長かったな…無駄に…

## STAGE 10 真実と過去

人は他人の過去を、真実を知ったとき、大きく二つにわかれる。

相手を受け入れるか、あるいは拒絶するか。

少なくとも、人の理を外れた者、『ギアス』を持つものを受け入れることは口で言うほど簡単ではないのだ。

紅蓮の騎士は彼らを受け入れるのか？ それとも……

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16
17	18	19	20
21	22	23	24
25	26	27	28
29	30	31	32
33	34	35	36
37	38	39	40
41	42	43	44
45	46	47	48
49	50	51	52
53	54	55	56
57	58	59	60
61	62	63	64
65	66	67	68
69	70	71	72
73	74	75	76
77	78	79	80
81	82	83	84
85	86	87	88
89	90	91	92
93	94	95	96
97	98	99	100

「それで、カレンまずは君から話してほしい……神根島で何があったんだ？」

「……ええ、あの時……」

カレンはそのときのことを詳細に話し出した。

……なるほどね。

「ルルーシュが僕のことをそういったわけか。確かに、僕は知っていたよ。彼のことも、彼の力も……全てをね」

「やっぱり、知っていたのね……だったら教えて。ルルーシュのことを。それに、力って何？ スザクが確か『ギアス』とか言っていたけど」

やっぱりギアスのことも気付いたのか……ここまで来たら隠せるようなことではないが、話してもいいだろうか？

ただ、話すにしても話すなら僕のことからだろうな……

「カレン、君は人を1度だけでも従えることができると思うかい？

たとえば、どんな命令だとしても……」

「？ さすがになんでもは無理よ。いくらなんでも相手によつては違つてくるだろうし、条件だつて、内容だつて問題がある。それなのに……「それが出来るとしたら？」　！？　まさか……！」

「そう、それがルルーシュの……僕の力だ。どんな相手にも、1度だけなら必ず従わせることができる

……それが『ギアス』だ」

「……！　まっ！　どうして貴方まで！」

……僕は声は出さずに、目に神経を集中させる。  
すると、カレンは僕の瞳に気づき驚愕する。

「！　その目……ルルーシュと同じ！」

「これでわかつただろう……彼のことを話す前にちよつとした歴史の話をしようか」

「？　なんで？」

それによつて、これからが変わるからだよ。君の中での僕という

存在が……君は僕を軽蔑するのかな？

「カレン、『狂王』という人物を知っているかい？」

「ええ、たしか100年前のブリタニアの領主……今のブリタニアの、元凶と言われる男……！！」

やっぱり、君もそう思うのか……もっともそれが事実だし、日本が植民地になった原因でもあるのだから仕方がないのだけれど、やっぱりさびしいな。

ゼロに拒絶される覚悟は出来ていたけれど……カレンには、こう言われただけでもすでに自分が嫌になってくる。

「……彼には妹がいた。彼と妹はいつも兄達にいじめられていた。母が日本人であるというただそれだけの理由で。彼は母と妹が蔑まれることだけは耐えられなかった。

そして、彼は望んだ。妹や母親を守る力を……そんな時、1人の魔法使いが彼の前に現れ力をくれた。その力の名は『ギアス』

「

「！？ ライ……ちょっと待って、あなた一体何を……」



「……彼はその力を使い……父と兄達を殺し、王となった。母と妹を守るために、戦い続けた。

だけど、蛮族との戦いのとき、彼の力は暴走し、制御が出来なくなった。それに気付かずに、彼は言ってしまった。『敵を皆殺しにする』と」

「……」

そう、それがあの悲劇を生んだ……あの不用意な一言が今の世界を作り出した……

「その声は国全体に響き、兵士だけでなく領民に……彼の妹や母にまで届いた。

彼は必死にすべてが終わった戦場で二人を探した。そして……彼は見つけた……母と妹の亡骸を……」

「……」

「彼はもう何のために生きればいいのか分からず、死を望んだ。

……だけど、魔法使いは彼が死ぬことを許してくれなかった。だから長い眠りについた。もう世界にかかわらないように……そのと

き、彼は自分に命じた。……『ライよ、全てを忘れよ』と」

本当なら、皆と会う事もなかった。僕はずっと眠っているはずだった。

だけど……その眠りさえも現実には許してはくれなかった。

「僕の眠りはブリタニアによって妨げられた。この時代の知識を流し込まれ、肉体を強化された。

……ただである日僕はとうとう脱走した。そして辿り着いたのがアッシュフォード学園だった」

「……それじゃ、あなたが……」

カレンの問いに僕は静かにうなずく。

「僕の本当の名前はライゼル・エス・ブリタニア。

力を望み、力によって全てを失った……今の世界を作り出した男だ」

「……」

僕は話を終えるとカレンの反応を待つ。

別に罵声が飛んでこようと、拳が飛んでこようと……銃弾が飛んでこようと構わない。

……僕の罪は、そんな生ぬるいものではないのだから……

「……どうして、どうして私には話してくれなかったの？」

「……………え!？」

思いもよらないカレンの問い。顔を上げると……カレンは泣いていた。

僕を責めるどころか、僕を見て涙を流していたのだ。

「どうしてルルーシュには教えて、私には教えてくれなかったの! ? 私達はパートナーでしょ!？」

「カレン……………」

「たとえ貴方が原因だとしても今のブリタニアを作ったのは今の皇帝でしょ!！」

現に……貴方は私達と一緒に戦ってくれてるじゃない!!」

「!」

「それに、あなたは家族を守るために戦った! そんな貴方をどうして責められるの!!」

「!!……ありがとう、カレン……ごめんね。信じてあげられなくて」

わかっていなかった。恐れる必要なんて無かったんだ。  
僕達はお互いを信じあう、パートナーなんだから……

- - - 5分後 - - -

「落ち着いたか、二人とも？ …… 私もいるのだから抱き合うのは  
ほどほどにしてほしいのだが……」

「「あ……／＼／＼」」

……完全に忘れてた。

僕達はすぐさま離れて距離をとる……もう少しあのまま居たかつ  
ただ……

「そ、それでライ。貴方の話はいいとして、ルルーシュのことは？  
……彼にも何かあるんでしょう。」

「あ、ああそうだね……ルルーシュには信じられるようなら話して  
もいいといわれたけど。C・C、どう思う？」

「なぜ私に聞く？」

「君は彼の共犯者だろう？なら君の意見をおきたい」

「お前が大丈夫と判断したなら問題ないだろう。教えてやれ」

「……分かった。カレン、ルルーシュも僕と同じなんだ。彼も家族  
を守るために戦っていたんだ……」

そうして僕は話し始めた。

ブリタニアの皇子であったこと。母を暗殺され、妹を傷つけられたこと。父親に人質同然で送られたこと。

……そしてギアスのことと、暴走について……

「じゃあ、あの時ルルーシュの瞳がずっと赤かったのは……」

「それがギアスの暴走だよ。行政特区で、彼は僕と同じ運命を辿ってしまった……!!」

「私、ルルーシュを見捨てちゃったんだよね……」

「いや、何も知らないなら仕方が無いよ。今はとにかく彼の無事を祈って……「無事だぞまだ生きている」……C・C・なんでそんなことわかるんだ？」

「私には契約者が生きているかどうか感じ取れる。言ってなかったか？」

言ってないよ！ ルルーシュも言わなかったし。なんだ、それならあまり心配はいらなかったな。

……ん？ まてよ。まさか、僕のことまで……？

「ああ、多分いるだろうくらいに感覚だったかな」

「人の心を読まないで!!」

「? ライ、どうしたの?」

「ああ、いやなんでもない」

くそっ、カレンに変な目で見られてしまった! どうしてくれるんだこの魔女!

いやそれよりも……ルルーシュが無事って……

「C・C、本当に生きているのか?ブリタニア軍はゼロの処刑を公表したが……」

騎士団の幹部の皆は捕まったままだが、ブリタニアはゼロが本国で処刑されたと発表した。

スザクはゼロを捕らえた功績として、帝国最強の騎士団『ナイトオブラウンス』に任命されたとも。

だが、ブリタニアはその処刑映像を流さなかったり、不可解な点

が多かったため、僕は彼の生存を信じている。

……なのに……

「ああ、恐らく私をおびき寄せさせる罠としてあいつを利用するためだろうな……」

「？ どういうことだ？」

「悪いがそれ以上は言えん。だが、ルルーシュが生きているのは確かだ。」

……聞くだけ無駄か。彼女は言わないことは何があっても言わない。今までがそうだった。

「わかった。なら僕達はルルーシュ奪還のためにも、今は騎士団を再興させないと……」

「ええ、皆を助けるためにも頑張りましょう！」

そうだ、僕達がゼロを、皆を助け出す！ ……そして、今度こそ



日本を取り戻す！！

## STAGE 10 真実と過去（後書き）

作「祝！第一章完結！！」

ラ「…まさか一章がSTAGE 10までいくとは…途中連載なのに…」

作「いやでも、本当にアニメは詰めすぎだと思いますよ？もう1、2話使つてよかつたきもする…」

カ「ともあれ、今度からR2に入れるわね！！」

作「…ネタが思いつけばね…」

Ｃ「なにしろ、一章を終わらせられるかさえ分からなかったからな…」

ラ「おまけに途中で別の連載始めちゃうし…」

カ「何考えてんの？」

作「だめだ…この人たち厳しすぎる！！だってまじテストショックだったんですよ！！結果が親の手に渡ったとき何て言ったと思います！？」

Ｃ「知らんがろくなことではないのだろう？」

作「『テスト中寝てたの？』ですよ！？寝る間もおしんで勉強して、全力を尽くした子供に酷いと思いません！？」

ラ「結果は全てにおいて優先する!!」

作「……なんで君がルルーシュの真似するの?いくら捕まってると言え……」

カ「……大丈夫なのかしら?」

作「連載自体はちゃんと続けようと思います。ネタが尽きるか、あるいは苦情が来るまでは……まあ前者以外ないですけど……こんな私ですが皆さんR2編も、できればめだかの小説のほうも、よろしくお願ひします!!」

## 次章予告

(前書き)

第二章、R2編の予告です。

ネタバレが含まれるので、注意してください



第二部 R2編 予告

ブラックリベリオンから約一年、双壁は遂に仲間達との再会を果たす。

「すまなかったな、ライ」

「さあ、はじめよう……僕らの反逆を!!」

舞台は日本から場所を移し、新天地へ……!

「必ず、ここに戻ってくる! 日本に!」

「ええ、私達を取り戻す。今度こそ、私達の国を!」

だが、突如双壁は引き離される。

「カレン……？ 嘘だ……嘘だぁー……！！！」

「！？ まずい、全員ライを止める！！」

「星刻……！！ お前が、お前のせいで……貴様さえいなければっ！！」

パートナーを失っても、彼らに立ち止まることは許されない。

「ライ……お前、カレンのこと好きだったんだろ？」

「わかってるよ。ギアスは僕を孤独にする。でも……まだ失っていない！！」

「今度こそ、僕は取り戻す！！ もう誰も……失いはしない！！」

そして騎士団は再び決戦の地、トウキョウへ……

「今度こそ……取り戻す！！ 日本を！ カレンを！！」

「馬鹿な……このエリア11、日本に全ラウンズが集結したと言うのか！？」

「来い！！ ここからは黒の騎士団の双壁が一人、皇ライが相手をする！！」

しかし、戦いは思わぬ形へと進んでゆく……

「狂王、ライゼル・エス・ブリタニア。彼は我々が目覚めさせてしまったのです。そう、全ての元凶を……」

「ライ……すまない……！！」

「ライ……いや、ライゼル！！ 貴様の犯した罪、我らを騙していたこと、もはや許しがたい！！」

貴様は今ここで…… 藤堂境四郎が討つ！！」

再びライは狂王の道を行く……！！



「もう、狂王になるしかないと言うのなら、僕は……私は!!」

「ライ、なぜだ!? なぜ俺とスザクの邪魔をする!?!」

「悪いが貴様らのつまらん茶番に付き合う気は無い! 貴様らは  
私に従え!!」

たとえ愛するものと戦うことになるうとも……

「ライ、私……あなたとなら……!!」

「私に刃を向けると言うのなら……騎士団であろうと、ブリタニア  
であろうと……ルルーシュであろうと、スザクであろうと……そし  
て貴様でも殺すぞ、カレン」

ついに最終決戦を迎える……！！

「いいのかい？ 君はあいつのこと好きだったんだろ？」

「ええ、今でも愛している。だからこそ、彼は私が止める……！」

「いいのかいライ？ このままだと、君はまた全てを失うよ？」

「違うよ、『』。失うんじゃない、全てを終わらせるんだ。戦争も、狂王も……この戦いで……！！  
ギアスが僕を孤独に言うが、僕にはまだ君がいる。最後まで抗ってみるよ」

戦いの先にあるものとは……？ 世界は一体彼らをどのように導くのか？



## 次章予告

(後書き)

作「やってしまった…」

ル「後半のネタバレが酷くないか…？」

ラ「これ、変更になる可能性は…？」

作「分かりません。書いてる途中、『こっちのほうがいいかな？』  
とか思ったら変わりますし…」

カ「最後、オリキャラまで出てきてるし…」

作「そいつは中盤→終盤にかけて出すつもりです。さあ、R2の人物も参加し戦いがさらに多くなる中、ライたちはどうなるのか？ R2編、ただ今製作中！！」

**T U R N 1**

**作戦前夜（前書き）**

久しぶりの投稿！！そしてここからR2編に入ります！！



- - - - -

「やっとここまでこれたか……」

あの大戦から早くも1年が経過した。この1年、正直言っている  
いろいろすぎたな……

1番大きかったのは、僕が『皇』の養子となったこと。

エリア11の総督がカラレス將軍に変わり、日本人への圧制が高  
まる中、少しでも騎士団加入者を増やすため、僕が神楽耶様に頼み  
こんだんだ。この効果はなかなか大きく、今まで手を貸さなかった  
レジスタンス組織も騎士団に加入するようになった。

逃亡生活は本当にひどかった。

ト部さんが集めた情報が間違えばっかりだったり……日本人が強  
制労働されている工場だと聞いたら、ただの化粧品工場だったり……  
仲間が連行されている車があると聞いたら、ただの幼稚園の送迎  
バスだったり……

しまいにはカレンが「ト部のおっさん」と呼ぶほどだった。大丈  
夫なのかな、四聖剣……

今、団員は目立たないようバラバラの場所に住んでいる。僕はカ  
レンとC・Cと一緒にだ。ルルーシュ、そしてギアスを知っている

面子でそろえた。

別にいかかわしい理由でなければ、ト部さんの虫料理がいやだったとかいう理由じゃないよ！……他の団員も嫌がってたけど……

「ライ、ト部さんから？」

「ああ、飛行船の手配が完了したそうだ。明日、予定通り『飛燕四号作戦』を決行する……ルルーシュを、ゼロを復活させる！！」

「いよいよね……」

「だが、いいのか？ 全戦力を投入して……失敗したら、今度こそ騎士団は完璧に終わるぞ」

「成功させるさ。そのために、この1年戦力をたくわえてきたんだから……」

この1年で騎士団の人員は逃亡時代の2倍、3倍となっていた。全盛期と比べれば人員の質、またナイトメアなどの兵器の面で劣るが、作戦を成功させるには十分だ。

ナイトメアも当日奪取したものを使えばいい。

「それじゃあライ、私は予定通りタワー内でルルーシュと接触する



役でいいのね？」

「……いや、カレン。ルルーシュとの接触は僕がやる。君は飛行船で待機していてくれ」

「え！？」

……ごめんカレン。でも状況が大きく変わってしまったんだ。  
さすがに、君を行かせる訳には……

- - カレン side - -

「どうして？」

作戦計画当時から、私がルルーシュと接触する予定だった。ライも納得していたはず。

それなのに、なんでこんな直前に……？

「実は……今回、タワー内に潜伏するための衣装はC・Cが用意したんだけど……なんていうか、その、僕が思っていたのと全然違くて……むしろ正反対で」

「衣装？」

……え？ まさか、ライが作戦を変更するのってそれだけの理由？  
どうしたんだろう。いつも慎重に準備を行う彼らしくもない。

「ライ、衣装くらい大丈夫でしょ？ どうせタワー内で着てても不自然ではないんでしょう？」

「そうなんだけど……危険すぎる！ 君をあんなところに行かせる訳には行かない！」

「……カレン、ライはお前を心配しているんだ。ライに任せてもいいと思うぞ」

ライが私のことを？ ……でも今度の作戦は、そんなことを言うていられる作戦ではない。

もともと私のせいでルルーシュは捕まって、騎士団はこんなことになっちゃったんだから……

「ライ、私達は絶対にゼロを復活させなければならぬのよ。私なら大丈夫だから。皆だっていきなり作戦が変わったら動揺するでしょう?」

「しかし………なら、せめて僕もタワー内に行く! 僕も「だめだ」………なんでだ! C・C……!」

私に同行しようとしたライをC・Cがとめる。

なんだかんだ言っても、この人が一番冷静だったりするのよね。ルルーシュのことも、ブリタニアのこともよく知っているし……

「お前は現在、騎士団の総司令を勤めている男だぞ? それに先ほども言ったが今回は騎士団の全戦力を投入する。お前がいなかったら、一体全体の指揮は誰が執るんだ?」

「それは卜部さんが……」  
「まともな情報の一つも入手できない男が?」  
「……!? くっ!」

「……卜部さん、あなたこの1年でどれだけ信用を失っているんですか?」

まさかとは思いますが、飛行船の方は大丈夫なんですよね？  
私は信じてますからね。

「……ならカレン！！ 何かあったらすぐに言って！！ 絶対だよ  
！！」

「う、うんわかったから。皆をお願いね」

理由は全然わからなかったけれど、ライはとても切羽詰った顔で  
私に注意を促した。今までで一番彼があせっていたのかもしれない  
……服なんてそんなに影響はないと私は思っただけだな。

そしてこの後、私は後悔することになる。というより気付くこと  
になる。ライが言っていた「危険」の本当の意味を……

## TURN 1

### 作戦前夜（後書き）

作「ついに2章に突入!!」

ラ「ひとまずは目標の1つをクリアだね…」

作「はい、できれば完結させたいと思います。あと皆さんに聞きたいのですが、潜伏期間中の話はほしいでしょうか？なんなら番外編で書こうとも思いますが、特に無ければこのまま進めようと思います。意見や感想、アドバイス、いつでもお待ちしております!!」

### 次回予告

ついにこの時が来た……

1年間この時のために力を蓄えてきたんだから…

だけど、雌伏の時はもう終わりにする

ルルーシュ、もう一度君を取り戻すよ………本当の君を！！

N E X T   T U R N   『魔人が目覚める日』

## TURN 2

### 魔人が目覚める日

- - - 東京租界上空 - - -

今僕達は作戦決行のため、飛行船内にいる。団員も、現場に潜入しているカレンを除いて全員が搭乗している。無頼と月下も一緒だ。飛行船の操縦はC・Cが行っている……本当に彼女はいろんな技術に通じているな。ナイトメアも操縦できるわけだし。

「こちら2D4。まもなくトウキョウ租界管轄空域に入ります」

『了解。飛行目的は広報宣伝で間違いないな?』

「変更なし。滞空時間も申告通り14時間を予定」

『確認した。上空飛行を許可する』

「対応、感謝します」

ブリタニア軍との通信も操縦席に座るC・Cが上手くこまかす。

なんとも手馴れたものだ……ルルーシュといいC・C.といい、演技がうますぎる。

「カレン、持ち場には着いた？」

「ええ、こちらは問題なし……だけど、この服は……どうにかならないの？」

「……………やっぱり今からでも僕が行こうか？」

無線機の向こうで話すカレンは今……バニーガールの格好をしていた。

たしかに、カジノならこの格好のほうが疑われること無く、行動しやすいのかもしれない。そういう意味ではC・C.は別に間違っているではない。むしろ正しい……だがしかし……！！！！

あんな腐った貴族が腐るほどいる中にカレン（バニーガール状態）を一人で潜入させるなんて……！！

弱ったウサギを肉食動物の中に放り込むようなものだ！！（比喻ではない）

しかも、もし向こうが何かを仕掛けてきてもルルーシュと接触するまではカレンは何も出来ない。

だからこそギアス能力もある僕が変わろうとしたのに……！！



「いえ、それよりそろそろ……！ …… ルルーシュが来た。これより接触する」

「了解。くれぐれも僕達が攻め入るまでは問題を起こさないように。ただし、なにかあつたらすぐに連絡するように」

ルルーシュが来たならひとまず大丈夫か……後はカレンに任せよう。このままいけば何事も起こらずに作戦を決行できるはずだ。

…… ルルーシュ、今の生活のままのほうが幸せかもしれないけれど、君にはもう一度目覚めてもらつよ…… 本当の君を、今こそ取り戻す！

- - ルルーシュ side - -

バベルタワーのカジノフロア。ここは金ももてあましている貴族達が賭けをしている場所だ。

この国の…… エリア１１の姿が良く分かる場所でもある。

本当ならば、このような薄汚い場所に口口を連れてきたくはなかったのだがな。

「兄さん、帰ろう。ここは止めといた方が……」

「良いじゃないか分かりやすくて。」

……見るよ。貴族はイレブンを同じ人間だとは思っていない。見ないふりをしたって、結局……」

「だからって……」

「わかってる。でも事実だ。イレブンは2度負けたんだ。力も無いくせに反乱なんか……「あぁっ！」……」

「申し訳ありません！」

「いや、いい」

カジノの奥に入ったとき、一人のバニーガールがぶつかり、彼女が手にしていたシャンパンをこぼしてしまう。

ここで働いているということは、イレブンなのか？ それにしては珍しい赤い髪をしているが……

「私はイレヴン、貴方はブリタニアの学生さんですから……」

「なら尚更だ。嫌いなんだ。立場を振りがざすのは」

「でも、力の無い人間は我慢しなくちゃいけないんです。例え相手が間違っている……」

「君たちの価値観を俺に押し付けないでほしいな」

「申し訳ありません……っああ!？」

「!?!」

彼女の行為を制そうとしたが、大男が彼女の赤い髪を乱暴に掴みあげた。

……この男、見たことがある顔だな。たしかこのカジノでキングを名乗っている男だったか？　このような狭い世界で王を名乗るとは馬鹿馬鹿しいがな。

「今日の兎狩り、大量で何よりでございます」

「……私は、売り物じゃない!」

「売り物だよ。勝ち取らない者に権利等ない。悔やむのなら力無き自らの生まれを悔やみたまえ。

皇帝陛下もおっしゃっているだろう？　弱肉強食、それが世界のルールだ」

「っ!?!」

こいつも同じか……自分は見下す側でいると思っている。  
本当に、この世界は腐っている……

「傲慢だな。自分は食べる側にいるつもりか？」

学生と貴族、どちらが食べる側か……とりあえずこれでハッキリ  
させないか？」

そこで俺は、自分が持ってきていたケース……チェス板を男に見  
せた。

もともとこれをするためにここに来たんだ。何の問題もない。

「チェスで？」

「兄さん、いけない!!」

「学生は本当に何も知らない……」

「そうでもないさ 黒のキングさん。こっちでは名の知れた打ち  
手なんだろう？」

「ほう。知った上でかね？」

ああ、知っているさ……いや、知っていなくても問題はない。

[illegible]

「ば、馬鹿な……!!?」

「困ったな。こんな噂が広まっては、私の面子が立たん」  
「言いふらすような趣味は……」

196

「イカサマ!？」

こいつ！ まさか最初からそのつもりで……!!？  
なにがキングだ!! ただの醜い悪あがきだろうが！

「拘束しろ！ さて、証拠を作ろうか。」

「薄汚い大人が！」

くそ、さすがに屈強な大人二人がかりではとてもではないが勝ち  
目がない!!

こんな卑怯なやり方で……！

「正しいことに、価値は無いんだよ……！ なんだ、テロか!？」

キングが俺に銃を向けた瞬間、轟音が響き渡った。  
そして天井から……騎士団のナイトメアが降ってきた。

- ルルーシユ side end -

「総員、出撃しろ!!」

「了解!!」

飛行船をバベルタワーに取り付け、僕達はタワー内に侵入する。  
ナイトメアが10機ほどしかない僕達は一刻も早く、ルルーシユを確保しないと!!

ルルーシユにはカレンがついている。発信機の取り付けには失敗したようだが、彼女がルルーシユと一緒にいてくれれば何の問題もない。すぐに終わらせる!!

「どうした紅月……なに!? 目標を見失った?」

「!? そんな……ト部さん、部隊の指揮をしばらくお願いします。  
C・C、ルルーシユの場所が分かるか?」

「ああ、おそらくこの下のフロアに居る。」

「なら……いくぞっ!」

僕とC・C・は床を破壊し、一気に階下へと赴く。

逃げまとう人々の中、僕はルルーシュを探す……いた!!

やっと見つけた……僕達が1年間探し求めていた男を!

「C・C・、君はルルーシュを連れてここから離脱を……!?!」

サザーランド! 外から!?! ……もうブリタニア軍が動き出したのか?

僕は銃撃を輻射波動で受け止め、ハンドガンを放つ。そのまま一気に制動刀でまず一機をしとめる。

……? ルルーシュがいない!?! 今の騒動の間に、逃げてしまったのか?

「C・C・、ここは僕が引き受ける。ルルーシュを追ってくれ!!」



C・Cに指示を出しながらも攻撃をやめない。

スラッシュハーケンで相手をのけぞらせ、ハンドガンでしとめる。残った1機も左腕で捕らえ、輻射波動により爆散した。

もうこの場は大丈夫だ。

C・Cからルルーシュを見つけたとの通信が入り、僕もそこに向かう。

カレンやト部さんもすでに到着していた。

「世界は変わる……変えられる」

ルルーシュ……やっと記憶を取り戻したのか……本当の自分を取り戻せたのか。

これで、騎士団は本当の復活を果たせる！

「お待ちしておりました、ゼロ様。どうか、我々にご命令を」

「いいだろう、なぜなら私はゼロ！！ 世界を壊し、世界を創造する男だ！！」

この時、眠っていた魔王が遂に目を覚ました！！

……さあ、始めよう、僕らの反逆を！ 雌伏のときは、今日で終わりだ！！

## TURN 2

### 魔人が目覚める日（後書き）

作「魔王、ルルーシュ復活!!」

ラ「あの腐った貴族は僕が処理するはずだったのに……」

ル「ああ、カレンに手を出したやつのか……」

作「ライと一緒に行かせると、それこそ作戦が始まる前に暴れてしまいそうだったので…飛行船の中に…」

ラ「カレンの髪までつかんで、さらに商品とか呼ぶなど…」

ル「おい、戻って来い。あの男にはすでに天誅がくだった」

作「しかもだれにやられたのかさえわからないという……ある意味残念なキャラだね……」

ル「それで…次回は…」

作「アニメでは衝撃を受けた回の一つだね、正直言ってあれは名シーン、名台詞だった……」

## 次回予告

さあ、ゼロは今日覚めた。償いの時は来た。

この世界にゼロが戻って来たという事実が何を意味するのか……

ブリタニアに思い出させてやるとしよう。僕達の手で……

未だかつて、ゼロと双璧が共に戦った時その戦場に敗北は無い！！

僕達を見下してきたブリタニア軍に……今こそ、教えてやろう

もう、嘘の支配はいらないから……

NEXT TURN 「日本独立計画」

### TURN 3 日本独立計画（前編）（前書き）

戦闘シーンを書いていないというのに、思いのほか長くなりそうだった。なので前半と後半に分けました。

TURN 3 日本独立計画（前編）

僕とC・C・はルルーシュからブリタニアで何があったのかを聞くため、そして彼に現状を教えるため皆を先行させた。  
今ここにいるのは三人だけだ。

「……俺は過去の自分に、スザクに敗れた。そして俺はあの男の前に……ッ！ブリタニア皇帝の前に引き出された！！」

あの男のギアスは『記憶を書き換える』能力。そのせいで俺は……C・C、お前か？」

「あの男にギアスを与えたのは私ではない」

「……ナナリーはどこにいる？」

「お前の妹を探そうにも、騎士団を存続させるだけでも困難でな」

「そこらへんは僕も尽力したんだけど……すまない。何もできなかった」

そう、1年間かけてもナナリーの情報をつかむことさえできなかった。ブラックリベリオン後、彼女の話は今のところ誰も知らない。

できることなら、彼女を確保してルルーシュを迎えたかったのだが……

「お前でだめならば仕方がない。むしろよく今まで騎士団を支えてくれた。

…… 皇帝にギアスを与えたものを探し出し、ナナリーを……！  
？ 俺に妹はいるが、弟はいない！ だれなんだあいつは！？」

「ああ、多分彼はブリタニアの…… 『そこで何をしている！！』  
…… ツー！！」

突然後方からサザーランドが接近してきた。

僕とC・Cはとっさにブリタニア軍のナイトメアの後ろに隠れる。月下は隠れているから大丈夫だと思うけど……

「軍人さんですか！？よかった、この人に早く手当てを！！」

…… 演技上手いなルルーシュ。どっからどう見ても事件に巻き込まれた普通の高校生だよ。

彼の言葉を信じ、機密情報局の者を助けるために（死んでるけど）出てきた軍人に向け、ルルーシュは命じる。 王の命令を……

「よこせ、お前のナイトメアを!!」

「……わかった。認識番号はQR5YK1D6」

「ありがとう」

「ギアスは相手の目を見なければかからないとはいえ……」

「すばらしい演技だね」

「不老不死の魔女に言われたくない。ライ、お前とてこれくらいはできるだろう?」

「いや、無理だと思う……そうだ、C・C・『あれ』をルルーシュに渡しておかないと……」

「ああ、そうだったな……」

C・C・が懐からコンタクトレンズのような物を取り出し、ルルーシュに手渡す。

C・C・がルルーシュ復活にあわせて作っていたものだ。

「特殊なレンズで作ったコンタクトだ。暴走したギアスを防ぐためにね。これをギアス使用時以外はいつもつけていてくれ。目の色も君の目と同じだから疑われることも無い」



「もつとも、それ以上ギアスが強くなったら効果がなくなるかもしれないがな……」

「いや、これで十分だ。ありがとう」

とにかくこれで作戦に移れる！

僕とC・Cは前線に、ルルーシュは全体の席指揮をとるために全体を見渡せる管制室へと移動を開始した。

- - ルルーシュ side - -

「よくやったQ1、次は21階へ向かえ。P4は階段を封鎖しろ。R5は左30度。L1、そこから50m天井に向けて斉射」

まったく問題ないな。ライのおかげで騎士団の戦力も十分。サザーランドもすでに数機奪った。

これで、歩兵部隊も前線にだせる。このまま押していけば、自然と敵のほうから動いてくる。そうすれば、こちらも作戦がたてやす

くなる。」

「フツ、そろそろカラレス総督の出番かな」

「順調みたいね」

「？ カレン、21階に向かえと……」

「あなたの側にいたかったの……ようやく二人っきりになれたわね  
……」

カレンはそう言って銃を俺に向ける……1年たったといっても、  
どうやら俺のことをまだ疑っているようだ。先ほどは、ライがい  
たから黙っていただけか……

「神根島でゼロを見捨てた君が、何の話だ？」

「ルルーシュ、あなたはずっと騙していた。ゼロの正体、そしてギ  
アスのこと……」

「……ライから聞いたのか？」

「ええ、ライの過去も全て聞いた」

「そうか……」

ついにその決心がついたのかライ。やっとカレンと向き合えたのか……

「あなたも、決して自己の利益のために闘っているわけではないと分かった。そんなあなたなら信じたいと思った。

……でも、答えて。あれは本当に『ライの意思』なの？ あなたは私にも、ライにもギアスを使ったの？ 私達の心を捻じ曲げて、従わせて……」

「フフフフ……」

「ルルーシュ……」

「君の心は君自身のものだよ。ゼロへの忠誠も憧れも、ライへの想いもすべて。

……ライとてそうだ。あいつは自分の意思で戦うことを選び、そして俺に打ち明けてくれたんだ。自らの過去を、罪を、思いを……」

俺は静かにカレンに歩み寄る。だが、カレンはそんな俺に向け再び銃を構える。

「動かないで!!」

「カレン、誇りに思っている。君が……君達が決めたんだ、君達を選んだんだ。この、私を。」

「……信じられないか?」

「……信じたい。だから奴隷になっても……でも私が信じるのはライよ!!」

もしあんたがライの信頼を裏切るようなことをしたら、今度こそ……!!」

「ああ、それでいい」

もはや彼女の中ではゼロへの憧れや忠誠よりも、ライへの思いの方が確実に強く、大きくなっている。

ならば彼女には、ライを一途に信じてもらっていたほうがいい。

「……ところで、いつまでその格好でいるつもりだ?」

そう、今でもまだカレンはバニーガールの姿のままだった。

……ライ、お前がよく許可したなこの作戦。おそらくC・Cの仕業だろうが……だが、露出が激しすぎる。

「み、見ないでよ、変態！」

「ゼロに向かって、その言い方は……」

「今はルルーシュに言ったのよ！」

「はいはい……ん？ 通信？」

ライから？ 何か戦況に変化が起こったか？  
それとも、ついにブリタニアが動き出したか……

「私だ。どうした？」

『……ルルーシュ、今カレンのこといやらしい目で見てなかったか？ いや、見てたよな？』

「……？ い、いやそんなことは無い。カレンとは話をしていただけだ。そ、それより何かあったのか？」

『断罪は後にしよう。ブリタニアに援軍が現れた』

……さて、断罪とはなんだ！？ 一体何をするつもりだ！？  
というかまず、なんでお前はカレンがここにいと分かる！？

「上からも来た。これじゃあ……」

「そうだな、カラレス総督が出てきたのだろう。脱出は難しい。だから、私の勝ちだ！ いくぞ、カレン！」

俺はカレンを連れ管制室から出る。

カレンのあの格好はさすがにまずいので、俺の制服の上着をかけてやった……決してライが怖いから、カレンに優しくしたとかではないぞ！！

- - ルルーシユ side      e n d - -

TURN 3 日本独立計画（前編）（後書き）

作「なんでライは分かるんでしょう？」

ル「…断罪ってなんだ？ 俺は死ぬのか！？」

ラ「安心していいよ。別に殺そうというわけではない…死ぬほどの痛みを味わって生きてもらう…」

ル「なおさらタチが悪い！！」

作「今回は本来一つにするつもりだったので次回予告は無いです。というかネタバレとなる可能性があるの…また次回に！！」

TURN 4 日本独立計画（後編）

「敵は勝利を確信している。条件はクリアされつつある……後はそちらのフロアだが？」

『10分位かな』

「わかった、ならば、今の配置で守りきれるな」

『デイトハルトの仕込みは？』

「システムは生きていた、全ては作戦に基づいている」

そう、ここまでは計画通り。

……だけどなんだ？ さっきからなにか嫌な予感がする。なにか、とてつもない力が迫ってくるような、嫌な予感が……

『こちらB2……敵のナイトメアが一騎で……うあっ！』

「どっした！？」

『そんな、さっきまで』



「B2？ 何だ？ ……敵はIFFを外しているのか？ しかも、単独行動……」

『ゼロ、こちらP6。敵が、敵が……うあああつ！！』

なんだこれは！？ 1機の敵にここまで……！？  
まずい、このままだとその機体がこっちに！ せめて、C・C・  
の準備が完了するまでは持ちこたえなければならぬのに！

「ゼロ！ とりあえず、あんただけでも逃げてくれ。元々我らが陽動、捨て石の作戦だ……ならば！」

「違うな、間違っているぞト部。切り捨てるという発想だけではブリタニアには勝てない」

「……ゼロ」

君も変わったね。今までの君ならばそんなこと言わなかっただろうに

……ブラックリベリオン<sup>①</sup>の敗戦は、意味が無かったわけではなさそうだな。もしあの敗戦から学んでくれたというのなら、あれはただの負け戦ではなくなる。

『ト部隊長』

「いけそうか？」

『はい、物質搬入口ですね』

「ああ、このフロアに来るためにはそこが近道だ」

『……確認しました。ランスロットを元にした、量産試作機かと』

ランスロットの量産機か。もはやそこまでブリタニアのナイトメアも進んでいるのか。

どちらにせよ、スザクでないだけまだマシか……

「そうか。しかし、今は捕縛の時ではない。破壊しろ」

『わかりました……えっ！？ 消えた！？ なっ、何でこっちに！？』

「待て、消えたとはどういう事だ！？」

……消えた？ それほどの速さだというのか！？ だが、いくらなんでも量産機で いや、ナイトメアでそんなスピードを出せるはずがない！

それともなにか別の力か……？

「C・C……そちらのフロアは、まだ終わらないのか!？」

『何を慌てている。そちらにはカレンとト部、なによりライがいるだろう?』

「……ゼロ、来るぞ!」

目の前の壁が崩壊し、その中から敵の新型が現れた……たしかに、ランスロットに良く似ている。

相手は二本の剣を抜き、臨戦体系に入っている。

「こいつか！ イレギュラーが……!」

「でも、近接戦闘ならばこっちが上だ!」

「遅い!」

カレンとト部さんがそれぞれ突っ込む!! これなら……!!? そんな!? いつの間にか、二人をかわして目の前に!!

「消えた！？ 本当に！？」

「神速！？」

新型は二本の剣の柄を合わせ、一本の両刀ランスへと変化させる。

「そうは、させない！！」

すかさず、僕も制動刀を抜き斬りかかる。

「ゼロ、君は離れてろ！！」

あの動きにさえ、気をつければ……

制動刀でランスを受け止めて、そして再び……！？ なっ……消えた！？

「「ライ！！」」

ありえない……！！ いつの間に後ろに！？  
だめだ、ここからでは避けきれなっ……！！？

「ト部ッ!？」 「ト部さん!？」

敵のランスを受けそうだった僕をト部さんが押し出し、ランスを廻転刃刀で受け止めていた。

「ゼロ、お前の正体が学生であろうと構わねえ!!」

『切り捨てるだけでは』といった……その言葉に偽りはないと受け取った! 紅月、ライ!

「は、はい!」

「ゼロを頼む。彼だけが我々に残された最後の希望だ!

ゼロよ! 日本の……民を、拾ってやって……欲しい……!」

「! ダメだ、ト部さん!!」

ふざけるな! もう、これ以上僕は失いたくない!!

僕は制動刀のブースターを使い、無理やり月下を急加速させる。

この勢いなら、間に合う!!

「どおけええええ!!」

このスピードはさすがに避け切れなかったのか、敵は制動刀をランスで受け止める。この間に僕とト部さんは距離をとる。

「ト部さん、今何をするつもりだったんですか!？」

「ライ……だがそれ以外に方法が……!」

「藤堂さんと再会さえできなくていいんですか!？ 僕達で皆を助けると決めたでしょう!!」

……もう、僕はこれ以上、誰も失いたくないんです!」

「!!……すまない、心配かけた……」

「いいですよ、全員生き残ってここから脱出しましょう!」

……ただ、どうする？ 結局相手の動きは止められない。あの速さは異常すぎる!

ブースターなら可能性はあるかもしれないけれど、一度使ってしまった以上はしばらくの間使えない!

『熱くなっているところ悪いがお知らせだ。準備が整った……全員生きているか?』

「C・C・!! いや、なんと丁度いいタイミングだよ!」

「ああ……ライ、カレン、ト部。お前たちが繋いだこの刹那、無駄ではなかった!!!」

そういうとルルーシュはC・C・が仕掛けた爆弾を爆発させる。この爆発により、バランスを失ったタワーの上半分は崩れ落ちた。

「そうか。これで上にいる敵は地面に叩きつけられて……」

「それだけではない」

「そう、このビルが倒れた先にいるもの。それは……ブリタニア軍本陣!!」

……脱出ルートを絞り込んだのが過ちだったな。その先に自分がいると教えるようなものだ」

「アハハハッ! さようなら、カラレス総督!」

これで条件はクリア。

さあ、中華連邦総領事館に乗り込んで、ゼロの復活を全世界に披露しようじゃないか。

・・ブリタニア帝都・ペンドラゴン・・

現在ここに、在籍ラウンズの大半が揃っていた。こちらではゼロが仕掛けたラインにより、強制的にゼロの復活宣言が流れていた。

223

『私は……ゼロ。日本人よ、私は帰ってきた！  
聞け、ブリタニアよ！ 刮目せよ、力を持つ全ての者達よ！』

『私は悲しい。戦争と差別、振りがざされる強者の悪意。間違ったまま垂れ流される悲劇と喜劇。  
世界は、何一つ変わっていない……だから私は復活せねばならなかった！！』

『強き者が弱き者を虐げ続ける限り、私は抗い続ける！  
まずは愚かなるカラレス総督に、たった今鉄槌を下した！！』



「おやおや、いきなりやってくれたね、イレヴンの王様は。なあ、スザク」

「……」

ナイトオブセブンとなったスザクに声をかけたのはラウンズの人、ジノ・ヴァインベルグ。  
数々の戦場で功績を立て、帝国最強の騎士団『ナイトオブラウンズ』のスリーを名乗ることを許された、若いながら歴戦の猛者である。

「なあ、死んだんだろ？ ゼロは」

「ああ」

「じゃあ偽者か？ どちらにせよ総領事館に突入すれば……」

「重大なルール違反だ。国際問題になるぞ」

「ゼロを名乗っている以上、皇族殺しだ。E・Uとの戦いも大事だけださ」

「どつちも蟻地獄……」

二人の会話に興味なさそうに答えたのはナイトオブシックス、アーニャ・アールストレイム。

最年少でラウンズに入った天才児。

『私は戦う。間違った力を行使する全ての者達と。故に私はここに合衆国日本の建国を再び宣言する！』

『この瞬間より、この部屋が合衆国日本の最初の領土となる。人種も主義も宗教も問わない。国民たる資格は唯一つ、正義を行うことだ！！』

「テロリストが国を建国か……一部屋分の領土しか持たない国など史上初だぞ？

敵ながら、なかなか面白い男だ。コーネリア殿下が苦戦したのもうなずける」

ゼロの発言に面白半分のコメントをしたのはナイトオブナイン、ノネット・エニアグラム。

コーネリアの先輩にもあたる人物。

放送が終わると、スザクは背を向け退出していく。

そんなスザクの様子を不審に思ったのか、ジノが尋ねる。

「おい、スザク？ どこ行くんだよ？」

「皇帝陛下に陳情しに行くのさ……エリア１１に赴任させてもらうように……」

……風雲急を告げるエリア１１に、『白き死神』 枢木スザクもまた舞い戻ろうとしていた。

#### TURN 4 日本独立計画（後編）（後書き）

作「ト部救出完了!!」

ラ「質問にもあったからね。ト部さんのことは…」

作「ライと藤堂が装備している制動刀のブースター機能。連続では使用不可だけど、加速したスピードで踏み込み相手を切り裂く。今回は加速に専念した感じですね」

ル「そして、最後に出てきたのは…ラウンスか…」

作「さすがにキャラ紹介は皆さん飽きたと思うので軽く名前を挙げるだけにしました。要望があれば新キャラだけでもまた作ります」

## 次回予告

中華連邦総領事館に立てこもった僕達。

そこで待っていたのは中華連邦の武官、  
黎<sup>リー・シンク</sup>星刻

だが、違つな…この男は武官なんかじゃない…

この男…危険すぎる!!

NEXT TURN 『麒麟児』

番外編 七夕・・・戦士達の願い・・・（前書き）

今日は七夕ということで……七夕をネタにした番外編です！！

七夕と気付いたのが今日学校から帰ってきてからだったので大変でしたよ…

番外編 七夕……戦士達の願い……

「ん？ ……カレン、何をやってるんだい？」

「あ、ライ。やっと来たんだ」

総領事館敷地内の庭に来てみると、団員達が大きな笹に何かを飾っていた。

よく見ると笹には何か書かれている多くの紙がぶら下がっていた。

「今日は7月7日。七夕なのよ。前に言わなかったっけ？」

「……ああ、あれか。短冊に願い事を書いて笹に吊るすという……」

「そう、それ」

「なるほど。それで今日は皆こんなに賑やかになっているのか……」

多くの団員・幹部が集まっており、すでに笹にも短冊が吊るされている。

ブリタニアとの戦いの中でも、やはり日本の伝統を守り、日本人



としての誇りを持ち続けたいのだろう。

「それで、みんなはどういうのを書いてるんだい？」

「意外とみんな個性的でいろいろあるわよ。見てみたら？」

……見た限りやはり多いのは『日本開放！！』『打倒ブリタニア！！』だ。七夕といっても、団員達はみんな願い事というよりはやはりこれが最初にでてくるか……

お、こっちは幹部の人たちかな？

『かつての日本を取り戻す』『中佐のそばにいられますように……』『藤堂さんの傍で戦うこと』『平和な国』『日本を取り戻すまで戦い抜く』

『また彼女と共にいられますように……』『目指せ、官僚！！』

『出番をください』『幼女と平和に……』

『プリン伯爵を超えるナイトメア』『ゼロを撮りつづけられますように……』『ライ義兄様といっぱいあそべますように』

……藤堂さんと四聖剣以外、まともな願い事が無かった気がする。大丈夫か騎士団？ 南さんのなんて、もはや犯罪行為なんですけど！？

神楽耶はかわいいな。願い事がこんなに純粹だなんて……今度会ったら時間を作ってあげないとな。最近はゆっくり話す時間さえあまりなかったし……

ん？ こっちは……C・Cとルルーシュのやつか？

『ピザ』 妹が安心して暮らせますように』 また二人で遊べますように』

……なんともわかりやすい。というかルルーシュの短冊はこのままで大丈夫かな？ まあ名前書いてないからいいとしよう……しかし二枚も使わなくても良かった気がする……

「それで、カレンは何て願い事を？」

「私は……お母さんのこと。病気もそうだけど、また日本で一緒に暮らせるように……」

「そっか……わかった。僕もちよつと書いてくるよ」

僕は短冊を受け取り、総領事館の部屋へと戻っていった。

……さて、何を願ったらよいのだろうか？

[illegible]

「これでよろっ」

願い事はちゃんと書き終えた。幹部の人たちと同じところに吊るして、後はこれも……

「ライ！　なんて書いたの！？」

「うわっ！！ カ、カレン！？」

「私の願い事も言っただから、ライも私に教えてよね！」

「いや、そんなたいしたことじゃないし……」

「ダーメツ！！」

「あつー!!」

とられたー!! 出来れば誰にも見られなくなかったのに……!!  
まあ、そっちならまだいいとするか……

「えーっと……『みんなが幸せに生きられますように』……なんて  
いうか、あなたらしいわね。

こんな時くらい、自分の願い事を願えばいいじゃない……」

「別にいいじゃないか」

「ライって本当に優しいね。みんなのことばかり考えて……でも本  
当に、ここにある願い事がみんな叶ったらしいのに……」

「最後に叶えるのは僕達だ。自分達で最後までやってみたいと……  
これからも一緒にがんばろう、カレン」

「うん、そうね」

……まあ、叶えてはいけないものもあつたけど……

- - - - -

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

よし、カレンが行ったか。今度こそ……

「カレンに見せてやればよかったじゃないか。お前の本当の願いを……」

$$\begin{array}{c} \neg \\ \vdots \\ C \\ \dot{C} \\ \neg \end{array}$$

どうしてこのピザ女はタイミングを見計らったかのように、いつもタイミングよく現れるのだろうか？ まさか監視しているのだろうか？

「想いというものは……言わなければ伝わらないし、行動で示さなければ理解してもらえないぞ……」

「いいんだよ。僕の想いが変わらなければ……それでいい」

「恥ずかしいだけだろう？」

「……そうともいう」

「ブリタニアを脅かす『双壁』の一人が恋人に対してはこんなに小心者とはな……あいかわらず子供だな……」

「うるさい。君はルルーシュにでも願いを叶えてもらいな」

僕が持っていたもう一枚の短冊……『いつまでもカレンと一緒にいられますように』……

番外編 七夕・・・戦士達の願い・・・（後書き）

「まともなヤツがいらないな、騎士団は……」

作「キミが言わないで……どうでしたか、今回の番外編。書きたてですので、表現に違和感があるかもしれません」

ル「さつさと気付いていればよかったものを……」

作「…気付いたのが他の方の活動報告を見てからという……なんたること……!!」

ラ「感想はいつでもお待ちしております!!みなさんこれからもよろしく願います!!」

作「ライにセリフ盗られた!!…ええと、多分次は土・日か月曜になると思います。次もよろしく願います!!」

「すごい騒ぎね、ルルーシュ、ライ」

部屋に入ってきた僕達にカレンが呟く……そういえばカレンは知らなかったな……

「当然だろう、自分たちの領土の中に突然国ができ、しかもその国が宣戦布告してきたとあってわな……なんだ？」

「……いつの間に入れ替わってたの!？」

「演説の前だ。声は録音、現れた時点で既に別人。マジックショーと同じだろ」

「ルルーシュはもう、学園に戻ったよ。監視もいるし、ここに長居はできなかったから……」

「……気に入らないわね。『また』私たちに秘密にするなんて……」

あ、やっぱり怒ってる……『また』って強調してるし……



「そのことは謝るよ。だけど情報がどこから漏れるか「私達？ 私に、だろ？」」  
分らないし……C・C……カレンを挑発しないでくれ……」

「つまらん奴だ……」 「……フンッ！」

大丈夫かな、これで？

ルルーシュ、できれば早く帰ってきてくれ……僕ではこの二人を止められない……！

今になって、この二人をコントロールしてきた君のすごさを知ったよ。

[illegible]

合衆国日本を宣言してから三日がたったが、ルルーシュからは何の連絡も無い……ブリタニアにしても、中華連邦にしてもそろそろ

何かしら動き出す可能性がある。

ルルーシュの監視が厳しいのはわかるけど、このままにらみ合いが続くとは思えない……

今僕達は中華連邦総領事館の代表者、高亥と会談をしていた。メンバーはこちらが僕とC・C、ト部さん。中華連邦側が高亥とその部下の黎<sup>リー・シンク</sup>星刻。

「ブリタニアとの引き渡し交渉は停滞させています。一週間は持つかと……」

「分かった、ゼロに伝えておく」

一週間か……高亥には僕がギアスをかけていた。『ゼロに忠誠を誓え』と。

そのため高亥は大丈夫なのだが……問題はその後ろにたつ男、黎星刻。武官と聞いているが正直この人は危険だ……！ できることなら、手を組めればいいんだけど……

「では、中華連邦政府の「C・C」！ 考えてみたらアンタがバニーやった方が話早かったんじゃないの！！？」……」

「……」

「……え？ え？ え！？」

「……カレン、せめて服を着てからにしてくれ」

「き、きやああああー！」

……どうしよう。ここにいる奴らにギアスかけてしまおうか？  
あ、でも高亥にはもう使ってしまった……！！

「ゼロは……女！？」

……高亥、あなたは何を血迷ってそんなことを言うんですか？  
カレンがゼロ？

ないない。ゼロはそんな肉弾戦は強くないし、ナイトメア操縦だ  
ってカレンのは劣る。だいたい、彼は頭脳派だ。あのカリスマ性は  
誰にもまねはできない。

「そうだ」

「「違います！……！」」

何を言ってるんだ、この魔女は!?

「バラすのが早すぎる」

「ゼロで遊ばないで!」

「見えるぞ」

「うわああああ!!」

……どうしよう、もうギアス使っちゃおつか。

高亥には軽く記憶障害を起こすくらいに頭をひたすら殴り続けて……国際問題になる? 知ったことかそんなこと!!

「はじめまして、紅月カレンさん。紅蓮式式のパイロットのですね?」

「え!? どうして……」

「興味があるんです、貴方達に……騎士団の双壁と呼ばれ、ブリタニアに恐れられた貴方達にね……」

「……興味、ですか」

まずいな……この男相当頭がきれる。

僕達の情報が知られて、要注意人物に目をつけてきたか……しかも、ゼロではなく僕達に。

「ええ。正直言つとライさん、貴方がなぜゼロに従うのかが分かりません。

貴方ほどの人物なら、トップにたってもおかしくはないはずなのに……」

「……貴方の考えは知りませんが、あくまで僕はゼロの部下であり、それ以上でもそれ以下でもありません。

それに、僕には王の器など持ち合わせていませんよ。騎士団のトップはゼロしかいないんですから……」

「そうですか……ですがなんにせよ、貴方を敵に回したくは無いですね……」

「それはこちらのセリフですよ……」「大変です！！扇さん達が……！！」　　「……どうした！？」

まさか、ついにブリタニアが動いたのか！？

[illegible]

「聞こえるか、ゼロよ！！ 私はコーネリア・リ・ブリタニア皇女が騎士、ギルバート・GP・ギルフォードである！！」

明日15時より、国家反逆罪を犯した特一級犯罪者256名の処刑を行う!!」

「みんな……」

「中佐……！！」

『ゼロよ！ 貴様が部下の命を惜しむなら、この私と正々堂々と勝負をせよ！！』

「まさかここまでするとはな……」

「?」のフリイ?」

「俺達だけで救出するか？」

「……いえ、ギルフォードはゼロを指名していますし、下手に僕達  
が動けば扇さん達が危ない。それに僕達まで全滅する恐れがある。」



ギルフォードによる扇さん達の公開処刑宣告から数時間が経ったが、ルルーシュからの連絡は一切無かった。

「……どうする？　どの作戦にしてもゼロがいなければ始まらない……やはりルルーシュと合流してからト部さんやカレンと……！！？　なんだ！！？」

「何！？」

突然爆音が響き渡った。だけどこの音は……総領事館内部での爆発か！？

なんでこんなときに……！！

『大変です！　ゼロ！　中華連邦が突然……！！』

ッ！　通信も途絶えてしまったか……中華連邦。つまり、この事件を引き起こしているのは……

「ライ、まさか高亥が……」



「いや、彼にはギアスをかけてある。こんなことをするのは一人しかいない……！！」

「……ライは気付いていたのか？ あの男が攻撃してくることを」

「こんなに早いとは思わなかったけどね……」

「アオモリのをきを思い出すわね……」

「あのときよりはました。全員服を着ているからな……」

ああ、あの時は酷かった。寒いアオモリの夜をタオルを巻いただけの状態で、ナイトメアもなしにブリタニア軍から走って逃げたし……カレンに変態って言われるし……

「なににせよ、ここを取られれば私達とルルーシュは……またバラバラに」

「……拳銃のほうバラバラになってるじゃないか」

いい加減C・Cにも銃の組み立てとか覚えてほしいんだが……！！  
来たか……黎星刻！

「意外だな、一人で来るとは……」

「お前さんが首謀者か？」

C・Cとト部さんが淡々と部屋に入ってきた男、黎星刻に述べる。

もつとも、ここに乗り込んできた時点で彼の目的はある程度わかっているが。

「中華連邦の総領事は、合衆国日本を承認したはずだけど？」

「その方は亡くなられる予定だ」

「「「「！！？」」「」」」

「……なるほど、総領事は騎士団と戦って死んだと。そういうことですか？」

「さすが、理解が早くて助かる」

……この知力、へたすればルルーシュと並ぶかもしれない。  
武官でありながらルルーシュ並に戦略にも長けているとは……やはり危険だ。

ここでギアスを使うか？ …… いや、駄目だ。

「それともここで黒の騎士団がついえる道を選ぶか？」

「待て！ いきなり、そんな……！！」

「銃を下げってくれ、カレン、ト部さん」

「ライ……」「だが……」

銃の照準を星刻に向ける二人をとめる。

ここで彼をどうしようと、彼の部下が動くだろうし……そうなる  
と、ギアスも今はまだ使わないほうがいい……

「どうするつもりだ、ライ？ 今この場における総司令はお前だ。  
お前の言葉が騎士団の総意であり、ゼロの言葉となる。お前の意  
志がゼロの意志となる」

「……わかった、総領事は騎士団と戦って死んだことにすればいい」

「ゼロは思わぬ引き金を引いたらしいな。高邁なる野望か、俗なる  
野心か」

話がおわったのか、星刻はこちらから視線を逸らすと背を向け部屋をでていく。

「……良かったの？」

「ああ、こうなったら僕達は明日の準備をするしかない。  
ト部さん。大丈夫だと思いますが、団員達の様子を見てきてくれませんか？」

「承知！」

これでいい……少なくともこの一件で向こうに貸しができたと思うしかない……？ 電話……！？ ルルーシュ！！

『ライか？』

「ああ、ルルーシュ……今大丈夫なのか？」

『問題ない、それより明日の作戦のことなんだが……』

- - - - -

- - -  
- - -  
- - -

「……やはり、それでいくか」

『ああ、お前はどっ思う？』

「最善の策だと思う。ブリタニアもそこまでのそなえはしていないだろうし……ただ、君が来なければ何もできないぞ？」

『必ず行く……だから、待っててくれ』

「了解、そちらのことはまかせるよ。

……あと総領事館のことだが、中華連邦の武官について話したい事がある。時間がある時で構わない」

『ああ、わかった。お前も無茶はするなよ』

ひとまず、これで大丈夫か……黎星刻のことは後で対策を立てるとしよう。

少なくとも彼は何か一つの信念のために動いているような気がする。それなら、今はあまり無理をして動こうとはしないはずだ。

「ライ、ルルーシュは大丈夫なの？」

「ああ。僕達とはかく、明日の出撃にそなえよう」

ルルーシュ、僕達はいつでも出撃できるようにしておく。だから、頼んだぞ……

## TURN 5

### 麒麟児（後書き）

作「ライと星刻の邂逅話。ギアス中でもこの二人の総合能力はトップクラスです」

ル「戦略と戦術を持ち合わせた二人……ブリタニアではビスマルクくらいだが……」

ラ「正直言つて戦いたくない相手だった……」

カ「この人もルルーシュみたいに策士のような考えかただし……」

作「星刻が本格的に活躍するのはまだですけどね……次回はちゃんと処刑の日となります。ライたちはどう動くのか？」

## 次回予告

ついに来てしまった…扇さん達、黒の騎士団員の処刑当日。

ここで主力団員を失うわけにはいかない。なんとしても助け出さないと…!!

突破口は必ずあるはず……

もう、誰も失うわけにはいかない…!!

だから僕達は

N E X Y   S T A G E   「逆襲の処刑台」



「……これはどう受け取ったらいいのかしら？」

紅蓮式を前に、カレンが怪訝な表情で星刻に尋ねた。

やはり、星刻を信じ切れていない……いや、信じるというほうが無理なんだが。まあ、何か罠があると警戒してもらったくらいがちょうど言い。

彼のような策士はいつ、何をしてくるかまったく読めないからな。

「ゼロが現れたら動いてくれていい」

「我々なら、たとえブリタニアに発砲しても知らん顔を決め込める  
と？」

「悪い取引ではないはずだ」

「武官と聞いていたが、政治もできるようだな」

「フツ、僕に『トップにたってもおかしくない』といいながら、ご自分がそれほどの力をお持ちとは……本当に恐ろしい人ですね、貴方は……」

事実、今も100年前も彼ほどの実力者は見たことがない。  
こんな男が大宦官におとなしく仕えるとは思えない。はたして、  
この男の目的は何なんだ？

「……ゼロは来ると思つか？」

「来ますよ、貴方もしっかりみておくんですね、僕達のリーダーを  
……」

「だがライよ、いい加減時間が無いぞ……」

「大丈夫ですト部さん。信じてください、ゼロを」

ルルーシュ……頼む君がいないと作戦も実行できない！！ 皆を  
救えない……！！

『イレヴン達よ。お前達の信じたゼロは現れなかった。すべてはま  
やかし。奴は私の求める正々堂々の勝負から逃げたのだ……構え』

もう時間がない……！！

処刑台の前に並んでいるいるサザーランドの銃口が、捕らえられた黒の騎士団のメンバーに向けられる。

『みんな……！』

『動くな。動いたらおまえも殺される』

『わかってる……！ でも……！』

「落ち着け、カレン！ まだ……『違うな。間違っているぞ、ギルフォード』……来た……！」

ルルーシュ……！ なんとか間に合ったか……これならいける。  
ギルフォードが僕達が想像しているような性格なら、作戦は必ず成功する！

「……全員、いつでも出撃できるようにスタンバイを」

『え？ でも……』

『私達も手が出せない。どうするつもりだ、たった一人で』

大多数のブリタニア軍に対してゼロの無頼一機。パイロットの腕を見て勝機はない。

……そう、純粋な勝負ならば。

『ギルフォードよ。貴公が処刑しようとしているのはテロリストではない。我が合衆国軍、黒の騎士団の兵士だ』

『国際法に乗っ取り、捕虜として認めよと？』

周囲が騒ぐ中、ゼロはギルフォードに向けて進んでいく。  
そのゼロを囲むように、サザーランドが並ぶ。

『お久しぶりです、ギルフォード卿。出てきて昔話でもいかがですか？』

『せっかくのお誘いだが遠慮しておこう。過去の因縁にはナイトメアでお答えしたいが』

「外に出てこないんじゃギアスが使えない」

『ふっ、君らしいな。ではルールを決めよう』

『ルール？』

ギルフォードが出てくるようならばギアスを使うはずだった。逆にギルフォードが誘いに乗らなかった場合、すでに別の手段を用意していた。むしろこちらが本命だったわけだけど……

『決闘のルールだよ。決着は一对一で付けるべきだ』

『いいだろう。ほかの者には手を出させない』

ギルフォードもコーネリアの騎士として自信があるのだろう。やはりこれには乗ってきた！！

確かにナイトメアの対決ではルルーシュはギルフォードの足元にも及ばない。これは誰が考えてもわかることだ。

ギルフォードとて『帝国の先槍』と呼ばれ、コーネリアの選任騎士を任されている強者だ。彼とゼロの実力くらい、誰でもわかる……だからこそ、ギルフォードはこの時点で気づくべきだったんだ。

『武器は一つだけ』

『よかるう……私はこれだ!』

ギルフォードはランス以外の装備を全て外す。そして、ランスの切っ先をルルーシュに向けた。

決戦にふさわしく、彼が得意なランスを選択か……やはり、何もわかっていない。

『では私はその盾を貸してもらおう』

ルルーシュはナイトポリスを指差して言う。

『ちょっと、ゼロは何を考えてるの!? 暴徒鎮圧用のシールドじやあ……』

「大丈夫だよカレン。全部予定通りだ……」

『え!?!』

よく考えてみればわかる。あそこにいるのは『戦士』ではなく、『策士』なんだから……

『質問しよう、ギルフォード卿。正義で倒せない悪がいるとき、君ならどうする？』

悪に手を染めてでも悪を倒すか。それとも、己が正義を貫き、悪に屈するをよしとするか』

どちらにせよ悪は残る……悪意は消えることなく存在し続ける……  
もつとも、昔の僕だったら正義も悪もそんなもの関係無しに目の前の障害を壊していたけどね……

『我が正義は、姫様の元に！！』

まさに彼らしい答えだ。おそらくこれは疑いなき本音だろう。  
ギルフォードは手にした大型ランスを構え、一気に無頼に向かって突進してきた。しかし、ゼロは避けるような素振りは一切見せない。

『なるほど。私ならば、悪を成して巨悪討つ！！』

ゼロの言葉と同時に……地面が揺れた。

『なにっ！？　これはまさか……ブラックリベリオンの！？』

そう、租界の地形を逆手にとった、ブラックリベリオンと同じ作戦。地震対策用のプレートを一斉にパージした。

一対一の勝負にこだわってしまった時点で、ギルフォードの負けは決まっていた――！

そして、処刑台が倒れる先は……僕達がいる中華連邦総領事館――！

『ライ――！　突入指揮を執れ――！』

「了解――！　自在戦闘装甲騎部隊はついて来い――！　団員の救出が最優先だ――！」

ギルフォードの不意を突き、ゼロも盾をボード代わりに総領事館へと逃亡する。

『黒の騎士団よ――！　敵は我が領内に落ちた！　ブリタニア軍を壊



滅し、同胞を救い出せ!!」

「急げ!! ブリタニア軍が態勢を立て直す前に、全員を救い出せ!!」

思っていた以上にブリタニア軍の持ち直しが速い!! おまけに、処刑台で持ちこたえたナイトメアからの狙撃もある! このままでは……!!

「カレン、ト部さん! 上の敵は僕が片付けます!! その間に皆を!!」

輻射波動を展開し、銃撃を防ぐ。

「邪魔を……するな!!」

輻射波動を展開しつつ、ハンドガンでサザーランドを打ち抜く。数が少なくなってきたらスラッシュハーケンを壁に打ち込み反動で一気に上昇。処刑台の敵を制動刀で両断する。

「ト部さん、こちらは片付けました! 今そちらに……」隙だらけだ!!」……!! ツ!!」

グロースター！！　　ということは、グラストンナイツの一人か！！

「邪魔をするな！！　　ここはもう日本の領土となったんだ！！」

『日本など存在しない！！』

「そうか……あくまで日本を認めないつもりか！！」

『騎士団の双壁の片翼！！このバート・L・ダールトンがここで討ち取ってくれる！！』

「悪いがまだ……死ぬつもりは無い！！！！」

牽制としてライフルを放ってくる。敵の射撃をくぐり避けながら、すれ違いに制動刀を振り抜くがランスで受け止められてしまう。

「これで終わりだ！　　さらばだ！　　騎士団のエース！！」

その瞬間背中のポッドから弾を撃ってきた。しかし制動刀を右手だけで持ち、輻射波動を前方に射出する。

「防いだ！？ この距離で！？」

そしてひるんでいる間に、グロースターの頭部を左手で  
輻射  
波動で掴む。

チエックメイトだ。

「これが輻射波動だ。懐に入った時点で僕の勝ちは決まっていた。  
……一つ教えておく。終わりというものは、決めてからというもの  
だ！！」

同時に輻射波動が射出。グロースターが膨張し、内部から破壊さ  
れたグロースターは爆散した。

「よし、今度こそ……なっ！？」

『嘘ッ！？ なんて！？』

ゼロがヴィンセントを庇った！？ ……まさか、あれは口口が乗  
っている機体か！？

ということとは……ルルーシュが言っていた、ロロをこちら側に引き込む最後の一手を打ったのか。  
おそらく今、ルルーシュがロロに甘い言葉を投げかけているんだろうが……

「……カレン、多分もう大丈夫だ。彼はもう敵じゃない……」

『え？ でも……！？ 本当だ……』

ギルフォードの放ったランスからゼロを守ったところを見ても間違いない。これで勝負は決した。

「そこまでだ、ブリタニアの諸君！これ以上は武力介入とみなす。引き上げたまえ！」

星刻……ここで出てきたか。だがこれでギルフォードは引き上げざるをえないだろう。

これで、本当に終わりだ……

- - - -  
- - - -  
- - - -  
- - - -

「よかった!! 扇さんっ…!!」

「ありがとう、カレン!」

感極まったのだろう、扇さんを見つけるなりカレンは扇さんの胸に飛び込む。

……羨ましい。妬ましい。今まで僕だってあんなこと無かったというのに……僕が捕まっていたらあんなふうにしてくれたんだろうか? そう考えると捕まってもよかったかなと思ってしまう。

「中佐、お久しぶりです」

「藤堂さんたちも無事で何よりです」

「ト部、ライ君。すまなかったな、迷惑をかけた」

「苦労したんでしょう?」

「なあ、それよりあのナイトメアは?」

やはりあれは気になるか。

……まあ、敵がいきなりゼロの無頼を助けたとなれば疑問に思うだろうが……なんて説明しよう？

「ゼロを助けたんだ、少なくとも敵ではないだろう？」

「C・C……」

「……ええ。あの機体はブリタニアのものなのですが、パイロットをゼロが説得し協力してくれたんです」

「……またゼロかい？」

……まずいな。思っていた以上に捕まっていた幹部の人たちのゼロに対する不満が大きすぎる。

ブラック・リベリオンでの敗戦をゼロの裏切りのせいと感じているんだろうが……この空気はあまりよろしくない。

「朝比奈さん。ゼロも彼の考えの元、戦っています。」

夜、一段落着いたら彼から話があるそうなので……それまでは待つてもらえないでしょうか？」

「まあ、そうだね。僕たちもまだ解放されて間もないから、少しのんびりしたいし……」

「ゼロには僕のほうから言っておきます。」

あと……カレン、ト部さん。ゼロから話があるそうなので10分後、司令室に来てください」

「分かった」「承知！」

あとのことはルルーシュたちと相談しなとな。軍の監視もそうだが、今後のブリタニアの対策。みんなの説得とその後の部隊の再編成。まだまだやることが多すぎる……

## TURN 6

### 逆襲の処刑台（後書き）

作「アニメのバートがあまりにも哀れだったので、ライと戦っても  
らいました」

ル「あれか…… G1ベースに押しつぶされ、戦うことなく死んだと  
いう……」

ラ「残念だな。義兄弟の中で一番最初に死んだ上に、そんな死に方  
とは……」

作「救出には成功したものの、不穏な空気が漂う騎士団」

カ「朝比奈さんと千葉さんか……」

ル「二人はプライドが高い上、まだ若い（俺達よりは年上だが……）  
。おまけに前から素性を明かさないゼロに不満を持っていたからな」

ラ「そしてB・Rの敗戦でそれがいつそう強くなった」

C「内も外も問題だらけだな……」

作「今回はその後のお話です。感想いつでもおまちしています!!」





## 次回予告

仲間を救い出すことに成功した僕達。

だけど、一年間という日々は思いのほか長かった。

朝比奈さんや千葉さんを中心に、ゼロへの反感が高まっている。

それでも、ここで内部分裂するわけにはいかない。

騎士団のリーダーはゼロなんだから……

N E X Y   S T A G E   「騎士団復活」

## TURN 7

### 騎士団復活

- - - 司令室 - - -

現在、司令室にはルルーシュ、C・C、カレン、ト部さん、僕の五人が集まっていた。

「ゼロを助けたナイトメアは？」

「星刻のルートで外に出した」

「星刻？」

ああ。そういえば、ルルーシュはまだ面識がなかったな……あの中華連邦の麒麟児と……

「中華連邦の武官のことだ。だけど高亥の暗殺を実行したり、こちらに取引を持ち込んだりと知略・実行力にも長けた人物だ。彼は中華連邦のなかで一番の要注意人物だと思う」

「……そうかその男の対応は後で考えるとして、俺も帰りにはそのルートを使わせてもらおうでしょう」

「で？ そのパイロットはバベルタワーの？ もう信じられるの？」

バベルタワーで戦ったこともあるし、やはり簡単に信じることはできないか……なにしろ、彼女は正体もわからないわけだしな。

「ふつ、問題ない。名前などは伏せるが、我々の賛同者と考えていい」

「ゼロの正体……知っているのは私達だけとなったが……」

「そのことなんですが、ト部さん。このことは他の方々には……」

「分かっている。朝比奈や千葉がこのことを知ったら黙っていないだろうからな。」

「……ゼロ。バベルタワーであんたが言ったことを俺は信じようと思う。これから先、よろしく頼む」

「ああ、頼りにしている」

「……じゃ俺は先に中佐達に挨拶してくる。あとは若いお前らに任せる」

そういうとト部さんは一足先に部屋から退出していく。

あの様子なら大丈夫だろう。藤堂さんにまで黙っているのはつらいだろうが……それでも、秘密にしなければならない。

「ルルーシュ、まさかト部さんにギアスをかけたりはしないだろうな？」

「いや、命がけで俺達を守ろうとした男だ。元日本軍人ということもある。あの男が妙な動きをしない限り使う気は無い」

「そうか……それと、彼にはギアスを使ったのか？」

「それも当分は必要なくなった。それよりC・C、皇帝に……」

「ちょっと待つて！！ 私にもパイロットのことは秘密なの？」

「……やはりそこに食らいつくか。カレンの性格上わかっていただけ。」

ロロはアッシュフォード学園で未だに監視役として動いているし、学園と接点を持つ君には知ってほしくなかったんだけど……

カレンは学園のみんながギアスで記憶を書き換えられたことを知らない。だからこそ、ロロのことも僕とルルーシュで内密に話し合

つていたんだが……カレンは意外と感情に左右されやすそうだし……

「いいだろう？ 秘め事くらい持ちたい時がある」

「それはゼロとして？ ルルーシュとして？」

「……カレン、もうそこらへんに……」

「君との関係も、オープンにはしていないだろう？」

………は？

……今この男はなんて言った？

人がせつかくこの場を収めようとしているのに。

「ちょっと、へんな言い方やめてよ!!」

……カレン、なぜそこで顔を赤くする？  
一体なにがあっただ？ 恥ずかしいことなのか？

「……二人とも『関係』というのはなんだ？」

「なんだライ、嫉妬か？」

「……C・C、君は何か知ってるのか？」

「まあな……ライ、お前とカレンはどこまで進んだ？ 裸を見せ合うくらいには進んでいるか？」

「そんなわけあるか！！ この一年間、逃亡生活でそれどころではなかっただろう！！」

\*\*\*\*\*二人はまだキスさえしていません\*\*\*\*\*

「だろう？　だがルルーシュと枢木スザクはお前以上に進んでいるぞ？」

こいつらは、カレンの裸とて見たことがあるからな……」

「……何の冗談だ？　そんなつまらない冗談は、な、なんで知ってるのよ！？　……はああ！？」

カレン、君が言うということは……まさか本当なのか！？  
いつの間に！？　なぜ！？　僕は見たこともないというのに、なぜルルーシュとスザクに！？

「ねえカレンどういうこと？　二人には見せたってどういうこと？　僕に言えないことなのか？　少なくとも僕は見たことないけど？」

「え？　いや……見せたんじゃないくて……ルルーシュにはその、勝手に覗かれただけというか……スザクには裸で押し倒されたというか……」

「……さてルルーシュ、逝こうか？」

やっぱりか。やっぱりこいつらが無理やりカレンに酷い目にあわせたのか。

安心してカレン。元凶の片方は今ここで潰してあげるから。



「までライ！！ お前は間違っているぞ！！ 別に俺とて見たくて見たわけではないし……何より作戦だったんだ！！ そうでなければカレンの裸なんて見ない！！」

「……貴様、カレンの裸を見て言い逃れするつもりか？ しかも『裸なんて』とは……カレンを侮辱しているのか？」

男の癖に見苦しい。いつからルルーシュはこんなに女々しくなったんだ？

討たれる覚悟くらい、すでにできているんだろう？

「お、落ち着けライ！ 話せば分かる！！」

「そういえば貴様、バベルタワーでもカレンのことをいやらしい目で見てたそうだな。あの後いろいろ忙しくて忘れていたよ……」

いやいや、思い返せば返すほど罪が増えてくな。ひょっとしたら今回みたいに僕が知らないところで色々やっていたのかもしれない。そこらへんも含め、色々話し合おうじゃないか。

「…… C・C お前も説得しろ！！ 元はといえばお前が原因だ

ろっが!!」

「ふむ、そうだな……ライ、落ち着け。  
こいつはカレンを見てたのではない、カレンの胸を見てただけ  
だ。本人のことなど眼中に無い」

「C・C……!!!!」

「この下郎が……! もっと早くに始末しておくべきだったな……」

「あ、あのライ。そろそろ私達も戻ったほうがいいんじゃない?  
みんな心配してるし……」

「すまないカレン。私はこの下種を捨ててからいく」

「で、でもト部さんがうつかり口を滑らせちゃうかもしれないし、  
みんなに説明もしなきゃいけないし……とにかく!! もうルルー  
シュなんてほっといていくわよ!!」

「え!? いや、まだ……」

「まだ話が途中だというのに……!! 罪を裁いていないのに……  
!!」

カレンは僕の手を無理やり引っ張って、僕を連れて部屋から出て  
行った。命拾いしたな、ルルーシュ!

[illegible]

「カレンに助けられたな、坊や」

「この魔女が……！！」

「そう言うな。ごまかさなければカレンはとことん追求してきたぞ……ギアスのことは後で話そう、それより今は……」

「ああ、わかってる」

ルルーシュは再びゼロの仮面をかぶった。向かうのは……同胞達の下。

[illegible]

-  
-  
卜部  
side  
-  
-

「おお！ 懐かしの団員服！！」

「よくこんなの用意してたよな！」

「紅月隊長とト部さん、なにより『皇』戦闘隊長が準備してくれて……」

「へえー」

団員各々が再会を喜び合っていた。俺も中佐と二人で一年ぶりの会話をしていた。

こうしていられるのも、ライのおかげか……本当に、あいつには感謝してもしきれない。

「一年間すまなかった。どうだったト部、この一年ライ君や紅月君と行動を共にして……」

「はい、中佐。ライも紅月もすでに一人前の戦士となっています。特にライには何度も助けられました。

バベルタワーでも彼のおかげで死に場所を間違えずにすみしました。彼がいなければ、俺たちはどうなっていたか……」

「そうか。たしかライ君は『皇』を名乗り、今まで……ゼロ復活まで騎士団を引っ張って来たのだな」

「はい、その覚悟は賞賛に値します」

『皇』の名を受け継ぐということは並大抵のことではない。ただでさえ神楽様が国外脱出し、日本にいらっしやらない今、ライこそが日本の象徴となるということなのだから。

しかもライは決してお飾りなどでもない。常に自ら部隊を率いて前線で戦ってきた。だからこそ、日本人はブラックリベリオン後も騎士団を見捨てなかった。あの未来ある若者についてきたのだ。

「……神楽様を除いた、桐原翁たち『キョウト』が処刑された今、キョウト6家の生き残りはスザク君、そして彼ら二人となってしまうた。

日本はこれ以上優秀な人材を失うわけにはいかない。それは私達にも、お前にも言えることだ。間違っても死に急ぐなよ。四聖剣は一人も欠けてはいけない……！」

「……承知！」

分かっています中佐。本当は俺はバベルタワーで死ぬはずだった

……  
ライに救われたこの命、日本を取り戻すまでは、ライに恩を返すまでは死に切れません！！

- - ト部 side end - -

「ライ、今まですまなかったな」

「俺は信じてたぜ戦友！ お前達やゼロなら必ず奇跡を起こしてくれるってな！！ やっぱお前ら最高だーーーーっ！！」

「皆さん、救出が遅れてすみません」

「何言ってるんだよ、お前達がいなかったら俺達はどうなっていたか……」

よかった。扇さんも、玉城も、杉山さんたちもみんな思っていたより元気そうだ。

これなら、元の騎士団の活動に戻る日もそう遠くはない……

「ゼロだ！」

！！……来たかルル・シュ……さて、どうやって皆をまとめる？  
ここが、君のカリスマの見せ所だぞ。

「待て待て！」

歓声上がるなか、千葉さんと朝比奈さんがそれを止める。

「助けてもらった事には感謝する……だが、お前の裏切りが無ければ私達は捕まっていない！」

「一言あつてもいいんじゃない？」

……やっぱりな。解放戦線から加わり、ゼロとの接点が薄く、普段からゼロに疑いの目を持っていた二人ならそうだとは思っていたけれど……

おそらく、朝比奈さんや千葉さんだけじゃないだろうな、ゼロを信用していないのは。

「ゼロ、何があつたんだ？」

『全てはブリタニアに勝つ為だ！』

「ああ、それで？」

『それだけだ』

ゼロの言葉に周りがどよめく。

それも当然だ。理由もいわずに、たったそれだけの言葉でリーダーが戦線を離脱したなど、納得出来るはずもない…… もっとも、話せる理由ではないんだが……

さて……どうするか。ここで僕がゼロに賛同すればこの場は収まるだろう。

だが、僕がゼロよりの考えだと思われるのは困る。戦闘隊長という立場にいる以上、あくまで公平な立場でなければならない。

だいたい僕が目立ちすぎるのはまずい。以前ディートハルトが言っていたが、僕はある意味ではゼロのカリスマの邪魔をしてしまう。『皇』の名を受け継いだ今となってはなおさらだ。僕は部下であり、リーダーではないのだから……

また、僕とゼロとの関係まで疑われてはまずい。総司令と戦闘隊



長が私情を挟んでいるとなれば、彼の正体が暴かれかねない。

この場はできれば、僕抜きで切り抜けて欲しいんだが……

「他にないの！？ 言い訳とか、謝罪とか！！」

「やめろ！！」

藤堂さん……！！ 朝比奈さんが詰め寄ろうとするのを藤堂さんが一喝、ゼロに歩み寄る。

この中では一番冷静で、大局を見ることができ、部下からも信用されている人だ。藤堂さんさえ納得してくれば、この場は収まる。

「ゼロ、勝つための手を打とうとしたんだな？」

『私は常に結果を目指す』

「……わかった。作戦内容は伏せねばならない時もある。今は彼の力が必要だ！ 私は彼以上の才覚を他に知らない！！」

「俺もそうだ。みんなゼロを信じよう！」

……これでいい。藤堂さんだけでなく、副指令でありかつてのリーダーだった扇さんまでゼロを支持したのなら、団員も納得するはずだ。

「でも、ゼロはお前を駒扱いして……」

「彼以外の誰にこんなことができる？　ブリタニアと戦争するなんて中華連邦だつて無理だ！！　E・U・もシュナイゼル皇子の前に負け続けているらしいじゃないか！！」

俺達は全ての植民エリアにとつて希望なんだ！！　独立戦争に勝つためにも、俺達のリーダーはゼロしかない！！」

「そうであ！！　ゼロ！　ゼロ！　ゼロ！　ゼロ！　ゼロ！　ゼロ！　ゼロ！！　ゼロ！！」

扇さんの言葉に便乗するように玉城がゼロコールを行う。

そしていつしか、団員達もゼロコールを行うようになっていった

……

そうだ、騎士団のリーダーはゼロなんだ。これでやっと騎士団はまた元の姿に戻ることができる！！



## TURN 7

### 騎士団復活（後書き）

作「本来ならこの話は他の話と一緒にするんですが、思いのほか長くなったので分けて書きました」

ル「……最初の会話を抜けばよかったんじゃないのか!？」

作「いや、あれは抜いちゃダメでしょ? ……ねえ、ライ」

ラ「さて、ルルーシュ。一緒に話し合おうじゃないか」

ル「ライ!? いつの間に……右手に掴んでいるのは誰だ?」

ラ「救いようの無いカスだが?」

ス「……………」

返事が無い。ただのウザクのようだ……

作「スザク……!？」

C「R2初登場が死体とは……本当にいいところないな」

カ「いや、これ本編じゃないから」

ル「お、落ち着けライ」

ラ「大丈夫だよ。僕は話し合いに来ただけだ」

作「……話し合うと言って殺人的砲弾魔法をぶちかますの私見たことありますよ」

カ「なんでここでそれを言うの!?!」

ラ「じゃあカレン。また後で」

ル「ナナリーーーーー!!」

作「……多分次回には二人とも復活しているでしょうから安心してください。それじゃ今回も次回予告ライ君お願いします」

## 次回予告

騎士団は再びかつての姿を取り戻した。

だけど、そんな中に白き死神が再び日本にやってきた。他のラウンズと共に……

かつての親友であり、幼馴染であつたルルーシュとスザク。

お互いが騙しあい、偽りの顔で笑いあう。

そしてさらに、事態は僕達の思わぬ方向へと進んでゆく

NEXT TURN 「学園、再び」

**TURN 8 学園、再び（前書き）**

一週間に投稿……本当にすみません

TURN 8 学園、再び

- - - 中華連邦総領事館 - - -

「ああ、それで……了解。藤堂さん達にも伝えておく……ああ、それじゃあまた後で」

ふう。また厄介なことになってきたな、ルルーシュ。

最も、僕達が平和に暮らせるなんて考えてはいなかったけれど、こんなに早く彼が来るとはね。

「ライ、ルルーシュからは何て？」

「……スザクが学園に復学したそうだ。これでルルーシュの監視はなおさら厳しくなった」

「スザクが！？」

「といっても彼はナイトオブブラウズの一人。軍人の仕事を優先するだろう。」



まずは機情を制圧し、ルルーシュが動きやすくしないと……なにかきっかけがあればいいんだが……」

「でも、機情にはルルーシュのギアスが利かない相手がいるんじゃない？」

そこがやはり問題か……そう。名前は知らないが、一年前にすでにギアスを使ってしまった軍人が一人、機情にいるらしい。

ギアスは一人につき一回しか使えない。つまりその相手にはもうルルーシュはギアスを使えないということ。僕がギアスを使うにも、学園に行くのは厳しすぎる。どうすれば……

「……歓迎会に乗り込むか？　だけど……」

「？　ライ、歓迎会って……？」

「ああ、さっきルルーシュが言ってたんだけど、数日後『ナイトオブゼブン歓迎会』を行うそうだ。

ミレイさん主催だし、一般開放もするから、変装すればひっそしたら……とも思っただけ……」

「……危険すぎない？　私達、手配書も回ってるのよ？」

「だよね……おまけに、『巨大ピザ』にまた挑戦するらしく、マスコミもくらしいからなあ……」

「ライ……言つとくけど、C・Cにはそれ言っちゃだめよ。あのピザ女、間違いなく出て行くから……」

「分かってる。君も気をつけて」

しばらくの間、ルルーシュには学生を、スザクの親友を演じてもらうしかないか……時間がながい、ここで彼が捕まるわけにはいかない。

[illegible]

――ナイトオブセブン歓迎会、当日――

「おはようカレン。どうかした？」

なぜか朝からカレンが走り回っている。ルルーシュから連絡でもあったかな？

僕の方には何もなかったんだが……

「ラ、ライ！！ 大変なの！！ 朝起きたらＣ・Ｃがいなくて……  
代わりにこんな置き手紙が……！！」

どれどれ……

『チーズくんを学園まで取りに行ってくる。用件が済んだらすぐ帰るから安心しろ。』

それとライ、また巨大ピザをやるらしいな、情報感謝するぞ。

Ｃ・Ｃ  
『

「……………安心できるか……………！！」

まさか、あの会話を聞かれていたのか！？

まずい！！ 今学園には機情の者だけではなくスザクもいる。  
イレギュラーに弱いルルシュだけでは対応できない！！

「カレン！！ 急ぎ学園に行くぞ！！ Ｃ・Ｃを連れ戻す！！」



『ねえねえ、あのヒト服は地味だけどカッコよくない?』

『違うつて。地味な服装な分、あのヒトのカッコ良さが際立つてるの！』

『どうする？　ちよつと声かけてみよつか？』

「ヤダ、逆ナン!?」

……まずい。このままだとCを探すところではない！！

どこか人目の無いところに行き、カレンと連絡を取るか。幸いにも仮装している者も多く、見た目的にも学生だと思われるし何の問題も無い。

となると……クラブハウスあたりが妥当か。あそこなら、今の時間には誰もいないはずだ。

1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9
10	10	10	10
11	11	11	11
12	12	12	12
13	13	13	13
14	14	14	14
15	15	15	15
16	16	16	16
17	17	17	17
18	18	18	18
19	19	19	19
20	20	20	20
21	21	21	21
22	22	22	22
23	23	23	23
24	24	24	24
25	25	25	25
26	26	26	26
27	27	27	27
28	28	28	28
29	29	29	29
30	30	30	30
31	31	31	31
32	32	32	32
33	33	33	33
34	34	34	34
35	35	35	35
36	36	36	36
37	37	37	37
38	38	38	38
39	39	39	39
40	40	40	40
41	41	41	41
42	42	42	42
43	43	43	43
44	44	44	44
45	45	45	45
46	46	46	46
47	47	47	47
48	48	48	48
49	49	49	49
50	50	50	50
51	51	51	51
52	52	52	52
53	53	53	53
54	54	54	54
55	55	55	55
56	56	56	56
57	57	57	57
58	58	58	58
59	59	59	59
60	60	60	60
61	61	61	61
62	62	62	62
63	63	63	63
64	64	64	64
65	65	65	65
66	66	66	66
67	67	67	67
68	68	68	68
69	69	69	69
70	70	70	70
71	71	71	71
72	72	72	72
73	73	73	73
74	74	74	74
75	75	75	75
76	76	76	76
77	77	77	77
78	78	78	78
79	79	79	79
80	80	80	80
81	81	81	81
82	82	82	82
83	83	83	83
84	84	84	84
85	85	85	85
86	86	86	86
87	87	87	87
88	88	88	88
89	89	89	89
90	90	90	90
91	91	91	91
92	92	92	92
93	93	93	93
94	94	94	94
95	95	95	95
96	96	96	96
97	97	97	97
98	98	98	98
99	99	99	99
100	100	100	100

- - -クラブハウス- - -

「ライ！？ お前がなぜここに！？」

「え！？ …… ルルーシュ！！ C・Cも！！」

なんとという偶然か。二人もクラブハウスにいた。

……しかしルルーシュ相手といえ、一発ではれてしまうとは……  
そんなに目立つか？ それとも変装として成り立ってないのだろうか？  
結構自信があっただけだな。カレンみたいに着ぐるみを着てくるべきだったのだろうか？

「そのピザ女を連れ戻しに来た……止められなくてごめん」

「まったくだ。まあいい……ライも来た事だ。改めて聞かせてもらおう。」

皇帝にギアスを与え、スザクにギアスを教えたのは同じ人間なのか？

「……」

「……そうだ。しかしこれ以上知ると……」

「もう巻き込まれている」

「……C・C、僕達はギアスを手に入れた時からすでに、知る権利があるはずだ。教えてくれ。これは僕達の意味だ」

「……V・V」

「V・V？ ……スザクにもギアスを与えたのか？」

「いや、それは無いようだ」

つまり、スザクはあくまで『ギアス』を知っただけ。契約もしないければ、新たな力を得たわけでもない、ということか。厄介なことには変わらないけど。

だが、問題は スザクがどこまでギアスのことを知っているか、ということか。

「ならばもう一つ聞きたい。ライにギアスを与えたのもソイツなのか？」

違うというのなら、ライにギアスを与えた奴は今も生きているのか？」

「いや、V・Vではない。ライが眠りについてからだ、V・Vが力を手に入れたのは……名前は知らない。ソイツが何をしているのかも……」

「……僕も分からない。実をいうと、まだ完全に記憶が戻っていないんだ。契約者の名前、そして契約内容を……たしかに僕は知っているはずなのに……!!」

「……さすがにそればかりは仕方が無い。ギアスの力がそれだけ強かったということだろう」

「ああ……ところでルルーシュ。お前の側に……」

『ルルーシー!!』

!! この声……シャーリーか!? まずい!! 今僕が彼女に見られたら……

「なんだい? シャーリー?」

「ほ? ……ごぼっ!!」

「え? ……がぼっ!!」

なっっっ!! ル、ルルーシュユウウウ!!

いくらなんでも……トマトが詰まったコンテナに落とすか普通!

? C・C ごとなんて……



ウ……トマトが鼻に……口にもかなり……

ウイイイイイン

あ、あの男しかもシャッターを閉めたな。これじゃ本当に抜け出せないじゃないか……！！！！

ドスン、ドスンドスン！！

C・C……！！！！ 気持ちは分かるけどコンテナけられないで！！ バレてしまう！！

……あれ？ なんか今宙に浮いた感覚が…… ってまさか運ばれているのか！？ まずい！！ これ、巨大ピザの材料か！！

『シェイクタイム！！！！』

パイロットの声が聞こえたけど……誰だこれは！？聞いたことがないがスザクじゃないのか！？　というか回すなーーーー！！！！

「うわっ、ちよっ……おへえ！？」

Ｃ・Ｃ・さん、なにかやわらかい物が当たってるんですけど！？  
……あ、帽子とサングラスどっか行っただろう、変装が意味を成さない！

……回転はとまったけど、あちこち痛い。

って、いきなり止まった！？　まさか、もうステージに！？　ま  
ずい！！　コンテナが開いた！！

「（Ｃ・Ｃ……！掴まって！！）」

……まずい、非常にまずい！！　片手でコンテナを掴み、片手で  
Ｃ・Ｃ・を掴み取る状態だ。

おまけに……トマトでコンテナが滑る……！！

あっ……滑った……！？

「なんだ！？」

ステージに落ちたと思ったら……周りから煙が出てきた。ルル―  
シュか！？

「（C・C！！今のうちに逃げるぞ！！）」

煙が晴れないうちに、僕はC・Cを連れてその場から離脱した。

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16
17	18	19	20
21	22	23	24
25	26	27	28
29	30	31	32
33	34	35	36
37	38	39	40
41	42	43	44
45	46	47	48
49	50	51	52
53	54	55	56
57	58	59	60
61	62	63	64
65	66	67	68
69	70	71	72
73	74	75	76
77	78	79	80
81	82	83	84
85	86	87	88
89	90	91	92
93	94	95	96
97	98	99	100

-  
-  
-  
屋上  
-  
-  
-

……酷い目にあつた。ひとまずシャワーは浴びたが……服が……  
今はルルーシュ、カレンと落ち合つて屋上に来ている。

「それで？ カレンを見たやつは水泳部か？」

なんでも先ほどの騒ぎの際に、カレンが女性とぶつかり着ぐるみの顔がとれ、素顔を見られたらしい。水着を着ていたらしいから水泳部だろうが……一体誰だ？

「先生じゃないかな？」

「ヴィレッタか！？」

ヴィレッタ？ ……ひょっとしてルルーシュがこの前言っていた、機情の人物か？

「名前までは……だけど変なの。前の文化祭で扇さんと一緒にいた人のような……」

「扇さんと？ ……まさかあの、肌が黒い女性のことか？」

「ヴィレッタが扇と？」

「南さんが言ってた扇さん直属の地下協力員かも……」

「扇が……俺に秘密を？」

「お前はこういうことには鈍感だな……それは……」

カレン、多分それは違う。C・Cも僕と同じことを思ったのか  
ルルーシュに何かを耳打ちする。

するとルルーシュは何事かをひらめいたのか、笑みを浮かべる。

「フツ、なるほどな。まさかこんなところで機会が訪れるとな。

……ライ。カレンとC・Cを連れ総領事館に戻ってくれ。もはや  
機情は俺の掌中だ」

「後は任せていいんだな？」

「ああ、ヴィレッタさえいなければ、残りのやつらにはギアスを使  
うだけ。簡単な話だ」

「了解。行くよカレン、C・C」

「うん」

「ちょっと待て。まだチーズくんを回収していない」

……チーズくんを回収し、僕は黎刻に連絡を取った。

[illegible]

-  
-  
-  
車内  
-  
-  
-

「すみません黎刻さん。このような形で借りを作ってしまうとは……」

「外交特権を使ったただだよ。それに、こちらこそ早く君達に借りを返しておきたいからな。」

……何があったかは……聞かないほうがいいか？」

「ええ……個人的に聞いてほしくないです」

僕らの持ち物や格好を見て不自然に思ったのだろう。その気配りはありがたい。

だがこれで、ルルーシュは自由に動くことができる。作戦の決行も可能になった。スザクがいるが、僕達の動きが活発になればなるほど、監視が不可能になっていく。

つまり、ここから本当の戦いの始まりだ……！！

## TURN 8 学園、再び（後書き）

作「実はまだ完全には記憶が戻っていないライ」

ル「ちょうど契約者に関する部分があいまいだったな」

C「仕方があるまい。ライは遺跡で、ある程度の記憶こそ取り戻したが、完全にギアスがとけたわけではない」

作「そして次回から戦闘開始……」

ラ「スザク達、ラウンズとの全面戦争か……」

作「君を誰と戦わせるかけっこう迷ってるんですね。ま、なるようになれてことで……次回予告どうぞ」

## 次回予告

ついに明かされたナナリーの現状。

しかし、現実にはあまりにも残酷な答えをルルーシュに突きつける。

戦力差が激しい中、ナナリー奪還のために再び戦場に赴く騎士団。

全ては一人の少女のために……

N E X Y   T U R N   「新たな力」



## TURN 9 新たな力

「……ナナリーが、エリア11の……新総督!？」

『……事実だ。スザクが俺の記憶が戻っているのかどうかを確かめるために、わざわざ電話をかけさせてくれたよ……』

スザクが!？ 二人の絆を利用して……!! そこまでするのか、今の彼は!!

「で？ 新しい総督がナナリー……戦えるのか？ 妹と……」

『戦う？ ナナリーと？ それは何の冗談だ?』

「ならどうするつもりだ？ まさか放っておくわけでもないんだろ  
う」

『当たり前だ！ このままでは昔のように、ナナリーがまた政治の道具に……!』

「歩けず、目も不自由な少女。駒として使い捨てるつもりかな……?」

『そうさせないために俺は行動を起こした！　そのための黒の騎士団だ！　ナナリーのためのゼロなんだ！』

C・Cの言葉にルルーシュは激怒する。

……そうだ。それこそがルルーシュの戦う理由であり、生きる目的。  
そうならないようにするために、ここまでずっと生きてきたんだから……

「それがお前の生きる理由であることは知っている。しかし……」

『俺はナナリーが幸せに過ごせる世界を創る！　そのためにもブリタニアを破壊する！！』

C・Cの声を遮り、ルルーシュは感情を吐露した。  
彼自身を象徴する黒のキングを、チェス盤に叩きつけて……

『V・Vとかいうヤツは、ブリタニア本国にいるのか？』

「そこまではわからない。しかしV・Vはお前の父、ブリタニア

皇帝シャルルの最初の同志」

『同志？』

「……それは、彼らの契約のことを言っているのか？」

「それもある。ただし……あいつらの契約は、お前達が考えているようなものではない……」

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

天にそびえる神殿のような場所。今そこに、ブリタニア皇帝とV・がいた。

「神をお殺す」

「それが僕らの契約。

……ねえ、シャルル。どうしてナナリーに教えなかったの？ ゼ口の正体とギアスのこと。そして、狂王のことを……」

「その必要はないでしょう。狂王のこととも枢木には伝えました。復讐に走るあの男なら、問題はありません」



しかし、この作戦は長引いて敵の援軍が来たらアウトだ。こちらには空中戦力がない。空から狙い撃ちでもされたら全滅する……！ただでさえラウンズが日本にいるんだ。賛成できるわけがない。

『それくらいわかってる！！ 敵もギルフォードやスザクは健在、戦力は向こうの方が上！！ だが、この機会を逃せばナナリーはもう……！！』

「……わかった。僕は黒の騎士団戦闘隊長であり、君の部下だ。君の決定に従おう」

『……すまない。だがこれは命令ではなく、一人の友としてお前に頼む……頼む！ 今回だけでいい！！ 俺のわがままに付き合ってくれ！！』

「……ルルーシュ……」

あのプライドの高いルルーシュが……頭を下げた。僕に、一人の男として……

「……構わないさ。僕としてもナナリーのことは気にかかる」

『ありがとう、ライ。それでは、今度こそ作戦について話す。お前はC・Cと共に、ラクシャータ達と合流してくれ』



「ラクシャータ、残月や暁はまだインド軍区に？」

現在、僕とC・C・はラクシャータと合流し、潜水艦で静かに、しかし高速で日本へ向けて進んでいた。

「そうよ。最終調整が必要だからね。斑鳩の事もあるし、アンタの専用機くらいよ。今すぐ動かせるのは」

「そうか……蒼月の新装備の方は大丈夫なのか？」

「ええ、『竜牙<sup>りゅうが</sup>』ならチェック終了してるわ。『徹甲砲撃右腕部』も異常なし。後、例のアレも問題なし。といっても、まだ試作品だけどね。ま、あんたならなんとかなるでしょ。いつでもどうぞ」

「助かるよ」

「お義兄さま！ お久しぶりです！」

「！ 神楽耶、元気そうで何よりだ」

神楽耶が走りよってくるので受け止めた。こうして合つのも一年ぶり。『皇』継承の日も通信だったからな……

「はい！ 一年間お会いすることはできませんでしたがお義兄様やゼ口様の活躍、いっっぱいお耳にしましたわ！」

「ありがとう。世話をかけてしまったね」

「皇戦闘隊長！！ 東京より、通信が入りました！！」

「！ わかった、つなげてくれ。神楽耶、話はまた後で」

神楽耶と話を中断し、大型モニターに目を向ける。すでに幹部の一人が映っていた。

「作戦はどうだ？」

『当初の計画通り、敵戦艦にて戦闘が始まりました。今のところ敵の援軍はありません』

「わかった。こちらもすぐに作戦地に向かう……予定通り当艦はゼ口と黒の騎士団の援護に向かう！ 全速力で東京で向かえ！」

「了解！」

通信をきり、操舵士に告げた。





「まずい……敏捷性が違いすぎる……!!」

『紅月君、私が動きを止める！ その間に撃破してくれ!』

藤堂が一体のヴィンセントにスラッシュハーケンを打ち込み、その動きを止める

『今だ、紅月君!!』

「はいつ!!」

この機を逃すことなく、カレンはハーケンのワイヤーをつたってヴィンセントの懐に入り、輻射波動を打ち込む。

その効果によって、ヴィンセントは膨張し、機体は巨大な爆発音をたてて爆散した。

パイロットは脱出したようだが、この戦闘には復帰できないだろう。

撃破に成功した紅蓮は危な気なく戦艦に着地する。

「よしっ!! この調子で……!! はっ!!」



「ギルフォードに続き、敵ナイトメアの増援を確認！！ 数は二機！ ラウンスです！！ さらに空輸機が一機、アヴァロンに向かっています！」

「な！？ ラウンスが！？」

しかも、おそらく空輸機に乗っているのはスザク！！ つまり、ラウンス三人が同時に戦場に！？

「朝比奈機、LOST！」

「朝比奈さんが！？ 本人は無事か！？」

『大丈夫。脱出には成功したよ。だけどもめん、油断した……！』

朝比奈さんは無事か。だけど朝比奈さんまでやられたなら、戦力は……

「残っているのは誰だ！？」

「藤堂將軍、紅月隊長、仙波隊長、ト部隊長、千葉隊長の……五機

だけです。他は皆迎撃されました」

「五機!？」

まずい! このままでは全滅する!!

残ったのは数々の戦場を切り抜けてきた猛者達だが、機体性能の差がありすぎる!!

「ラクシャータ! 今すぐ蒼月の出撃準備を!! C・C、神楽耶。ここの指揮は任せる。離脱したみんなを救出してくれ」

「ライ……ゼロを、頼んだぞ」

「ああ、君に言われるまでもない。全員救い出ささ!!」

C・Cと別れ、僕は格納庫へ向かった。新しい相棒と共に、仲間  
の元へ向かうために!!

- - - - -

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

『ゼロとは？』

藤堂、仙波、卜部の三人はゼロと合流するため、館内を進んでい

「ECCMの影響が連絡が取れん。後方の千葉・紅月と合流し、艦内探索を拡大だ」

『しかしこの艦は墜落しかけています』

「そうです中佐。もはや時間が……！ 仙波大尉、危ねえ！！」

ト部！？ なっ！！

突然ト部が仙波の機体を前方へと押し出す。

……横からランスが飛び出してきた。トリスタンの武装の一つ。

ト部のとつさの判断のおかげで直撃こそ避けたが、二人とも機体が中破レベルに達した。

「仙波!! ト部!! ……くっ!!」

『藤堂、陸戦兵器での奇襲とはお前らしからぬ戦だな!』

藤堂の機体もギルフォードのランスの直撃を受け、廻転刃刀ごと右腕を持っていかれた……

『弱い者いじめは、好きじゃないんだけどな……』

『そうか、ならばここから先は僕が相手をしよう』

『!?!? 誰だ! なっ!?!?』

「その機体……まさか、ライ君か!?!」

新しいナイトメアは、ライが以前搭乗していた月下同様に機体全体が青く塗装され、背後には煌く飛翔滑走翼が装着されている。

腰部分に制動刀のような刀を所持し、胸のハッチが少し飛び出している。

左手は以前の輻射波動よりも鋭く、洗練されたイメージが見受けられる。

『はい、お待たせしました藤堂さん、皆さん。これが、僕の新機体  
そつげってんしゅうしき  
『蒼月天衝式』！』

黒の騎士団の戦闘隊長にして、騎士団の双壁が片翼、皇ライ！  
ただ今より戦闘に参加いたします！！』

『双壁だと！？ それにその機体……黒の騎士団も翼を得たのか！』

『……へえ、なかなか面白い相手が来たな』

『ギルフォード、ラウンス。よくも僕の仲間を傷つけてくれたな……  
…今度はこちらの、反撃開始だ！！』

仲間の危機を救うため、ライが今、戦場へと舞い戻った！！  
新たな愛機と共に……この戦況を変えるために！！



## TURN 9 新たな力（後書き）

作「遂に、ラウンズとの戦闘開始！」

ラ「皆、一応無事か……」

作「ト部がちょうど仙波さんを助け、そこにライが新たな機体で登場！」

ル「……蒼月か」

作「名称は『ブルームーン』編より。武器『竜牙』とはテイルズ・オブ・ナイツより武器のイメージに合うものを……」

ラ「それでいいのか……？」

作「こういうの考えるの苦手なんです。次回は完全に戦闘シーン一色となります。感想いつでもお待ちしております」

## 次回予告

新たな機体……『蒼月天衝式』！

これなら、たとえラウンズが相手であろうと対等に戦える。

仲間を守るのが僕の役目だ。もうこれ以上、誰も失わない！

終わらせよう、この戦いを……

NEXT TURN 「海上の死闘」

## TURN 10 海上の死闘（前書き）

前回、武装に対する問題点が多かったので書き直しました。

みなさん、本当に申し訳ありませんでした！

『すまない、ライ君』

「……藤堂さん。ト部さんと仙波さんを連れて撤退してください」

『！？ な、何を言って……』

「その機体ではまともに戦えないでしょう」

ライの言うとおり、ト部や仙波の月下はすでに機体ダメージが大きく、藤堂の月下もすでに右腕と廻転刃刀を失っている。

ただでさえ機体性能に差があるという中、今の状態ではとても勝ち目はない。それくらいは誰の目からみてもわかりきっていることだ。

しかしそれではライを一人戦場に残すということになる。

まだ若く、これからの日本を背負うことになっていくであろう戦士を……

『ギルフォードやラウンズを、一人で相手にすると言うのか！？』

「大丈夫です。そのための機体ですから……それとも、僕は信用するに値しませんか？」

「！……わかった。撤退するぞ仙波、卜部」

「中佐！？」

「しかし！」

「我々がいても彼の邪魔となるだけだ……退くぞ」

「……承知」

「ライ……死ぬなよ」

「後は僕に任せてください」

イジェクションシートを作動させ、三人は戦場から離脱していく。戦士としてのプライドもある。まだ若い者には負けられないという意地もある。

だが、ここでライの覚悟を否定するような無粋なまねはできなかった。

……もつとも、ブリタニア軍がそれを黙って見逃すわけではないのだが。

『我が隊は藤堂達を追います』

『ああ、こっちはこの機体を……「させないっ!!」！ なっ!』

ギルフォードとその部隊が藤堂達を追おうとするが、ライが蒼月の胸のハッチを開き、そしてそこから一発のプリズムが発射された。

『！ 散開せよ!』

ブリタニア軍はたちまちその範囲から離脱するべく、散開するが

……

「いいや、ここからが本番だよギルフォード」

ライはすぐさま、ハッチからプリズムを追うようにレーザー砲を  
発射した。

レーザーはプリズムにあたり、レーザーが拡散しギルフォードた  
ちに直撃する。

『！？ 拡散した！？』

「プリズム状に凝固させた特殊な液体金属。それに高威力のビーム  
を発射することで、広範囲にビームを乱反射させ長距離かつ広範囲  
の標的を一度に殲滅する兵器 『拡散構造相転移砲』だ」

（だが、これでもまだ試作品。ラクシャータが予想していた以上に  
まだ効果範囲が狭いし、威力も劣る。まだまだ改良が必要か……）

この反射角計算などの制御は限られたものにしかできない上に、  
プリズムも一発しか装填できない。

これからの戦いのためにも、まだまだ改良をくりかえさなければ  
ならない。すでにライはこの後の戦いのことも見据えていた。



それでもその威力は確かなもので、一機を残して他の機体は全て爆散していた。ギルフォードはかろうじて脱出したようだ。残る一機……帝国最強の騎士の一人、ジノ・ヴァインベルクである。

「さすがはラウンズといったところか。あの砲弾をかわすか」

『面白いな。あのギルフォード達を一掃するとは……さすがは騎士団の最強と言われるだけのことはある。ならば、私を楽しませてみる！』

ライはロングレンジで輻射波動砲弾を放つ。

しかし、ジノは難なくかわしスラッシュハーケンとバルカンを放つがライもこれをかわす。

二機は再び距離を離し、にらみ合った。

『へえ。ロングレンジで放つ輻射波動か。どうやらその機体、長距離戦もできるようだ。ラウンズ並の腕前とは……いいなお前。久しぶりに楽しくなってきた！』

「悪いが、楽しむ暇など与えるつもりはない！」

ジノは鶴嘴型MVSをもち、ライは『竜牙』をもって突っ込む。  
お互いの剣がぶつかりあう中、ライが『竜牙』の真の力を発揮させる。

「『竜牙』 輻射波動機構、鎧袖伝達！」

突如『竜牙』の刀身が赤く染まり、トリスタンのMVSを侵食していく。

『これは！？』

「この竜牙は輻射波動を纏うことができる最強の刃！ MVS程度のものなら！」

『！ まずっ！』

途端トリスタンは飛びのき牽制のスラッシュハーケンを放つ。  
蒼月もこれを回避し、距離をはなしたトリスタンを追っていった。

『ライか！？』

「千葉さん！？ どうしました」

突如、蒼月に千葉から通信がかかってきた。

明らかにただ事ではない様子で、急を要する事態だとわかる。

『私もやられた。それより紅月が脱出レバーを作動できないまま、海上に落ちていった！』

「な！？」

『もはや残されたのはお前しかない。追ってくれるか！？』

「わかりました！ これより……『お終い』！ ……くそっ！？」

前方からハドロン砲が放たれた。

ライは機体をそらすことでなんとかかわすことには成功したが……

「よりによって……ラウンズと三対一か」

『悪いな。本当は一騎打ちで決めたかったんだが』

『あなたは良く頑張った。だけどこれで、お終い』

『ライ、君をここで拘束する』

トリスタンが向かった先は味方との合流地点　つまり、スザクとアーニヤがいる場所だった。

ラウンズ三人が集結する場所。

「……（これではカレンを助けに行けない！　ラクシャータたちを信じるしかないのか！）」

ライはラウンズと向き合いながらも、潜水艦で待機している仲間達のことを考えていた。

この蒼月と共に完成した紅蓮の強化パーツ。

それを持っている仲間達のことを、彼らならカレンを助けてくれるだろうと。

そうでもしなければ、敵に集中することができそうになかったから……

1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9
10	10	10	10
11	11	11	11
12	12	12	12
13	13	13	13
14	14	14	14
15	15	15	15
16	16	16	16
17	17	17	17
18	18	18	18
19	19	19	19
20	20	20	20
21	21	21	21
22	22	22	22
23	23	23	23
24	24	24	24
25	25	25	25
26	26	26	26
27	27	27	27
28	28	28	28
29	29	29	29
30	30	30	30
31	31	31	31
32	32	32	32
33	33	33	33
34	34	34	34
35	35	35	35
36	36	36	36
37	37	37	37
38	38	38	38
39	39	39	39
40	40	40	40
41	41	41	41
42	42	42	42
43	43	43	43
44	44	44	44
45	45	45	45
46	46	46	46
47	47	47	47
48	48	48	48
49	49	49	49
50	50	50	50
51	51	51	51
52	52	52	52
53	53	53	53
54	54	54	54
55	55	55	55
56	56	56	56
57	57	57	57
58	58	58	58
59	59	59	59
60	60	60	60
61	61	61	61
62	62	62	62
63	63	63	63
64	64	64	64
65	65	65	65
66	66	66	66
67	67	67	67
68	68	68	68
69	69	69	69
70	70	70	70
71	71	71	71
72	72	72	72
73	73	73	73
74	74	74	74
75	75	75	75
76	76	76	76
77	77	77	77
78	78	78	78
79	79	79	79
80	80	80	80
81	81	81	81
82	82	82	82
83	83	83	83
84	84	84	84
85	85	85	85
86	86	86	86
87	87	87	87
88	88	88	88
89	89	89	89
90	90	90	90
91	91	91	91
92	92	92	92
93	93	93	93
94	94	94	94
95	95	95	95
96	96	96	96
97	97	97	97
98	98	98	98
99	99	99	99
100	100	100	100

「ああ……落ちちゃう！」

カレンが何度も脱出レバーを作動してもシステムは「ERROR」と表示するのみ。

紅蓮の落下スピードがどんどん増し、海面に近づいていった。

「ごめんね紅蓮……（お母さん……お兄ちゃん……ライ！）」

カレンが諦めて目を閉じたその時

『ベストポジションじゃない』

潜水艦より、ラクシャータからの通信が入った。

「え！？　ラクシャータさん？」

『お待たせ、黒の騎士団特製の飛翔滑走翼。教本の予習はちゃんとやってた？』

「あ、はい！　大丈夫です」

『じゃ～あ本番行ってみようか』

『基本誘導はこちらでやりますね。ライお兄義様の援護とゼロ様の救出をお願いします』

「あ、はい！」

潜水艦の天井部が展開され黒の騎士団特製、飛翔滑走翼がその姿を現す。

『三番垂直発射管、解放。紅蓮式式本体の接続信号を確認』

『舞い上がりな！ 飛翔滑走翼！！』

「曲がれえ！」

ラクシャータの言葉と共に、飛翔滑走翼が紅蓮めがけて発射された。

カレンもそれに合わせるように、破壊された甲冑型腕と頭部パーツをパージし、機体を回転させる。

『誘導信号確認、同調軸側適よし』

『連結！』

「連結！ …… 飛べえええ！」

潜水艦側で、誘導信号と同調させ紅蓮と打ち上げられた飛翔滑走翼が連結される。

飛翔滑走翼と連結を果たした紅蓮は、飛翔滑走翼の推力を利用し海面すれすれで水平飛行した。

『続けて、徹甲砲撃右腕部！』

フロートを手に入れ飛翔した紅蓮の下に、さらに新たな武装である徹甲砲撃右腕部が射出された。

右腕部が接続されると、飛翔滑走翼をカバーしていた装甲が排除され新たな頭部が出現する。

飛翔滑走翼、そして徹甲砲撃右腕部を手に入れ、紅蓮は新しい姿『紅蓮可翔式』に生まれ変わった！

「ライ、今行くから……！！」

今も一人で戦っているであろうパートナー、ライに向けてそうつぶやき、カレンも空へ舞い上がっていった。

- - - - -



1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

一方、空中での戦いはライが一方向的に押されていた。

『どうした？ さっきまでの勢いは、どこに行った！？』

「くそ!!!」

トリスタンはスラッシュハーケンを放ち、蒼月を牽制する。

ライは当然かわすがそこにランスロットがMVSで斬りかかってくる。竜牙で受け止めるが、スザクは剣がぶつかり合うと同時に機体を飛翔させる。

すると、さっきまでランスロットがいた場所の後方からモルドレッドのシュタルクハドロンが放たれた。

機体を上昇させてかわすが、今度はトリスタンが斬りかかってくる。

ラウンズのコンビネーション攻撃により、ライはなかなか攻めに転じることができずにいた。それどころか直撃こそないものの、次

第に追い込まれていく。

「ハッ、ハッ……（まずい。そろそろ輻射波動も弾切れになる！  
拡散構造相転移砲はすでに弾切れだし……どうすれば！？）」

『ライ、降伏するんだ。皇帝陛下より、君の事は生きたまま捕らえ  
よと命令が下っている』

「！？ 皇帝が！？」

『？ なんだスザク。私はそんな命令聞いていないぞ？』

『私も聞いてない。本当なの？』

『……陛下直々のお言葉だ。僕しかこの命令は伝えられていない』

「……（ブリタニア皇帝がなぜ僕を……まさか、僕の正体がばれた  
と言うのか！？）」

スザクの言葉が嘘の可能性も当然ある。

だが、戦況は明らかにブリタニア側が有利。ここで嘘をつく理由  
が見つからなかった。

そして、ライの答えは……

「（何にせよ、僕の答えは決まっている。）悪いがナイトオブセブ  
ン。その要求には答えられない！

僕はお前達に負けはしないし、捕まりもしない！ お前達を倒し、  
仲間達の下へ帰る！」

『……そうか。ならば仕方がない。多少の傷は覚悟してくれ』

その言葉が決別の証となった。ラウンズ達は再び臨戦態勢に入る。

「くそっ……！（カレン……ルルーシュ……皆……！）」

『ライ！ 避けて……！』

「……！」

ライが諦めかけた瞬間、通信が入った。彼のパートナー、カレンからだった。

ライはすぐさま機体を右にずらすと先ほどまで自分がいたところを輻射波動砲弾が通っていった。

ラウンズに向かっていくが、それぞれ散開してかわす。

そして、蒼月の横に並び立ったのは……新たに生まれ変わった紅蓮可翔式だった。

黒の騎士団最強と言われる双壁。その二人が今、戦場で揃ったわけである。

[illegible]

「時間がもつない。スザク、お前は総督を！」

『油断するな！ 赤い機体の相手は、ジェレミア卿にも勝ったことがあるパイロットだ！』

「あのオレンジにかよ！」

ラウンズは二手に分かれた。  
スザクはナナリーの下に、ジノとアーニャは紅蓮・蒼月と戦うようにした。

だが、双壁もほとんど同じ事を考えていた。

「……今のは、僕も危なかったよカレン」

『貴方なら避けるってわかってたから……遅くなってごめん。ライがここまで押されるなんて……』

「いや、大丈夫だ……カレンはゼロの救出にむかってくれないか？  
二機は、僕が相手をする」

『でも、それじゃあ……』

「僕達はゼロの救出も行わなければならない。ここであまり時間を費やしたくない。

君はスザクの間を見つけて、ゼロの下に向かってくれ。」

『わかった。貴方も気をつけて』

「それじゃあ……行くよ――！」

同時に放たれたことにより、輻射波動砲弾の威力も効果範囲も二乗となった。W 輻射波動砲弾とでも言うべき技。

フォートレスモードのトリスタンはこれを接近しながらもこれを回避し、巨大なスラッシュハーケンを放つ。

二機は舞うようにかわし、すかさず反撃の輻射波動砲でそれぞれトリスタンとモルドレッドを狙う。

上手い具合に攻撃を避けた二機が別れた。そこにできた穴を紅蓮が全力で突っ切る。

モルドレッドとトリスタンがさせまいとするが、その進路にライ  
の蒼月が割り込んだ。

「さあ、もう一度相手をしてもらおうか」

ライ対ジノ・アーニヤの第二ラウンドが行われようとしていた。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												

[illegible]

トリスタンとモルドレッドをライに任せ、カレンは総督を探していたスザクのランスロットに肉薄した。

「スザクッ！！」

「カレン……この状況でまだ向かって来るなんて……まさか、まだ艦にゼロが!？」

「どけええええええ！」

怒号とともに、カレンは、紅蓮の背中からゲフィオンネットをラ  
ンスロットに発射する。

サクラダイトの機能を停止させる効果をもつゲフィオンディスプレイを搭載したミサイルである。

それが今、ランスロットの周りに打ち込まれた。

それは……対策済みさ」

「でも、足は止まったね！」

ゲフィオンネットをハドロンプラスターにより破壊はされたが、その間ランスロットの動きが止まった。

カレンは機体急加速させ、輻射波動を放出する。

『そんな！ユグドラシルドライブのパワーも上がっているはずなのに……！？』

ランスロットはMVSを抜きざまに逆手で持つて受け止めた。  
輻射波動を受け止めたが、押されている。

そんな中、アヴァロンよりオペレーターのセシルから通信が入る。

『スザク君！ 総督の現在位置がわかったわ。メインブリッジ後方のガーデンスペース！ でも、墜落まであと47秒！』

「必ず助けます！」

だが、通信に一瞬気を取られ反応が遅れる。  
紅蓮のスラッシュハーケンが顔面に直撃した。







「悪いが……お前の速さはもう見切った!」

ジノはトリスタンをフォートレスモードにし回避、さらに蒼月をモルドレッドのハドロン砲が襲う。

ライは蒼月を下降させて回避すると、輻射波動砲弾をロングレンジで放つ。

対し、トリスタンをハーケンを合体させハドロンスピアーを発射、輻射波動砲弾を相殺した。

直後、モルドレッドがミサイルを発射。かなりの数のミサイルが蒼月を目掛けて飛んでくる。

ライは得意の回避術ですれすれでかわし、今度はモルドレッドに斬りかかる。

モルドレッドはそれをブレイズルミナスの壁で受け止めた。

「鎧袖伝達!」

再び竜牙の刀身が赤く染まり、ブレイズルミナスを侵食する。そして遂に、ブレイズルミナスにヒビが入った。

「!？ 嘘!？」

「何度僕が攻撃を繰り返したと思っている!？ いっけえええ!!」

ライはそのまま竜牙を一閃。  
ブレイズルミナスが破られ、モルドレッドを竜牙が襲った。

右肩を貫かれたアーニヤはそのまま右手をパージ。  
これで、4連ハドロン砲・シユタルクハドロンは使用不可能となった。

そこにトリスタンが突進してくるがライは上昇することで回避。  
そして……

「悪いが、お前達と遊んでいる暇はない! これで、終わりだ!!」

左手に搭載されていたギミックを展開。そして、左手から輻射波動砲弾が発射された。

しかしロングレンジではなく、ワイドレンジに。

拡散させただけが、機体ダメージが大きく二機はしばらく動け

ない。

「（もつとも、これで輻射波動の残弾は0……危なかった。）悪いが、ゼロを追わせてもらう」

元々、カレンがゼロを救出するまで彼らを足止めすることが目的だったからこれで十分だろう。

おそらくトリスタンもモルドレッドもしばらくまともに動けないはずだ。

ライはそう判断すると、二機に背を向けて重アヴァロン方向に飛び去って行った。

自分達に背を向け飛び去っていく蒼月を見ながら、アーニヤが呟いた。

「何、あのナイトメア……」

「いや、パイロットでしょ。最初から本気出しときゃ良かった」

ジノは久しぶりに本気を出せる好敵手の出現に、胸の高まりを抑えられずに呟いた。

次に戦う時はこの借りは必ず返すと心に誓うジノとアーニヤであつた。

[illegible]

ライは紅蓮の援護のため大アヴァロンへ向かう。しかしながら数秒後、大アヴァロンは海へ沈んだ。

その付近から紅蓮が腕にゼ口を乗つけて姿を現す。

「カレン！ ゼロは……！？」

「ナ……ナナ、リー……ナナリーッ！」

「さっきから、この調子で……」

「……撤退するぞカレン。皆が待つ潜水艦へ向かう。ナナリー総督

奪還は失敗だ。これ以上、ここにいる理由がない」

ルルーシュは完全に呆けていた。

ライはそれだけで何があつたのか察すると、全軍に撤退を指示し、カレンと共に潜水艦へ戻っていった。

戦術的に見ればライやカレンは勝つたと言える。

しかし戦略的に関して言えば、この戦いは騎士団の完全敗北であつた。

## TURN 10

### 海上の死闘（後書き）

後書き

作「ルルーシュ、戦意喪失の回」

ラ「せっかく新しいナイトメアが出てきたと言っているのに……」

C「だが、結局のところ敗北だろう？ 新型をのぞく全てのナイトメアを失い、戦闘目標であった総督奪還に失敗した」

カ「でも、ラウンズと対等に戦えたという経験は無駄にはならない！」

作「今回は今回出た『蒼月天衝式』について紹介していこうと思います。意見や質問があれば受け付けますので……これからもよろしくお願いします！」



## 次回予告

ナナリー総督奪還に失敗した。

ゼロを否定され、ルルーシュは一人さまよい続ける。

もはや戦う理由がないと、そう言い表すかのよう……

ルルーシュ、君はそうやって逃げるといつのか!? 君はまだわからないのか!?

僕らにはもう、退くことは許されない……いや、できないんだ！

NEXT TURN 「覚悟と責任」

## 機体データ 蒼月天衝式

ライ専用KMF 『蒼月天衝式』  
そうげつてんしょうしき

形式番号 Type - 02 / F2Z

分類 第七世代KMF相当

所属 黒の騎士団

開発 ラクシャータ他

全高 4・68m

全備重量 5・27t（可翔6・26t）

推進機関

ランドスปีナ  
高機走駆動輪  
フrootユニット  
飛翔滑走翼

## 武装

徹甲砲撃左腕部

輻射波動刀『竜牙』

拡散構造相転移砲試作品×1

内蔵型機銃×2

スラッシュバーケン

飛燕爪牙×1

ラクシャータが開発した飛翔滑走翼と、新型の左腕パーツ・徹甲砲撃左腕部を装備した月下の強化型。

基本カラーは月下と同じ青。他の機体よりもコクピットが少し広い。

ライのスピードを活かすため、装甲を薄くした。

背部に装備された飛翔滑走翼によって、空中を自由に飛行することが可能。

月下以上にピーキーな機体な上にその武装から、ライ以外には動かせない機体になっている

（藤堂やカレンはかろうじて動かせたが、本来の性能の20%も引き出せない。

ルルーシュは反射角計算こそできるが、機体をまともに操縦できない）

特徴的なのは、この蒼月のみに搭載されている『竜牙』、そして

『拡散構造相転移砲試作品』

『竜牙<sup>りゅうが</sup>』

見た目は制動刀と変わらない。

表面に輻射波動を展開する事で刀身に触れている物体を破壊する。

『拡散構造相転移砲試作品』

胸部からプリズム状に凝固させた特殊な液体金属を発射し、それを追うように高威力のビームを発射することで、広範囲にビームを乱反射させ長距離かつ広範囲の標的を一度に殲滅する兵器。

コックピットに現れるコンソールを用いて拡散構造相転移砲の反射角計算を手動で行う。

後の機体開発のために、そしてライの優れた状況判断力と演算処理力を見込んで取り付けられた武装。まだ開発途中であり、威力も範囲も完成品より劣っているものの、十分な威力を持っている。

液体金属を用いない一点集中砲撃も可能。

拡散構造相転移砲は一発しか撃てない上、撃つ際にはコンソールを展開して反射角計算をしなければならなかったため、緊迫した状況下では使えない。



## お知らせ

皆さんお久しぶりです。 s t a r です。  
いつも宿反を見ていただきありがとうございます。ここまでこれたのも皆さんのおかげです。

それで、今日は皆さんにお知らせしたいことがあります。

現在私は宿反の本編と番外編を一つの小説として投稿していましたが、これからは分けていこうと思います。その方が本編も見やすくなるということでした……

番外編の方のタイトルはそのまんまで『宿命に抗いし反逆者 番外編』というタイトルで投稿していこうと思います。

そして、以前連続物で投稿していた『届かない声』『紅蓮の騎士、迷走』『反逆の双壁』を新たに新連載の小説として投稿します！

タイトルは……『コードギアス 相反する王と双壁の軌跡』です！

一応、どちらも移すだけでなく、新しい話も一緒に投稿しました。

できればそちらのほうもよろしくお願いします!!



作戦決行から数日後。

僕は現在黒の騎士団の潜水艇内にいる。

ルルーシュはスザク達ブリタニア軍人の監視を欺くために学園に戻っているが、それ以外の団員はみなここにいる。デイトハルト達、別任務を与えられた者達は別だが。

……だが、正直言つて騎士団内の空気が重い。皆の士気がかなり低下している。

原因は前回の作戦の失敗だ。

作戦では人的被害こそ0だったが、紅蓮・蒼月以外のナイトメアを全て失った。

現在調整中の藤堂さん達の専用機はインド軍区にあるため補強はできない。

つまり、戦場に立てるのが僕とカレンのみという状況だ。

機体の性能こそ上昇したが、他の団員が戦場に立つことができないというのはあまりにも大きい。

「（最も、一番心配なのはルルーシュなんだけどね……）」

あの作戦以降、ルルーシュからは何の連絡もなかった。あの日のことは何も聞いていない。

しかし、あの時のルルーシュの様子はただ事ではなかった。

状況的に彼はナナリーと話をすることができたはず。つまりナナリーとの会話で何かを言われたんだろうが……一体、何があったんだ？

考えられるのは……ナナリーの『ゼロ』の拒絶。

彼女のために戦ってきたということが、他の誰でもないナナリーに否定されたんだろう。彼にとってそれは今までの行動全てを否定されたということになる。

でも、それでも騎士団には彼が　ゼロが必要なんだ。

「今日も来なかったわね、ルルーシュからの連絡」

「……カレンか」

部屋にはいつの間にかカレンが入ってきていた。

「まさかとは思つけど……このままゼロをやるなんて、「カレン」……ライ」

「僕は信じようルルーシュを……僕達のリーダーを」

「……うん」

といつても、最悪のケースも考慮に入れなければならない。  
彼が『ゼロ』が戦場に立てなくなった場合のことも。

ルルーシュのことは信じたい。けど信じすぎてはいけない。

僕達にはもう、失敗は許されないのだから……

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

- - - 司令室 - - -

僕はカレンを連れて司令室に入っていった。丁度部屋には騎士団幹部が集まっていた。

幹部は皆、一つのモニターを見つめていた。

「お、ライ。カレンも来たか」

「何かありましたか？ 何かブリタニアに動きが？」

「ああ。丁度新総督の就任演説が始まるところなんだよ」

「総督の！？」

ナナリーの演説か。就任演説ということは今後の方針についても何かしら話が出るはず。

ナナリーの考えを知るには丁度いい。

ひよっとしたら、この前の作戦のことも少しはわかるかもしれない。

『皆さん、始めまして。私はブリタニア皇位継承第87位、ナナリー・ヴィ・ブリタニアです。先日亡くなられたカラレス公爵に代わり、このたびエリア11の総督に任じられました。』

私は見ることも歩くこともできません。ですから、みなさんに色々とお借りしたいと思います。

どうか……よろしくお願いします』

「よろしく願いますって……」

「なんか、調子狂うな……」

幹部はナナリーの挨拶に戸惑っている。

それと言うのも、総督があまりにも今までの者達と違っているから……違いすぎているからだろう。

コーネリアやカラレスは武官であり、武力行使も度々行い日本人に対する圧力も大きかった。

だがナナリーはあまりにも穏やかで、彼らとの違いが明白だった。

『ブリタニア皇族「敵」という騎士団内の印象と大きくかけ離れている。』

……南さん、なぜ頬を赤く染めているんですか？　ゼロに処刑されそうです？

『早々ではありますが、みなさんに協力していただきたいことがあります。』

私は、行政特区日本を再建したいと考えています』

「なっ!？」

「行政特区日本を……!？」

これだ……!

だからナナリーはルルーシュの　ゼロの手を取らなかったんだ。

ナナリーは、皇帝に命じられて総督になったんじゃない!

自分の意思で、自分の手で行政特区を成功させるために……!

「……ライ、大丈夫？」

「……ああ。彼に比べれば全然」

行政特区日本。あれは僕にも責任がある。

僕はその場にいたのに、僕には止められる力があつたのに、何も

できなかった。また悲劇を繰り返してしまった。

『特区日本ではブリタニア人とナンバーズは平等に扱われ、イレヴンは日本人という名前を取り戻します。人種を理由に、人と人が分かれ合えないことはありません。日本人でも同じものを食べて、同じように笑っていいのです。』

かつて特区日本では不幸な行き違いがありました。目指すところは間違っていないと思います。等しく優しい世界を。

黒の騎士団の皆さんも、どうかこの特区日本に参加してください。共に協力しませんか？

互いに過ちを認めればきつとやりなおせる。私はそう信じています。』

「……!!」

「えっ!？」

「またかつ!」

「今更……!!」

無理なんだよナナリー。人はそんな簡単にわかりあうことなんてできない!! 結局はそれも夢物語なんだ!

あの時と状況は変わりすぎている。

一つ、行政特区が1年前にすでに失敗しているということ。

あの時の虐殺により日本人の心は完全にブリタニアから離れてしまった。軍人の中にも、これは罠だと認識したものがあるかもしれない。

二つ、ブラックリベリオンという日本とブリタニアの間で最大規模の戦いがあったこと。

あの戦いで更に多くの人間が死んだ。日本人の被害も大きく、ブリタニアもコーネリアが失踪、ダールトンが戦死というように被害が大きい。これによりお互いの憎しみがさらに強くなってしまった。

三つ、日本人がカラレス総督の統治を受けたこと。

カラレスはある意味コーネリア以上の圧政をしいた。これにより、日本人の多くが殺された。桐原さん達もそうだ……

あの時よりも、お互いの怒りや悲しみが増大しすぎている。その状況下で行政特区が成功するとは思えない……！

「君が思っているほど、世界は単純にはできていないんだよナナリ！……！」



[illegible]

エリア11 ヨコス力港

ナナリーのあの演説から時間もち、もう日も暮れてきた。なのに、ルルーシュからは何の連絡もない。

このままでは、最悪のケースの可能性の方が高くなってくる。ただ、彼がどこにいるのか見当がつかないため、探しにも行くこともできない。

「ははは。あの総督も、虐殺皇女ユーフェミアと同じって事だ」

⌋  
⋮  
⌋

「確かに日本人は誰も参加しないだろな」

「甘い言葉で誘い出して皆殺しってか？ なめやがって！」

……やはり駄目だ。気性が激しい玉城はもちろん、扇さんまでも今回は反対に回っている。

それほどまでに、あの失敗は大きかったってことか……！

「で、これからどうするんだ？」

「そりゃあ、ブリタニアと決戦を！」

「うちのナイトメアは紅蓮と蒼月の二騎しか残ってないのに？」

「……そうですね。南さんの言うとおり、今の戦力で挑むのは自殺行為です」

「だからゼロが……」

「そうですわ！」

「神楽耶！」

「神楽耶様！」

扉から突然神楽耶が入ってきた。

「玉城さんの言うとおりですけど……どうしてゼロ様は居ないんですの？　せつかく新妻が来たのに。」

中華連邦に居る時も文の1通もいただけなくて……」

「浮気でもしてたんじゃないですか？」

ゼロの不在に疑問を感じた神楽耶に、玉城がとんでもない発言をした。

……このバカは。神楽耶相手になんてことを言ってくれるんだ！

「バカなこと言わないでよ！　嘘！　嘘ですからね、神楽耶様」

「あら、構いませんよ」

「へっ？」

神楽耶の機嫌を損ねないように、カレンがフォローするが神楽耶が気にした様子はない。

それどころか、彼の浮気を許すような発言にカレンは目を丸くする。

「『英雄色を好む』と言いますし。成人男子の生理をかんがみれば……ねえ？ ライお義兄様」

「なんでそこで僕に振るんだ神楽耶！？」

「ライ……本当なの？」

神楽耶の発言を信じているのか、僕を疑惑の目で見るカレン……あんまりだと思う。  
僕はいつからカレンの中でそんなに信用のない人間になっていたのだろうか？

「信じてくれカレン！ 僕はカレン一筋だから！！」

「どうだかな……そう言っておきながら何もしないところを見ると他の女がいるんじゃないのか？」

「C・C・！？」

「……………！！……………」

C・C・の発言に言葉を失ったカレンが部屋から出ていく……つてマズイ！ 絶対に誤解している！！

「ちょっと待ってカレン!!」

僕もカレンを追って部屋から出る。

「カレン!」

「……何かしら?」

……いつものカレンの声ではない。いつもの優しさがこもっていない上に感情がまったく感じられない。  
これは……絶対に勘違いしている!

「C・Cが言ったことなんて信じないでくれ! 僕が他の女性に気が向くはずないだろう!」

「……じゃあ、なんでキスもしてくれないの?」

「……え!?!」

「ほらやつぱり！」

「いや、そういう行為は……」「誰とやってるって言うの!?!」「してない!?!」

「……じゃあ、証明してよ。私のことが好きだって。私はライが好き。でも、ライのことはわからないから……」

カレンは僕の腕を引いて僕を引き寄せる。そして、身を任せるように目を閉じた……

これは、やるしかないのか……

カレンの顎に手を当てて、彼女の顔を僕の顔へと近づけた。

「ん……」

「……ッ」

どれくらいの間だったかはわからない。

一瞬だった気もしたし、一分くらいだった気もする。

顔が離れて頬を赤く染めたカレンの顔が見える。恐らく僕の顔も赤く染まっているのだろう。



- - - - -

- - - シンジユクゲッター - - -

東京租界の再開発地域の一つであるシンジユクゲッター。ここにルルーシュが来ていた。

（もういないんだ。ゼロは……俺の戦いは）

ゼロの仮面をかぶり、戦い続けることで妹ナナリーが安心して暮らせる世界を作る。そのためだけに、戦場に立ち続けてきた。

しかし、それがナナリーの邪魔になっていると、ルルーシュは考えていた。

（俺がいなくても、ナナリーの身の安全は保障されている。もう必要ないんだ。ゼロも……俺自身さえも）

ルルーシュは先ほどブリタニアの貴族から奪い取った注射器を見つめた。



…… エリア11で広まっている麻薬『リフレイン』。中毒に陥ると過去に戻った気になり、やがては発狂に至る。現実から目を背け、それ以前の幸せな時に逃避する手段である。

（それならせめて、夢の中だけでも、ナナリーと一緒にあのころに……）

もはや正常な判断力を失っていたルルーシュには、それを射つ以外の考えが存在しなかった。

「ナナリー……」

「ルルーシュ！」

「やっぱりここに來たのね」

「！？ ……ライ、カレン。なぜここに？」

ルルーシュがリフレインが射とうとしたまさにその時、ライとカレンが彼を発見した。

「ここはゼロが……貴方が始まった場所だものね」

「人はどうしても、自分の原点に帰りたくなることがある。特に、自分が絶望に陥ったときにはね。」

……ルルーシュ、君は今一体何をしようとしていた？」

「！ それ……」

二人は質問に答え、逆にルルーシュに問いかける。彼が所持していた注射器について。彼がしようとしていたことについて。

「リフレイン。お前達も知っているだろう？ 懐かしい昔に帰れる……」

「ふざけないでっ……！」

カレンはルルーシュに駆け寄ると、リフレインが入った注射器を取り上げ、地面に叩きつける。注射器は壊れ、リフレインが地面に染み込んでいった。

リフレイン……一年前、カレンの母親はこの薬物を使用し廃人状態に陥ってしまった。カレンにとってこれはブリタニアと同じくらい、いやそれ以上に憎いものだった。

「一度失敗したくらいで何よ！ また作戦考えて取り返せばいいじゃない！ いつもみたいに命令しなさいよ！ ナイトメアに乗る？ それとも囃捜査？ 何だって聞いてやるわよ！！」

「だったら、俺を慰めろ……」

「えっ？」

ルルーシュは静かに立ち上がり、カレンに近づいていった。彼のアメジストの目はにごっていて、いつもの覇気は感じられない。

「女なら出来ることがあるだろう？ どうせライにはしているのだからうしな」

（ルルーシュは、今なんて言った？）

今まで黙っていたライだったが、ルルーシュの言葉を聴いて激怒していた。

二人の絆を侮辱したルルーシュに。

少なくともライはカレンとつい先ほど一回だけキスをしただけだった。今までライは恐れていた。カレンが本当にそれを望んでいるのかどうかということに。自分だけが思い過ごしているのではないかと。

それでもかレンも望んでいると認知したからこそその行為だった。それをルルーシュは事も無げに発言したのだから。

そして、変わり果ててしまった彼に。

一度失敗して、それでもう諦めているルルーシュに。彼はまだ失ってはいない、自分とは違う。まだ取り戻せる。それなのに、彼らはもはや戦うことから逃げてしまっている。

「ふざけるな……ふざけるな！」

ライはルルーシュの腕を振りほどき、殴り飛ばした。

「君の覚悟とは、そんな軽いものだったのか！？ 一度拒絶されたら、全てを投げ出すのか！？ いつから君はそんなに弱くなったんだ！」

「……ッ！」

ライはルルーシュの胸倉を掴み無理やり立たせ、必死に訴える。

「まだ君は失っていないだろう！ 失っていないのなら、まだ希望はある！ なのに……なのに君はその希望まで捨てて、一人で逃げるのか！？」

「……」

「しっかりしろ、ルルーシュ！ 今の君はゼロなんだ！ この戦いはもう、君だけの私闘じゃない！ みんなの戦いなんだ！ 君にはカレンや騎士団の皆、日本人に夢を見せた責任がある！ その責任を放棄するな！

僕たちは退くことは許されない……少しでも前に進まなければいけないんだ！」

ライが手を放すと、ルルーシュはその場にズルズルと座り込んでしまう。

ライは無気力なルルーシュの胸倉から手を離して振り返って立ち去ろうとするが、途中で立ち止まった。

「ライ……俺は……」

「後は自分で立ち上がれ。もう一度、自分の意思で覚悟を示せ。」



「C・C・か……」

「日本人だけではない。世界を背負う覚悟がなければ……」

部屋に入ってきたC・C・には目を向けず、ただ仮面を見つめ続けながら答える。

「覚悟なら当の昔にできている。戦う理由だってある。

もし、本当にルルーシュが帰ってこない場合は……僕が……」

言葉が続けようと思ったが、突然かかってきた通信によって遮られた。

『こちらはブリタニア軍である。貴船の所属、航路は申告と違っている。停船せよ。これより強行立件を行う!』

それを聞いた僕は潜水艦の操舵室に駆け込んだ。  
そこには全体の指揮を任されていた藤堂さんがいた。

「見つかったんですか!？」

「恐らくな」

カレンの問いかけに藤堂さんがそう答えた。

『10分待つ。その間に乗組員は武装解除し、甲板上に並べ』

声から察するに、ブリタニア軍の指揮官はスザク。ナイトメアを持ってきているだろうし、恐らく他のラウンズもすぐに駆けつけるだろう。

「……ラクシャータ、念のため蒼月の出撃準備を」

「やる気? 確かに蒼月なら多少の水中戦もできるけど……あの数を相手に、さらに水中戦用のナイトメアまで出てきたら……」

「いや、水中だけの話ではない。ラウンズが出てきた時にも機体は必要だ」





のこの三人が屋上で花火をあげていたのだ。ルルーシュは三人から話を聞いている内に気づかされた。

（俺の求めていたものはここだったのか……優しい世界はこんな近くに……）

あまりにも身近すぎて気付けなかった幸せ。優しい世界は気付いていないだけで、既に存在していた。

ルルーシュの瞳には三人の並んでいる所に、今はいないナナリーやスザク、カレン、ニーナ……そしてライが映っていた。

今は過去となってしまった幸せな日々。

（そう、俺の戦いはもうナナリーだけじゃ……）

この時、ルルーシュの瞳から迷いは完全に消え去った。  
アメジストの瞳には、再び光が映し出されていた。

- - - - -



「パッシブにて確認。動力音から水中型かと」

「やはり、水中戦のナイトメアを用意していたか……」

「深度を下げる。見つかったら終わりだぞ」

相手の水中戦力もそうだが、水上からの攻撃も続く。当てずっぽうではあるが、数が多すぎる！

ついに、砲撃のいくつかが潜水艦に被弾する。

「艦内各部に浸水！」

「動けば相手に捕捉される。耐えるんだ」

「でも……あ！」

さすがに、これ以上は潜水艦の方がもたない。敵機に見つかる可能性も増えるし、このままではジリ損だ……

「カレン！ これから僕が……『Q-1。聞こえるか？ Q-1』  
！？」

この声は、まさか……！

「ゼロ！」

『ダウントリム50度。ポイントL14に向けて急速先行しろ！』

「聞いたとおりだ。今すぐ方向転換しろ！」

『正面に向けて魚雷全弾発射！ 時限信管にて40秒だ』

「？ 正面に？」

正面……敵機は一つもみつからない。それに、こちらから魚雷を  
発射すれば相手に居場所を補足される。

だけど、今は信じる以外手がない……

「信管設定後、全弾発射」

藤堂さんも同じことを思ったのか、ゼロの指示通りに魚雷の発射

を命じる。

『アンカー固定後各位、衝撃に備えろ』

「艦を固定、衝撃に備えろっ!!」

すると、先ほど砲撃した場所が爆発し、その中から空気のようなものが大量に出てきた。

「これは……メタンハイドレードか！ その採掘施設を破壊したんだ。溜まりこんだ空気が爆発的に溢れ出て、そして……」

浮き上がってきた大量の泡に水中型ナイトメアが飲み込まれていく。敵の潜水艦も舵を取られ次々と転覆していく。

これでブリタニアの海中戦力はほぼ全滅した。

「ゼロです！ ゼロが現れました！」

「！ ゼロが……」

モニターには、ロロが乗っていた金色のヴィンセントの手のひらにゼロが乗っていた。

『これが、お前の答えなのか!?』

ランスロットがヴァリスをヴィンセントに向けた。  
だがしかし、ゼロの答えは皆が予想していたものとはまったく別のものであった。

『撃つな! 撃てば君命に逆らう事になるぞ』

『何?』

『私はナナリー総督の申し出を受けよう。そう、特区日本だよ』

『そんな……!』

『馬鹿な!』

ゼロの発言にカレンも藤堂さんも驚きの色を隠せない。  
実際、僕とて内心では驚いている。

『ゼロが命じる！ 黒の騎士団は全員、特区日本に参加せよ！』

一体どうするつもりだぜロ……いや、ルルーシュ。

1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9
10	10	10	10
11	11	11	11
12	12	12	12
13	13	13	13
14	14	14	14
15	15	15	15
16	16	16	16
17	17	17	17
18	18	18	18
19	19	19	19
20	20	20	20
21	21	21	21
22	22	22	22
23	23	23	23
24	24	24	24
25	25	25	25
26	26	26	26
27	27	27	27
28	28	28	28
29	29	29	29
30	30	30	30
31	31	31	31
32	32	32	32
33	33	33	33
34	34	34	34
35	35	35	35
36	36	36	36
37	37	37	37
38	38	38	38
39	39	39	39
40	40	40	40
41	41	41	41
42	42	42	42
43	43	43	43
44	44	44	44
45	45	45	45
46	46	46	46
47	47	47	47
48	48	48	48
49	49	49	49
50	50	50	50
51	51	51	51
52	52	52	52
53	53	53	53
54	54	54	54
55	55	55	55
56	56	56	56
57	57	57	57
58	58	58	58
59	59	59	59
60	60	60	60
61	61	61	61
62	62	62	62
63	63	63	63
64	64	64	64
65	65	65	65
66	66	66	66
67	67	67	67
68	68	68	68
69	69	69	69
70	70	70	70
71	71	71	71
72	72	72	72
73	73	73	73
74	74	74	74
75	75	75	75
76	76	76	76
77	77	77	77
78	78	78	78
79	79	79	79
80	80	80	80
81	81	81	81
82	82	82	82
83	83	83	83
84	84	84	84
85	85	85	85
86	86	86	86
87	87	87	87
88	88	88	88
89	89	89	89
90	90	90	90
91	91	91	91
92	92	92	92
93	93	93	93
94	94	94	94
95	95	95	95
96	96	96	96
97	97	97	97
98	98	98	98
99	99	99	99
100	100	100	100

司令室

「行政特区に入るなんてどういいうつもりだろうねえ……」

「さあ？」

「扇、ゼロの判断が我ら日本人の為にならない物なら……」

「藤堂さん……」



司令室に騎士団幹部が揃っていた。ゼロが行政特区日本への参加を宣言したことで、騎士団幹部は動揺していた。そしてそんな中にゼロが司令室に入ってきた。

「ゼロ様〜！ 新妻をこんなに待たせて」

『神楽耶様。変わらぬ元気なお姿、安心しました』

「ゼロ様こそ、相変わらず人を驚かせてくださいますのね。特区日本に参加するだなんて」

神楽耶が入室したゼロに抱きついていった。  
一瞬場が和んだが、神楽耶の質問によって再び場の空気が重くなる。

「そうだゼロ、あれはどういう意味なんだ!？」

「だからさあ、誘いに乗ったふりしてブリタニアをぶつつぶすんだよ!」

『戦って、戦って……それでどうする?』

ゼロの返答はまるで戦うことを否定するような言葉だった。予想とかけ離れた返答に、皆どよめくしかできなかった。

「待てよ！ 仲良くしようってわけじゃねーよな！？」

「それともあるのか？ 戦わずにすむ方法が」

「ブリタニアの中から変えるつもりか？ 我らは独立のために」

『藤堂、日本人とは何だ！？』

言葉遊びにも聞こえるようなものだが、ゼロの質問に答えられるものはいなかった。

……だけど、僕の答えはもう決まっている。カレンと暮らしているうちに、だんだんと答えが次第にわかってきたから。

『ライ、君はどう思う？ 日本人とは、民族とはなんだ？』

「……言語、土地、血のつながり……言えきりが無い。だけど、何よりも大切なものがある」

『大切なものとは？』

「心だ。自身が日本人であるという自覚を持つ人が、日本人だ」

『私もそう思う。住む場所が違おうと、心さえあればそれは日本人』

だ！』

「……君の考えはわかった。それで、どうするつもりだ？」

『ああ、今回我々は……』

……君は一休さんか。ゼロが提示した作戦……さすがに僕もそこまでは思いつかなかった。まだまだ頭が固いといったところか。

ゼロの作戦は受け入れられ、団員はその準備の為に動き出す。

そんな中、僕はゼロに呼び出されていた。

「……来たか、ライ」

「もう大丈夫なんだな？」

「ああ、もう迷いは吹っ切れた。あの時はすまなかった」

ルルーシュの顔には迷いはもう見られない。以前のような  
それ以上の決意を決めた瞳をしていた。      そ

「もし謝るならカレンにしてくれ。正直言うと、君が逃げようとしたことに対してはもう許す。」

「ただ、君がカレンにしようとしたことはカレンに謝ってくれ」

「ああ、ありがとう」

「ただし、次にカレンにあんなことしようとしたら……すから」

「え？ あ、いやわかった。もう二度としない、約束しよう」

「……もう逃げるなよ。たとえどんなことが起こっても」

「ああ。これから頼む」

再び僕とルルーシュは握手を交わす。彼の瞳に迷いはない。

1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9
10	10	10	10
11	11	11	11
12	12	12	12
13	13	13	13
14	14	14	14
15	15	15	15
16	16	16	16
17	17	17	17
18	18	18	18
19	19	19	19
20	20	20	20
21	21	21	21
22	22	22	22
23	23	23	23
24	24	24	24
25	25	25	25
26	26	26	26
27	27	27	27
28	28	28	28
29	29	29	29
30	30	30	30
31	31	31	31
32	32	32	32
33	33	33	33
34	34	34	34
35	35	35	35
36	36	36	36
37	37	37	37
38	38	38	38
39	39	39	39
40	40	40	40
41	41	41	41
42	42	42	42
43	43	43	43
44	44	44	44
45	45	45	45
46	46	46	46
47	47	47	47
48	48	48	48
49	49	49	49
50	50	50	50
51	51	51	51
52	52	52	52
53	53	53	53
54	54	54	54
55	55	55	55
56	56	56	56
57	57	57	57
58	58	58	58
59	59	59	59
60	60	60	60
61	61	61	61
62	62	62	62
63	63	63	63
64	64	64	64
65	65	65	65
66	66	66	66
67	67	67	67
68	68	68	68
69	69	69	69
70	70	70	70
71	71	71	71
72	72	72	72
73	73	73	73
74	74	74	74
75	75	75	75
76	76	76	76
77	77	77	77
78	78	78	78
79	79	79	79
80	80	80	80
81	81	81	81
82	82	82	82
83	83	83	83
84	84	84	84
85	85	85	85
86	86	86	86
87	87	87	87
88	88	88	88
89	89	89	89
90	90	90	90
91	91	91	91
92	92	92	92
93	93	93	93
94	94	94	94
95	95	95	95
96	96	96	96
97	97	97	97
98	98	98	98
99	99	99	99
100	100	100	100

ゼロが用意した100万人の日本人が会場にひしめき合っている。もちろん僕達団員も変装して紛れ込んでいる。

全ては、ゼロの作戦のもとに。

「日本人のみなさん、行政特区日本へようこそ。たくさん集まってくださって、私は今とても嬉しいです。新しい歴史のためにどうか力を貸してください」

ナナリーのスピーチによって、式典は始まった。それでもブリタニア軍の兵士達はいまだに警戒を強めているようにみえる。実際、空中にはラウンズの機体も見える。

「それでは式典に入る前に私達がゼロと交わした確認事項を伝えます。

帝国臣民として行政特区日本に参加する者は特赦として罪一等を減じ、3級以下の犯罪者は執行猶予扱いとする。

しかしながら、カラレス前総督の殺害など、指導者の責任は許しがたい。よってエリア特法12条第8項に従い、ゼロだけは国外追放処分とする」

総督補佐官であるローマイヤによってルルーシュがあらかじめブリタニアと接触して決めておいたゼロの国外追放が発表される。

本来なら暴動が起こりかねないような内容だが……今回は違う。

『ありがとう、ブリタニアの諸君！ 寛大なるご処置、痛み入る』

会場に設置された巨大モニターにゼロが映し出された。そのいきなりの出来事にブリタニア軍が動揺した。

「姿を現せ、ゼロ！ 自分が安全に国外に追放してやる！」

そんな中、スザクがナナリーをかばうようにステージに上り出た。その様子は、まさに彼女を守る騎士の姿だった。

『人の手は借りない。それより枢木スザク、君に聞きたいことがある。』

日本人とは……民族とは何だ？』

「何！？」

『言語か？ 土地か？ 血の繋がりが？』

あの時と全く同じ質問だ。普通ならどう答えればいいかわからな

いはずだが、スザクは答えを導き出し、迷うことなく答えた。  
まさに、彼が望む本当の答えを。

「違う！ それは……心だ！！」

『私もそう思う。自覚、規範、矜持。つまり、文化の根底たる心さえあれば住む場所が異なろうとも、それは日本人なのだ！』

「作戦……開始！」

ゼロの言葉が終わると同時に荷物に仕込んでおいたスモーク弾が起動、会場全体を白い煙が包み込む。

そしてその間に、僕達は着替えを始めた。そう、ある衣装に……

次第にスモークが晴れていき、会場が元に戻っていく。

「！？ ぜ、ゼロが！？」

ブリタニア軍が驚愕する声が聞こえる。それもそうだ。100万人が……ゼロの姿をしているのだから。

……カオスだ。前後左右ゼロしかない。どこを見ても、あの独

特なポーズを決める奇跡の男しかない。僕がそう思うのだから、全体を見ているブリタニアは尚更だろう。

ゼロが記号である事を利用した追放という形の国外脱出、これこそがルルーシュの策だった。

『全てのゼロよ！ ナナリー新総督のご命令だ、速やかに国外追放処分を受け入れよ！』

どこであろうと、心さえあれば我らは日本人だ。さあ、新天地を目指せ！――』

「ゼロの素顔を知らない以上、もはや誰が本物なのかを確かめる手段はない。

あらかじめ確認しておくべきだったな、ブリタニアは」

「戦闘隊長！ 海氷船が到着しました！」

「了解した。騎士団員は市民の誘導をはじめろ。迅速に、確実にな」

「了解！」

問題はブリタニアがどう動くのかだけど……本当にもめているな。殺害を執行しようとするローマイヤと、それを止めようとしているスザク。この場の総責任者はスザクだ。だからこそ、スザクの決



定によってこの状況が変化する。

「……死になさい、ゼロ」

だが、ローマイヤがスザクを無視し、拳銃をゼロ（？）に向ける。

「っ！！ そうだよな。ユフィもナナリーも許すつもりだった！！」

スザクは今にも銃を撃とうとするローマイヤの腕を抑え込む。

「相手はゼロです！」

「ゼロは国外追放！ 約束を違えれば、国民も我々を信じなくなります！」

「国民？ イレヴンのことか？ あなたがナンバーズ出身だからと  
いって……」

「ナンバーは関係ありません！ それに国策に賛同せぬ者を残して  
どうするのです！？ 不穏分子だからこそ、追放すべきなのではな  
いですか？」

ローマイヤから銃を取り上げると、スザクはモニターに映るゼロに叫んだ。

「約束しろゼロ！ 彼らを救ってみせると！」

『無論だ。枢木スザク、君こそ救えるのか？ エリア１１に残る日本人を』

「そのために、自分は軍人になった！！」

『わかった……信じようその約束を。』

……聞こえたか、全てのゼロよ！ 枢木卿が宣言してくれた。不穏分子は追放だとな！ これで我らを阻むものはなくなった。いざ進め自由の地へ！！』

モニターのゼロの言葉と共に１００万人のゼロ達は、次々と海氷船に乗り込んでいく。

「僕達も行くよ、カレン」

「うん……」

「大丈夫、また戻ってこれるさ。今度はちゃんと日本を取り戻してね」

「！ うん。 そうだよね」

「……必ず、必ずここに戻ってくる！ 日本に！」

「ええ、私達を取り戻す。今度こそ……私達の国を！」

こうして僕達は日本から旅立って行った。思い出のあるこの地を去ることは寂しい。

だけど、必ずまたここに戻ってくる。そう決意すれば、また進むことができる。

行こう、新天地へ……

## TURN 11

### 覚悟と責任（後書き）

作「ついに新天地へ！……ここが一つの分岐点になりますよ」

ル「中華連邦か……」

ラ「麒麟児、星刻がいる場所」

作「次回もいつ投稿できるかわかりませんがよろしくお願いします。

あ、それとこの話から私の個人的な理由で次回予告がなくなります。いつ投稿できるかわからないというのと、次話がまだほとんどできていない……といった理由で。

皆さん、本当にすみません」

**TURN 12      新天地（前書き）**

皆さんお待ちせしました。

2ヶ月ぶりに帰ってきました。

日本を脱出し、僕達黒の騎士団が向かった場所 中華連邦。

ブリタニア・EUと勢力を三分している連合国家。最も、現在は国の象徴たる天子を傀儡にし、政治を思うがままに支配している大宦官によつてその勢力は影を潜めている。（大宦官の一人、高亥はすでに死亡）

人民は大宦官の政治により、貧困と停滞にその活力を奪われている状態。

その大宦官は百万の日本人のために黄海に浮かぶ潮力発電用の人工島……蓬萊島を貸し与えた。

飯にも一年前の澤崎の一件がある以上、政治的意図があるのは当然だ。

だが、それでも構わない。僕達には僕達の考えがある。中華連邦が策を弄するというのはそれを利用してもらえばいいだけのこと。

事実、首都である洛陽さえ落とせば僕達の勝ちなのだから。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	8												



「……うむ。おおそは掴んだ。あとは戦闘空母か……斑鳩いかるがにガウエインのシステムを移したわけだな」

「蜃気楼にも使ったけど。何しろ、本体は海中から引き上げた時点でボロボロだったから……」

「それで？ 蜃気楼の武装はもう完成したのか？」

インドから新型のナイトメアも到着し、藤堂さん・ラクシャータと新型のマニユアルについて講義している。なにしろ今までは潜水艦だけだったが、黒の騎士団も今後は飛べる母艦を使えるようになるからな。

藤堂さんたちの新型と斑鳩いかるが、そして何よりルルーシュの新型『蜃気楼んきろう』は早めに準備しておかなければならない。ブリタニアや中華連邦との戦いはいつ起こるかさえわからないしな……

「ええ。ライのおかげでデータもとれたしね……蒼月の拡散構造相転移砲も、調整を済ませれば完全に使えるようになるわ」



「そうか……」

『かくきとじゅうせうそつてんいほう拡散構造相転移砲』……僕の蒼月にもついているが、あくまであれは試作品。本来の威力はあんなものではない。

だがデータ不足というのもあり、今までは僕が試作品を使っていた。

今となつては戦闘時のデータも集まり、実践で使えるほどになつたという。これは僕とルルーシュの機体に装備することになつている。あれは確かに便利だが、拡散構造相転移砲の反射角計算を手動で行わなければならないため、僕とルルーシュ以外には扱うことが出来ない代物なのだ。

蜃気楼には他にも機能がある。ルルーシュも決してナイトメアの操縦技術が低いわけではないが……如何せん相手が悪い。悪すぎる。今までもコーネリアやスザクなどのエース級パイロットを相手にしてきただけに、撃墜率がとても高く高い。玉城について騎士団内ではワースト2だ。

ゆえに今回のナイトメアは彼が十分に躍動できるように調整したのだ。

「一緒に沈んでいた機体は？」

「『ナイトギガフォートレス』とかいう奴か」

「私も探したんだけどねえ……」

千葉さんが僕達の会話に入ってきた。

ナイトギガフォートレス……確か、ブラックリベリオンの際にル  
ルーシュたちを追撃したジェレミアの機体だ。

ラクシャータが沈んでいたガヴェインを回収したわけだが、その  
機体はいくら探しても見つからなかったという。生存はまずないと思  
うが、どうも怪しい。パイロットであるジェレミアはゼロのことを  
深く憎んでいるし、注意したほうがよさそうだ。

「まあ、そのことは今考えても仕方がないでしょう。ガヴェインを  
回収できただけでも十分な成果なんですから」

「……そうだな。我々には各々の機体があるわけだしな」

「ええ……それでは僕は、ゼロに軍務の報告をしてきます」

僕は藤堂さん達と別れ、ゼロがいるであろう部屋へと向かった。

1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9
10	10	10	10
11	11	11	11
12	12	12	12
13	13	13	13
14	14	14	14
15	15	15	15
16	16	16	16
17	17	17	17
18	18	18	18
19	19	19	19
20	20	20	20
21	21	21	21
22	22	22	22
23	23	23	23
24	24	24	24
25	25	25	25
26	26	26	26
27	27	27	27
28	28	28	28
29	29	29	29
30	30	30	30
31	31	31	31
32	32	32	32
33	33	33	33
34	34	34	34
35	35	35	35
36	36	36	36
37	37	37	37
38	38	38	38
39	39	39	39
40	40	40	40
41	41	41	41
42	42	42	42
43	43	43	43
44	44	44	44
45	45	45	45
46	46	46	46
47	47	47	47
48	48	48	48
49	49	49	49
50	50	50	50
51	51	51	51
52	52	52	52
53	53	53	53
54	54	54	54
55	55	55	55
56	56	56	56
57	57	57	57
58	58	58	58
59	59	59	59
60	60	60	60
61	61	61	61
62	62	62	62
63	63	63	63
64	64	64	64
65	65	65	65
66	66	66	66
67	67	67	67
68	68	68	68
69	69	69	69
70	70	70	70
71	71	71	71
72	72	72	72
73	73	73	73
74	74	74	74
75	75	75	75
76	76	76	76
77	77	77	77
78	78	78	78
79	79	79	79
80	80	80	80
81	81	81	81
82	82	82	82
83	83	83	83
84	84	84	84
85	85	85	85
86	86	86	86
87	87	87	87
88	88	88	88
89	89	89	89
90	90	90	90
91	91	91	91
92	92	92	92
93	93	93	93
94	94	94	94
95	95	95	95
96	96	96	96
97	97	97	97
98	98	98	98
99	99	99	99
100	100	100	100

「おうライ。お前さんもゼロのところにか？」

「ト部さん。はい、ゼロに報告をしよう……ト部さんもですか？」

ゼロがいるであろう部屋に向かっている最中、ト部さんと会った。その手にはいくつかの書類が収まっている。

「まあな。なにせ今回は内政のこともあるしな……まったく、人使いが荒いというか……」

「すみませんね。人手がたりなくて……」

「別に構わんさ。こうしていても実感できるんだ。『俺は生きていく』と。本来なら、俺はもう死んでいたはずなんだからな……」

おそらくバベルタワーのことだろう。

あの時、ト部さんは一度死を覚悟した。あそこを自らの死に場所だと決めたんだ……だけど、今もこうして生きている。

「お前には感謝しているさ。お前のおかげで死に場所を間違えずにすんだ。この恩は必ず返す」

「……それなら、ぜひとも日本開放という形で返していただきたいですね」

「当たり前だろう？ というより、それは皆の最低目標だ。なにが何でも叶えてみせるさ」

「そうですね……」

その瞳に……迷いはない。まさに戦士の顔だった。

そうしてト部さんと話しているうちに、目的の場所に着いた。ドアに手をかけ、扉を開ける。

「ゼロ。僕だ、ト部さんもいる。書類を持ってきたんだ……ど？」

「……………お前さんらは何をしているんだ？」

思いがけない部屋の光景に硬直してしまった。

部屋ではカレンがルルーシュを押し倒していた……………  
ん？ あれ？ おかしくないか？

ルルーシュがカレンを押し倒していたるのではなく……………カレンが  
ルルーシュを！！！？？

バカな……………！ そんなこと、あるわけがない……………あつてはならな  
い！！

「駄目だぞライ。好きな女の性欲くらいちゃんと把握しておけ。そ  
んなんだからルルーシュなどに手をだすんだ」

「C・C・！？」

「……………ふう」

「……………お、おい……………ライ、さん？」

どうやら、仕事に追われている間に現状は大きく変わっていたよ  
うだな。

1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9
10	10	10	10
11	11	11	11
12	12	12	12
13	13	13	13
14	14	14	14
15	15	15	15
16	16	16	16
17	17	17	17
18	18	18	18
19	19	19	19
20	20	20	20
21	21	21	21
22	22	22	22
23	23	23	23
24	24	24	24
25	25	25	25
26	26	26	26
27	27	27	27
28	28	28	28
29	29	29	29
30	30	30	30
31	31	31	31
32	32	32	32
33	33	33	33
34	34	34	34
35	35	35	35
36	36	36	36
37	37	37	37
38	38	38	38
39	39	39	39
40	40	40	40
41	41	41	41
42	42	42	42
43	43	43	43
44	44	44	44
45	45	45	45
46	46	46	46
47	47	47	47
48	48	48	48
49	49	49	49
50	50	50	50
51	51	51	51
52	52	52	52
53	53	53	53
54	54	54	54
55	55	55	55
56	56	56	56
57	57	57	57
58	58	58	58
59	59	59	59
60	60	60	60
61	61	61	61
62	62	62	62
63	63	63	63
64	64	64	64
65	65	65	65
66	66	66	66
67	67	67	67
68	68	68	68
69	69	69	69
70	70	70	70
71	71	71	71
72	72	72	72
73	73	73	73
74	74	74	74
75	75	75	75
76	76	76	76
77	77	77	77
78	78	78	78
79	79	79	79
80	80	80	80
81	81	81	81
82	82	82	82
83	83	83	83
84	84	84	84
85	85	85	85
86	86	86	86
87	87	87	87
88	88	88	88
89	89	89	89
90	90	90	90
91	91	91	91
92	92	92	92
93	93	93	93
94	94	94	94
95	95	95	95
96	96	96	96
97	97	97	97
98	98	98	98
99	99	99	99
100	100	100	100

＊ ＊ 一部残酷な表現が含まれているので、音声のみでお楽しみください ＊ ＊

「はっ……があああああ！？」

「ほらほら、まだまだおねえするのは早すぎるよ!」

「!.....ぐっ.....ふっ!」

\*\*\*とてもお見せできない暴力行為が行われています\*\*\*

＊ ＊ 一部残酷な表現が含まれているので、音声のみでお楽しみください ＊ ＊

「いいや、君には無理だ！ 君は……最期の最後に僕を裏切り、カレンに裏切られた！！ 君の願いは叶えてはいけない！」





\*\*\*一部残酷、あるいはR18な表現が含まれているので、音声のみでお楽しみください\*\*\*

「……………」

「あ、あの……ライ？ 私は何も……！？  
むぐう……んう……はあ……んん！？ んー！！ んう………」

\*\*\*とてもお見せできない行為が行われています\*\*\*

「おお、やるなライ」

「……ゼロ、あんた大丈夫か？」

「……至急ラクシャータを呼んでくれ」



が心配しているじゃないか。まったく。

「……ト部。なにかあったのか？」

「いえ中佐。俺は何も見えていません」

「？　だがお前も先ほどゼロに報告に行ったのではないのか？」

「何も見ていません！！」

「……そうか」

藤堂さんがト部さんになにかあったのかを尋ねるが、ト部さんはごまかす。

賢明な判断ですよト部さん。僕だって無駄に血を流したくはないですからね。

「なあライ。カレンはどこに行ったんだ？　ゼロの所に行ったつきり戻ってこないんだが……」

「いえ、消毒したら力が抜けて立てなくなっちゃいましたね。自室

で寝てますよ」

「消毒？ 怪我でもしたのか？ 一体何が……」

「消毒しました」

「……いや、だから「消毒しました」……そうか。すまない。なんでもない」

今度は扇さんがカレンについて尋ねてくるが、僕は満面の笑顔で返す。

ああ、別に見舞いもしなくていいですよ。僕があとで行くので。

……話を戻すが、今神楽耶が話している内容。それは、この中華連邦の天子が政略結婚をさせられるという話だった。

そして、その相手は……僕達が敵対しているブリタニア。

「このたび、皇コンツェルンを通して式の招待状が届いたのですけ

ど……新婦はこの中華連邦の象徴、天子様。私を友人として招きたいと」

「そして新郎はブリタニアの第一皇子」

「オデュッセウスとかいう人」

オデュッセウス・ウ・ブリタニア。

ブリタニア皇帝の第一皇子。つまり、次期皇帝の最有力候補にあたる人物だ。皇帝不在時にはブリタニア国政の最高責任者ともなっているという。

だが能力的には凡庸で、その点ではシュナイゼルやコーネリアには数段劣ると聞く。

ブリタニアでは珍しいその温厚な男が南さん並みのロリコンだったとは……人とはわからないものだな。

ああ、そういえば南さんのことルルーシュには言っていなかったな。今度言っておくか。

それにしてもブリタニアの第一皇子が今、この中華連邦に来ているのか……

「用意していた計画は間に合いません。まさか、大宦官が……」

『いや、違うな。おそらくブリタニアの仕掛けだろう』

「同感だ。中華連邦　大宦官がそこまで大胆な動きを見せるとは思えない」

デイトハルトは大宦官のことをだしてきたが、あの男達がそんなに高度な政治戦略をたてるとは思わない。また仮に使ったとしても、つい最近黒の騎士団を迎えた彼らがそんなに早く手を打つとも思えない。

確かに今でこそ大宦官が中華連邦の政治の実権を握っているが、政治能力に長けているわけではない。絶対的な権力を手にしたことをいいことに、好き勝手に悪政を行っているだけだ。自分勝手に政治を独占している分、ブリタニア皇帝よりもたちが悪い。

「だとしたら俺達は……」

「……最悪のケースだな」

ゼロは扇さんのつぶやきに冷静に返すが、内心穏やかではないのだろう。

本来なら、こうなる前に先に天子を抑え洛陽まで攻め入るはずだった……それをブリタニアに先回りされてしまったのだから。

「何心配してんだよ。俺達はもうブリタニアと関係ないだろ？」

「……は？」

「国外追放されたんだからさ」

場の空気も読まずに玉城が超能天気な言葉を発する……わかっていたけれど、この男は馬鹿なのだろうか？ 国外追放の意味を全く理解していないように思える。

「あの……罪が許されたわけじゃないんですけど」

「それに政略結婚ですし……」

「中華連邦が私達を攻撃してくる可能性だって」

そんな玉城に意見するように、新しくオペレーターとなった三人の子達が恐る恐る話しに入ってきた。

……玉城よりずっと賢いな。さすが、デートハルトハルトが選出しただけのことはある。

国外追放だって罪に対する罰を与えただけであり、その罪は消えていない。ましてここにいる者達 日本人百万人全員が皇族殺し、総督殺害などの重罪を背負っているのだから。

「じゃあ何かよ!? 黒の騎士団は結婚の結納品代わりか!？」

「あら、上手い事言いますわね」

「使えない才能に満ち満ちているな」

「全くだ」



本当に上手いことを言うと感心する。この才能をもつと別の方面で活用して欲しいんだが……性格的にも無理か。

「呑気こいてる場合か！ 大ピンチなんだぞ、これは！」

「だからさあ……」

「それを今話してるんだよ」

ようやく現状に気がついたか。

だが本当に、これを許してしまえば僕達はブリタニアも中華連邦も敵に回すことになってしまう。そうなれば今後の動きも用意には出来なくなってしまう。

「ゼロ、この裏にはやはり……」

「ああ、もう一人いるな。険悪だった中華連邦との関係を一気に……こんな悪魔みたいな手を打った奴が」

おそらく、僕と彼らの予想の先には同じ人物がいるだろう。

1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9
10	10	10	10
11	11	11	11
12	12	12	12
13	13	13	13
14	14	14	14
15	15	15	15
16	16	16	16
17	17	17	17
18	18	18	18
19	19	19	19
20	20	20	20
21	21	21	21
22	22	22	22
23	23	23	23
24	24	24	24
25	25	25	25
26	26	26	26
27	27	27	27
28	28	28	28
29	29	29	29
30	30	30	30
31	31	31	31
32	32	32	32
33	33	33	33
34	34	34	34
35	35	35	35
36	36	36	36
37	37	37	37
38	38	38	38
39	39	39	39
40	40	40	40
41	41	41	41
42	42	42	42
43	43	43	43
44	44	44	44
45	45	45	45
46	46	46	46
47	47	47	47
48	48	48	48
49	49	49	49
50	50	50	50
51	51	51	51
52	52	52	52
53	53	53	53
54	54	54	54
55	55	55	55
56	56	56	56
57	57	57	57
58	58	58	58
59	59	59	59
60	60	60	60
61	61	61	61
62	62	62	62
63	63	63	63
64	64	64	64
65	65	65	65
66	66	66	66
67	67	67	67
68	68	68	68
69	69	69	69
70	70	70	70
71	71	71	71
72	72	72	72
73	73	73	73
74	74	74	74
75	75	75	75
76	76	76	76
77	77	77	77
78	78	78	78
79	79	79	79
80	80	80	80
81	81	81	81
82	82	82	82
83	83	83	83
84	84	84	84
85	85	85	85
86	86	86	86
87	87	87	87
88	88	88	88
89	89	89	89
90	90	90	90
91	91	91	91
92	92	92	92
93	93	93	93
94	94	94	94
95	95	95	95
96	96	96	96
97	97	97	97
98	98	98	98
99	99	99	99
100	100	100	100

「ゼロ。僕だ、カレンもいる……何だ？　話と云うのは？」

「もう……どうするかは決めたの?」

ドアがロックされたことを確認し、ルルーシュはゼロの仮面をはずす。

カレンにはライの方から説明したため、すでに流れは理解している。

「ああ……今夜、俺は招待された神楽耶様と共に祝賀会に行く。カレン、君は俺たちの護衛として同行してほしい」

「……君自身が行くのか?」

「不服か?」

「いや、別に不服はない……それで、僕はどうしろと?」

「お前には、ト部・仙波と共に作戦ポイントの偵察に行ってもらいたい」

「? 僕が偵察に? ……構わないが、君達の護衛じゃなくていいのか?」

ライが思わず言葉を返す。ライはナイトメア技術同様……いや、それ以上に白兵戦も優れている。ゆえに、ラウンズも同席すると思われる会場に護衛としてついていくものと思っていた。

カレンを護衛につけたとしても、さすがにラウンズや兵士を一人で相手にするというのは無理がある。

「理由は二つ。一つは、もしブリタニア・中華連邦が強制的に俺達を排除しに来たとき……お前まで失うわけにはいかないからだ」

「……さすがに、そこまでしないとと思うが……」

「念のためだ。保険はかけておくにこしたことがない」

ある意味ライは騎士団の中では最も失ってはいけない人物である。ライの能力的なことももちろんあるが、むしろその肩書きだ。

ライとカレンは今や『騎士団の双璧』と呼ばれ、騎士団の最強戦力として敵味方に知れ渡っている。その二人が同時にいなくなったとすれば、騎士団はラウンズと同等の実力を持つ戦力を一瞬で奪われることになる。

そして『皇』の名。

この名前は日本にとっては絶対的な意味を持つ。しかも、今となつてはライと神楽耶しかその名前を受け継ぐ者がいないのだ。その二人を失つては日本開放の意義が薄くなる。

「そしてもう一つの理由は……黎星刻という男が、動く可能性があるからだ」

「……彼か」

「ああ。ひょっとしたら俺たちの動きも察知し、先回りして何かしら作戦ポイントに仕掛けているかもしれない。ゆえにお前と、経験豊富なト部・仙波の両隊長に頼みたい」

「わかったよ。僕だって一度は自分の目で確認しておきたかったからね」

ライも納得し、話は終了した。

ルルーシュ・神楽耶・カレンは祝賀会に参加し、ブリタニアの黒幕と接触。

ライ・ト部・仙波は作戦ルートの偵察。

藤堂やC・C達に後のことを任せ、彼らは動き出そうとしていた。

「それじゃあ僕は一足先に、ト部さんと仙波さんに伝えてくるよ」

「ああ、頼む」

そう言っただけでライは部屋を退出する。

ライがいなくなったことを確認すると、今まで口を挟まなかった  
C・C が話し始めた。

「……それで？ ライを祝賀会に参加させない本当の理由はなんだ？」

「え？ どういうこと？」

「先ほどいったことも事実だ……だが本当のことを言うのなら、あいつをラウンズやシュナイゼルと接触させないためだ」

「……枢木との通信。やはりあれを気にしてか」

「それもあるが、あいつの出自……そしてギアスのことも含めてだ」

先のブリタニアとの戦闘時。あの時確かにスザクはライの捕縛を皇帝に命じられたと言っていた。しかも、あの一件で他のラウンズもライを狙ってくるのだらう。ならばできるだけ素顔は見せないほうが良い。

そして、ライの出自をシュナイゼルに悟られないようにすること。ライはブリタニアの研究施設から逃げ出した。その情報がどれだけシュナイゼルに伝わっているかは全くわからない。ゆえに少しでもライの情報をブリタニアに与えるのは防ぎたい。

さらにライのギアス。

ライは一度神根島でブリタニア軍から逃走するため、シュナイゼルのギアスをかけた。ルルーシュとライのギアスは一人の人物に対しては一回しか使えない。つまりライはもう二度とシュナイゼルのギアスを使えないということだ。

ギアスを解除することができるというのなら話は別かもしれないが、話はそんな簡単にはいかない。

だからこそ、ルルーシュはライの祝賀会への同行を防いだのだ。

「まあ、ライも納得していたからいいが……お前達の方は大丈夫な

のか？」

「ふっ愚問だなく・く。ライにも言っていたが、あくまで保険をかけたただだ。」

俺たちの読みどおり本当に黒幕があつた男だというのなら……俺たちは何の問題もなく帰ってこれるさ」

「私もいるんだから、安心しなさい」

「……そうだな。よろしく頼む。親衛隊長」

「……………了解です」

ルルーシュの皮肉めいた言葉に了承の返事を返し、カレンも退出していった。

騎士団も慌ただしく動き始めた。





## TURN 13

### 前哨戦（前書き）

改めて本編を見て、そして今回書いていて……とあるキャラの株が大暴落しました。

いや、前から高くはなかったんですけどね？ 最底辺に墮ちていった感じです。

でも本当に……敬愛している人の考えを否定することは、へたすればその人自身を否定することになると私は思います。

少なくとも、あの発言をユーフェミアが聞いたら傷つくだろうな……

…

- - - 洛陽・朱禁城 迎賓館 - - -

神聖ブリタニア帝国第一皇子、オデュッセウス・ウ・ブリタニアと中華連邦最高権力者である天子の婚姻祝賀会。

祝賀会の会場である朱禁城の迎賓館には中華連邦の位の高い大臣達、そしてブリタニアの貴族達が勢ぞろいしていた。

列席者の思惑はそれぞれにある。

ブリタニアの貴族は己の力を誇示する為に。

中華連邦の貴族は己の保身をする為に。

欲が渦巻くただの我欲だけが満ちている場でしかない。そこには今回の婚礼を祝う者など居る筈もない。

その中にはブリタニア皇帝の命により、エリア11から訪れていくスザク達ナイトオブブラウンスの姿も見える。

「天子様は……納得しておられるのでしょうか？」

「向こうがそう言っているからには、信じるしか……それにこれは平和への道の1つだし」

「はぁ……」

「ここは招待客として楽しみましょうよ」

「そう……ですね」

スザクは共にきていたセシルへと話し込む。

祝賀会の中心で、オデュッセウスの隣に座っている天子。その表情には不安の色しか見えない。この状況に気づき、一人怯えているのだろう。

まだ幼い少女が大の男と政治的戦略のために結婚させられようとしている……政略結婚以外の何物でもない。

スザクは八年前を思い出していた。

当時、まったく同じ理由で父・枢木玄武がナナリーとの政略結婚を目論んでいたことを。

あの時は父が死に、ナナリーもその後皇族としての権利・素性を全て捨てたためこのような話はなくなった。だが、今回は……

「スザクーっ!!」

「？」

……そんなシリアスな空気をぶち壊すかのようにジノの明るい声が届く。

その手には会場のテーブルに乗っていたのであろう皿がある。

「あつたあつた。これだろ？ お前が言っていたイモリの黒焼き。どうやって食べるんだ？」

「これは料理の飾りだつて」

「飾り？ ……でも、さっき似たような鳥を食べてましたよね？」

「鳥つて……鳳凰を!？」

「そついう料理なの？ お肉かと思ったら人参で」

黒焼きといいながら赤い時点で何かしら気づくべきだろう……というより前提として、こんなところでイモリの黒焼きが出てくとは思えない。

ジノは現時点で世界で唯一セシルの料理をマズイと思ってない人物　つまり、この男も普通の人と比べて味覚が色々ずれているのだ。

「アーニヤ、どうやらこれは料理の飾りなんだってさ」

「記録……」

スザクを除いたラウンズたちは、こういう場にも慣れているのかすっかりパーティーを楽しんでいる。

そんな空気の中、会場内に司会を務める男の声が響き渡る。

「神聖ブリタニア帝国宰相、シュナイゼル第二皇子様、ご到着！」

会場内の視線がシュナイゼルへと集まる。

シュナイゼルは一人の少女　ニーナ・アインシュタインの手を引きながら現れた。

ニーナはブラックリベリオン後、科学技術・ユーフミアへの敬愛・ゼロに対する恨みをシュナイゼルに買われ、彼直属の研究機関『インヴォーグ』のチーフとなっていた。

スザク、ジノ、アーニャラウンズ3人はシュナイゼルの前で膝をつき、3人を代表してジノが口を挨拶をする。

「お久しぶりです。皇帝陛下からこの地ではシュナイゼル殿下の指揮下に入るようにと」

「ラウンズが3人も。頼もしいね。ああ、ただ……」

「？　何か？」

「ここは祝いの場だ。もっと楽しんでくれないと」

「わかりました」

ジノが苦笑いして立ち上がり、スザクとアーニヤもそれに続いた。

「スザク。学園のみんなは元気？」

「ああ、ほら」

「はい」

「…………ミレイちゃん」

「…………ニーナ？」

スザクは、ロイドの婚約者でこのパーティーに来ていたミレイ・アッシュフォードへと視線を向けると、ニーナもその視線を追う。

ミレイと再開したニーナは積もる話もあるのだろう、シュナイゼルの許可を得て、会場から離れていく。

シュナイゼルがパーティーに参加しさらに会場がにぎやかになっていくが、その空気を切り裂くかのように司会の声が会場内に響く。



「皇コンツェルン代表、皇神楽耶様、ご到着！」

「神楽耶？ ……なにッ!？」

「ゼロ……？ こんなに堂々と……」

「傍にいるのは、紅蓮のパイロットじゃないか……蒼月の方のパイロットはいないみたいだが」

「……」

『（シュナイゼル。俺とライの予想は当たっていた。やはりあなたが黒幕か……）』

神楽耶と共に現れたゼロとカレンの姿を見て周りがざわめき始める。

大宦官の命により、中華連邦の兵士達が彼らのゼロ達の周りを取り囲む。

カレンもゼロと神楽耶を守るように前面に立つことで一触即発の空気が漂うが、それを止めたのは他でもないシュナイゼルだった。

「止めませんか、争いは。本日は祝いの席でしょう？　このような両国にとって目出度き日に血を見ることがあつてはなりません」

「ですが……」

「皇さん。明日の婚姻の儀ではゼロの同伴をご遠慮いただけますか？」

「それは……致しかたありませんね」

「ブリタニアの宰相閣下がおっしゃるのなら……引けーい!!」

大宦官の言葉で、兵士が引き下がる。

これにより、ゼロとシュナイゼルの間にあつた障害が消えたが、ゼロの視界を塞ぐようにスザクが立ちはだかる。この間に、ジノとアーニヤもシュナイゼルの元に駆けつけた。

そして、警戒心剥き出しのスザクを見て神楽耶は笑みを浮かべながらスザクに話しかける。

「枢木さん。覚えておいでですか？　従兄妹の私を」

「当たり前だろ」

「キョウト六家の生き残りも、私たちだけになってしまいましたね」

この『私たち』の中には実はライのことも入っているのだが、ライの出自について詳しく聞いていないスザクからは気がつく様子が見られない。

「……桐原さんたちはテロの支援者だった。死罪は仕方のないことだった」

「お忘れかしら？昔ゼロ様があなたを救ったことを」

「ッ！！」

「その恩人も、死罪になさるおつもり？」

「それと……これとは……！」

「残念ですわ。言の葉だけで人を殺せたらよろしいのに……」

「ッ！！」

どうやら話術ではスザクは神楽耶の足元にも及ばないらしい。舌戦で負けたスザクは完全に言葉を失ってしまっていた。

……神楽耶の言うことは最もだが、実際は言葉だけで人を本当に

殺すことが彼女の身内に二人もいる。しかも、その人物が彼女が慕っている二人であることは神楽耶は知らない。

するとスザクが黙り込んだことで、今まで口を挟まずに傍観していたゼロが動き出す。

『シュナイゼル殿下』

「ん？」

『1つ……チェスでもいかがですか？』

「ほう……」

『私が勝ったら、枢木卿を頂きたい』

「えっ!？」

『神楽耶様に差し上げましょう』

「まあ！ 最高のプレゼントですわ!」

『楽しみにお待ちください……（スザクさえいなくなれば、ここにいる全員にギアスをかけられる。逆転のチェックメイトだ!）』

ルルーシュは何もスザクが欲しいというわけではない。  
ギアスをかけるにあたって、彼のギアスが利かないスザクが邪魔  
なだけだ。

ゼロが言い終わると、今度はシュナイゼルが口を開く。

「……では私が勝ったら、その仮面をはずして君の素顔を……いや、  
違うな」

「？」

「私が勝ったら、明日の婚姻の会場で今この場にはいない騎士団の  
双壁の少年をいただこうかな？」

「なッ！？」

「こちらが帝国最強の騎士の一人をかけるというのだから、君にも  
それだけの対価が必要だと思うが？」

それに私としてもラウンズ三人と互角以上に渡り合うほどの実力  
を持ち、ゼロの信頼を得て、騎士団最強の名を語ることが許された  
彼には個人的興味がある」

今度はゼロ達が驚く番だった。

ゼロの素顔よりも、この場にはいないライを差し出す様に言ってきたのだから。

これは、ライがシュナイゼルにかけた『僕に構うな』というギアスがすでにその効果を失っていることをも示している。

「……いいでしょう」

「えー!？」

「はは、楽しい余興になりそうだね」

カレンが驚愕するが、ゼロは今更退く事はできない。  
ラウンズの一人と双壁の一人をかけた余興が、ここに始まるつと  
していた。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

場所が変わって迎賓館のバルコニー。

学園を離れて久々の再会となったミレイとニーナは積もる話をはじめていた。

ブラックリベリオン後、まともに連絡も取れていなかった二人。  
二人の関係は……心は大きく変わっていた。

「でもよかった。ニーナもがんばってるみたいだし……なんだか安心しちゃった」

「安心？」

久しぶりにニーナの姿を見て、ミレイがつぶやく。この一年はミレイにとってもつらい一年だった。

生徒会役員であつたスザクはラウンズに就任し、軍務が忙しくなり最近復学するまでは連絡さえかなわなかった。

ライとカレンは黒の騎士団の一員だったことが判明し、ブリタニ

アに追われる身となり、もはやまともな再会は期待できない。

そんな中、さらに二ーナまで学園を去った。今まで生徒会を引っ張ってきたミレイの衝撃はとても大きなものだった。

「うん。何か困ったことがあったら相談に乗るから」

「やめて……私ミレイちゃんのことは好きよ？ でも上辺だけの女は嫌い」

だが、そんなミレイの気遣う言葉は今の二ーナには届いていなかった。

「……ユーフェミア様は逃げなかった。命を懸けて私を助けてくれた。ユーフェミア様だけが私を救ってくれたの」

「私だって！」

「ッ！ 口だけの同情はやめて！ ミレイちゃんはいつも遊び気分で困ったらアッシュフォードのたてを使うのよ！」



ライのときだってそうだった！！ ロイド先生との交流だって、  
そうゆう事でしょ！？」

「……！」

「私をいつも下に見て、保護者の顔をして偽善に浸って！ もう違  
うの私は！ 私を認めなさいよ！」

息つく暇も無いほどの剣幕で、今まで積もり積もったものを全て  
吐き出すが如く一気に捲くし立てたニーナ。

かつての『大人しかった』ニーナのあまりの豹変振りに、ミレイ  
は返す言葉もなく、反論も出来なかった。

- - - -  
- - - -  
- - - -  
- - - -

余興は別室で行われる事になった。

ゼロとシュナイゼルの対局が始るがどちらも強く、一進一退の攻  
防が続く、決着はなかなかつかない。

対局模様はほぼ互角だが、僅かにゼロが押している。

シュナイゼルの傍には副官であるカノンとスザクが立ち、ゼロの傍にはカレンが護衛としてついている。

シュナイゼルの後方では、ジノとアーニヤがカレンを見定めるようにじっと観察していた。

「……これが黒の騎士団の双璧の一人。紅蓮のパイロット」

「この前のあいっだろう？ 手配画像よりずっといいな。ああいうのタイプなんだ」

ジノはそう言ってカレンに向けて手を振った。それを見たカレンは咄嗟に顔を背けた。

……おそらくライがいたなら決闘を申し込んでいたことだろう。

「……そんなことどうでもいい。それよりも、もう一人の方も見ておきたかった」

「蒼月のパイロットか？ 確かにな……だがそっちの方は、私がナイトメアから引きずりおろしてからにするさ」

「……私がやる」

一方で、この場にはいない自分達を破った相手への再戦への意欲をさらに伸ばしていた。

その間にも二人の対局は進み、盤上の駒も随分少なくなってきたが、まだ決着はつかない。

「強い……！ 殿下が押されている！」

今までシュナイゼルを間近で見て、その実力をよく知っているカノンがつぶやいた。

だが、そうは言っても二人の実力ほぼ互角。ゆえに一瞬の気の抜きが命取りになる。

「ほお、まさか切り返されるとは……（手ごわい！ さすがは兄上。俺が唯一チェスで勝てなかった男。だが……それは8年前の話！今の俺はライとの勝負も得て、さらに実力をつけてきた！）」

そう言ったゼロは少し考えると、黒のキングを手につった。

「キングを……？」

「王から動かないと、部下は付いて来ない」

そう言ってゼロは黒のキングを前に進めた。

「見識だね。では、こちらも……」

「ッ……！」

シュナイゼルが負けじと白のキングを前に進める。これには思わずゼロも僅かに顔を上げた。

これに対してゼロも黒のキングをさらに前に進める。

まさにこれは意地の張り合いであり、せめぎ合いである。

「……？」

そしてちょうどこのとき、部屋に入ろうとしたニーナがその場の雰囲気が変わっていることに気がついた。

「どうです？ これ以上は進めないでしょう」

ゼロがさらにキングを前に進めた。  
一マス開けた状態で白と黒のキングが向かい合っている。

「ふむ……このままではスリーフォールドレピティションとなる」

「私も本意ではないが、引き分けかな？」

スリーフォールドレピティション

チェスにおいて相手の手で同一局面が3回生じた時、または自分の手で同一局面が3回生じること。将棋で言う千日手。自分の手番でそれをアピールすると引き分けとなる。

その場で見ているものの全てがこれで終わり      この勝負は引き分けだと思った。

だが、そのときシュナイゼルが白のキングを手に取る。

「いや……白のキングを甘く見てはいけけないな」

「まさか……！」

その言葉と同時に、シュナイゼルが黒のキングの前に白のキングを進めた。

「チエツクメイト」

「それではゼロが駒を進めれば……!」

「シュナイゼルの……」

「キングが取られてしまう!」

その場の誰もがシュナイゼルの打った手に困惑している。それもそのはず。シュナイゼルの一手は、まるでわざと負けようとしているかのようなものだったのだから。

『……なんですか、これは？ 拾えと言われるのか……勝利を（ふざけるな！ この誘いを受けるということは、屈服するという意味だ。許してはいけない、こんな屈辱を受けるなど!）』

そしてゼロの手が動いた。キングは進むことなく味方のポーンの後ろへと下がる。

ゼロが取った手は駒を引かせるものだった。ゼロ　ルルーシュは実利よりも己の誇りをとった。

それに観客がざわめく。

「……皇帝陛下なら迷わず取っただろうね」

『！！』

「君がどういう人間が少しわかった気がするよ」

『……ッ！（シュナイゼルッ！　あなたはそうやっていつも人を見下して……！）』

ゼロが自分の失策に呆然とするなか、彼に向かってニーナが走り寄ってきた。



「ゼロ！！ユーフェミア様の仇つ！！！」

『！？』

「止めるんだ、ニーナ！！」

叫ぶニーナの手にはナイフが握られており、慌てて近くにいたスザクが止めに入る。止められるとは思っていなかったニーナは、復讐を止められた怒りの矛先をスザクに向けた。

「どうして邪魔するのよ！ スザクはユーフェミア様の騎士だったんでしょ！？」

「っ！！（そうだ。僕は何故ゼロを……）」

「あなたは、やっぱりイレヴンなのよ！！」

スザクが戸惑っている間に、ニーナはスザクを振り払い再びゼロを刺そうとする。

だが、今度はゼロの護衛であるカレンが腕を押さえつけ、その刃を止めた。

「ニーナッ!」

「カレン……あなただって、半分ブリタニアの血を引いているくせに……」

「違う。私は……私達は日本人よ」

「日本人？ イレヴンでしょ？ ……イレヴンのくせに友達のことをしてっ!」

カレンの言葉もニーナには届かない。

悲しいことにニーナが言っていることは、彼女が崇拝しているユーフェミアを否定する言葉だった。

「返してよ、ユーフェミア様を！ 必要だったのに!! 私、女神様!!」

「ニーナ……」

「なんで……ゼロが、殺したのに……」

その言葉と同時に、ニーナはスザクに両手を押さえられ、その場に力を失って崩れ落ちた。

これも、一つの悲劇が引き起こしてしまった悲劇。

「……ごめんなさい。今まで黙ってて。でも、もう私とライは……」

ニーナが手にしていたナイフをカレンが拾うと、近くに來たジノに手渡す。

「すまなかったねゼロ。余興はここまでとしよう。

……それと確認するが、明日の参列はご遠慮願いたい。次は、チエスなどでは済まないよ」

シュナイゼルは厳しい目をして、ゼロに警告した。次はないと。ゼロは特に何も言わなかった。これで失礼しよう、とマントを翻し、勝手に出入り口へと向かう。

こうして波乱の祝賀会は幕を閉じた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7202t/>

---

宿命に抗いし反逆者

2011年11月26日19時53分発行